



山  
ぎ  
ら

第46号

平成27年11月

関東氷上郷友会

おもわず新しい

# NEXT



人びとが暮らしの中で願っていたことに、それ以上のモノで、最良のカタチで応えていきたい。  
そして、人びとの「心」を包み、「夢」を装うことができる企業  
ネクスタはそういう存在であり続けたいと考えています。

## ネクスタ株式会社

東京支店 111-0051 東京都台東区蔵前2-4-5 K-FRONTビル TEL 03-3861-2331

## ネクスタ ラッピー株式会社

東京工場 121-0011 東京都足立区中央本町5-22-12 TEL 03-3849-6611  
千葉工場 270-0202 千葉県野田市関宿台町2192 TEL 04-7196-1721

## ネクスタ パッケージ株式会社

栃木工場 323-1104 栃木県栃木市藤岡町藤岡4938 TEL 0282-62-3321



山  
ぎ  
ら

第46号

山去ればひときは激し蟬しぐれ

隆男

山ざぐる 第46号 目次

〈表紙〉 笹倉鉄平画「わらべ地蔵」／〈扉〉 俳句Ⅱ渡邊隆男／写真Ⅱ徳田八郎衛

これを如何せむ……坂上勝朗 5

平成26年度「ふるさとの会」開催……6／多川響子氏 ピアノコンサート……8

平成26年度「ふるさとの会」出席者……10／会計報告書……11

新役員一覧……12／懇親会スナップ……13／祝寿の方々ご紹介……17

《ふるさと随想》

中学時代の思い出……今田二三夫 24

目立ちたくはないけれど、

柏原と織田家を知ってほしい……織田信孝 27

追憶「恩師の薫陶」……足立敏晴 29

戦時中疎開先での思い出……大垣忠男 32

今思うこと……吉見起一 33

地方から「しあわせ」を考える……田代春佳 35

《近況・エッセイ》

モンテッソーリ教育と私の夢……池田和子 46

遙かなるチャコ……前田武彦 48

細見綾子さんのこと……藤田玲子 54

岡倉天心市民研究会に参画して……鴻谷正博 56

医学と信仰……前田和希 59

私の仕事(雑)セシアテクノ……足立忠司 62

古希を超えて思うこと……足立東一郎 65

終活 献体という選択肢……井出恭子 67

柏陵同窓会に参加させて頂いて……石塚富貴 70

常岡幹彦氏を想う……坂上勝朗 72

弔辞 上野重喜さん……高見秀史 74

《丹波人物記》 地籍調査の先駆者、高槻文三郎春日町長……徳田八郎衛 76

《丹波通信》 たんば黎明館……荻野祐一 82

《私の職場》 50の手習い テレビ出演格闘の日々……近藤和行 86

《インタビューコーナー》

山名昌衛さん 山名フィロソフィーで世界へ飛翔

—誠実と情熱と感動の人間力——編集部 90

《丹波ブランド紹介》

《その6・大納言小豆》 最高の品質誇る……小田晋作 95

《丹波のまつり》

氷上町のまつり……進藤凱紀 106

葛野村の秋祭り内尾神社例祭

(旧氷上郡葛野村)……足立義雄 113

川裾祭りの思い出……足立 勝 116

「川裾祭り」あれこれ……大木辰史 117

成松川裾祭り……本城英明 120

成松「川裾祭」今昔……保尾治三 122

《丹波を撮る》……徳田八郎衛 40

《MYギャラリー》 徳田悦男／井上 巖／岸本敏子／井出恭子……101


ふるさとトピックス (丹波新聞から)……105

《山ざる文芸》 俳壇・歌壇・詩座・語り座……126

BOOKS……138 会員だより……140 同窓会だより……147

インフォメーション……149 寄付者芳名……153

《協賛広告》……154 編集後記……164



名さえ目出度い入船山に 町のまもりの八幡宮  
青葉がくれの三重の塔を 啼いて空ゆく時鳥  
庭の老松アむかしの名残り 今むしのぼす御殿跡  
見たか柏原大神川に かけて渡すは木の根橋  
咲いて見事を桜の蔭に 春の花見は鐘ヶ坂  
天の橋やら雪さえかけて 鬼の架橋見えかくれ  
町の真中櫓の上で つつじ太鼓がひるぬする  
丹波柏原忘れてなるか 山の中だが城下町  
誰と別れか入船山の 夜明け鳥が啼いてくる  
昔思えば鐘ヶ坂峠 幾度涙でこしたやら  
鬼門封じで名高い寺は 丹波柏原円城寺  
いとしなつかし讓葉山の 下は柏原忘らりよか

(柏原小唄 野口雨情 作詞)

# これを如何せむ

会長 坂上勝朗



壯絶な戦いの場に擬せられるビジネスの現場からお役御免になってはや十年、一病に見舞われはしましたが、なんとか切り抜けて、この世知辛い世に「楽しまざるして是を如何せむ」というような境地の実現をめざして日々を送っております。この言葉は、伊達政宗の漢詩の中に見えるもので、わたくしの好きな言葉のひとつです。政宗は衆知のとおり独眼竜と呼ばれた勇猛果敢な戦国武将でしたが、同時に優れた外交手腕の持ち主でもありました。天下人にこそなりそこねはしましたが、秀吉や家康に巧みに取り回り、奥羽四十余郡の版図を安堵されたのでした。蛇足ながらこの詩の全文を紹介しますと

酔余口号 酔余の口号

馬上過青年

馬上に青年を過ぐ

世平白髪多

世平たいらにして白髪多し

残軀天所赦

残軀ざんぐ 天の赦ゆるすところ

不樂是如何

楽しまざるして是を如何せむ

意味は概略次のようになりましょうか。

酔いにまかせて口ずさむ

若い時は戦に明け暮れた。世が静まっていたいまは白髪  
の頭を抱える有様となつてしまつたが、せつかく神  
様の御赦しを得て生きながらえた身。これを楽しま  
ないでどうしようというのか。

政宗はその信条どおり五十歳以後の余生を平穩無事  
に過ごし、七十歳の天寿を全うしたのでした。朝鮮出  
兵の時も、東軍について関ヶ原で戦つた時にも勇將と  
いわれる割には、あまり戦果をあげていないのに、東  
北の王者として名を馳せたのは、機を見るに敏いと同  
時に、人柄にもそれなりの魅力があつたものと考えら  
れます。

さて翻つて我身はといえば、機を見るに鈍、悠々自  
適には程遠い毎日ながら、今しばし天の赦しを得たい  
ものと願っています。



## 平成26年度「ふるさとの会」開催

平成26年度「ふるさとの会」は11月15日(土) 11時より、東京都千代田区の学士会館で行われました。

総会に先立つセミナー、今年には「音楽ですこやかに」と題して、ピアニストの多川響子さんにプロのすばらしいピアノ演奏を聞かせていただきました。生の演奏を間近に見、聞かせて頂き興奮冷めやらぬうちに楽しい演奏会を堪能できました。(8頁参照)

総会では坂上勝朗会長の挨拶と報告、新役員の選出、引き続き、谷口副会長(会計担当)よりの会計報告、谷監事より監査報告があり、拍手で全ての議案を了承頂きました。

今年には丹波よりの「丹波U&Iターンプロジェクト」の皆さん5名の特別招待者から丹波の魅力を再発見し、全国に発信している中で首都東京での拠点づくり情報を！との嬉しいお願いと報告がありました。

その後、満80才を迎えられた郷友の方にお祝いを申し上げる「祝寿会」に移り、ご案内を差し上げた22名の皆さんのうち参加頂いた安達健一郎さん、瀬々妙子さん、勢川武彦さん、野村節三さんに坂上会長より祝辞と記念に似顔絵(若い頃のお顔を思い出させる)を贈りました。皆さんお若くとても年齢を感じさせない



見事な容姿とお話に感心するばかりでした。

(なお、似顔絵の制作は、ふるさとひょうご「道草」句会の宗匠住田道人氏にお願いしました。)

懇親会は岸本副会長の司会で開会、足立謙悟常任理事の乾杯で何時もの楽しい宴会がスタート、御来賓の紹介とご挨拶では、丹波市より柏陵同窓会の谷水会長、柏原高校の大西校長、兵庫県東京事務所の広瀬次長より兵庫県知事のメッセーじと、丹波市長から祝電をいただきました。又丹波新聞社荻野社長よりこの秋の丹



祝寿の似顔絵を手に。左から安達さん・瀬々さん・勢川さん・野村さん。

波市の台風災害に

つき災害の現況経過報告も詳細にいただきました。

何時もながらあ

つという間に予定時間が終わってしま

まうという楽しいひとときを過ぎ

し、恒例のお楽しみ抽選会は参加者全員にチャンスが



丹波U&Iターンプロジェクトの皆さん

あり、空くじ無しで「丹波の山芋」、「丹波黒豆」、「丹波産古代米・赤米」などがそれぞれ全員に渡るようされ、参加者全員何かのお土産を頂いて帰ることが出来ました。総会の締めくくりは郷友会のコーラスグループ「どんぐり会」の発表会。昨

年同様メンバー以外の同好者も飛び入り参加、笹倉強先生の指揮で『いずみのほとり』を、他全員で楽しめる輪舞曲は参加者全員での大合唱になり大いに盛り上がりました。ちなみに『いずみのほとり』の作詞者は春日町(旧大路村下三井庄)出身の故深尾須磨子さん(詩人)です。

和やかで盛会な会も来年又元気に会えることをお約束し閉会となりました。  
(新任理事は石橋順子氏、安井孝之氏。退任理事は池田忍氏、芦田重秋氏、可部美智子氏、塚口恭一氏でした。)

(岡)

# 多川響子氏

ピアノコンサート

## 【音楽ですこやかに】

♪ おなじみの名曲の数々と

明るいおしゃべりのピアノコンサートで、

楽しいひと時を♪

### プログラム

1. ショパン 練習曲エオリアンハープ
2. ショパン ワルツ第6番「子犬」  
ノクターン第19番
3. ショパン エチュードよりOp. 10-12  
「革命」
4. モーツァルト きらきら星変奏曲
5. ベートーベン ピアノソナタ第14番「月光」
6. ショパン ポロネーズ第6番「英雄」

### プロフィール



柏原町出身。京都  
在住。柏原高校四七  
回生。京都市立芸術  
大学音楽部卒業。同  
大学院研究科からド  
イツ・ドレスデン音  
楽大学留学、卒業。

在独中、ドイツ、ポーランドにて様々な演奏会に出演。  
第九回宝塚ベガ音楽コンクール入選。コントラバス奏者  
サンデル・スマランデスク氏とのデュオリサイタルで二  
〇〇二年度パロックザール賞受賞。二〇〇九年〜二〇一  
一年大阪・京都で開催した九回シリーズ「ベートーベン  
ピアノソナタ完全全曲演奏会」三五のソナター」は日本  
経済新聞始め各紙に取り上げられるなど大きな話題を呼  
んだ。最近の主な演奏会ではソロリサイタル「バッハ&  
バルトークの世界」「どいつ・ロマン派の旅」の他、NH  
K交響楽団首席チェリスト藤森亮一氏との「ベートーベ  
ンチェロとピアノのためのソナタ全曲リサイタル」を始  
め、著名な演奏家との共演も数多く開催。みんなが分か  
りやすく心から感じて楽しめるレクチャーコンサートや  
子どものためのコンサートなども定評あり。市立京都堀  
川音楽高校、滋賀県立石山高校にて後進の指導も。



ピアノコンサートを開催するには十分といえない宴会ホールでの演奏会になりまして、主催者側は恐縮するばかりでしたが、そのようなハンディーは物ともされず、約一時間弱に亘って素晴らしい演奏を聞かせていただきました。

一〜六のプログラムに沿って、それぞれの曲の解説、作曲家を取り巻く当時の状況、彼らの心情などについて分かりやすく解説して下さりながら優雅に且つパワフルに演奏して下さいました。

馴染みのある名曲の数々は弾むように楽しげに、また激しく情熱的に、時にはしんみりと囁くように、そして力強く逞しいタッチで、作曲家魂が乗り移ったかの如くに、曲に応じての正に変幻自在な演奏に心を揺さぶられ、感動させていただきました。美しいピアノの音色に、曲の持つイメージを膨らませながら、楽しい一時を堪能させていただいたのでした。素敵な音楽をありがとうございました。

(岡田)



◎平成二十六年年度「ふるさとの会」出席者

(順不同・敬称略)

来賓

谷水克己

柏陵同窓会会長

大西伸弘

柏原高校校長

荻野祐一

丹波新聞社社長

広瀬一雄

兵庫県東京事務所次長

大西啓義

東京兵庫県人会常任幹事

特別招待

丹波U&Iターン プロジェクトチーム

田代春佳(我孫子市出身・春日町在住) 荘司隼

也(芦屋市出身・氷上町在住) 本間速(神崎郡出身・

市島町在住) 湯山加奈子(御殿場市出身・春日町

在住) 吉竹恵里(山南町出身・山南町在住)

講師

多川 響子

祝 寿 昭和9(1934)年生まれ

安達健一郎 瀬々妙子 勢川武彦 野村節三

市島町

石橋順子 井出恭子 高見秀史 藤田千治

藤田純 丸川健三郎 丸川宥次郎 丸川寛子  
石川陽基 山本喜則 吉見弘文 吉見起一

柏原町

池田和子 内堀祥司 岡吉明 岡洋子

岡田昌子 可部美智子 河本幸子 瀬々妙子

谷敬三 徳田八郎衛 三觜洋子 吉田素子

吉竹覚

春日町

金出一郎 木呂子恵美子 久下善生

近藤仁司 原利充

山南町

池田忍 大野義昭 勢川武彦 仲一聰

中居篤子 野村節三 原谷洋美 廣瀬安伸

廣瀬庸世 若森敏郎

氷上町

足立謙悟 堤康子 倉知佐和子 足立義雄

安達健一郎 井上巖 上高子 上田道代

岸田勇 岸本勲 岸本敏子 坂上勝朗

谷口浩章 藤田玲子 本城英明

西脇市

笹倉強

# 会 計 報 告 書

(平成 26 年 7 月 1 日～平成 27 年 6 月 30 日)

関東氷上郷友会  
 会計理事・谷口 浩章  
 原谷 洋美

(単位：円)

収 入 の 部			支 出 の 部		
科 目	金 額	摘 要	科 目	金 額	摘 要
繰 越 金	1,864,739	郵便貯金 1,064,739	出 版 費	1,004,754	『山ざる』45号
		定額貯金 800,000	通信・印刷費	147,191	総会・役員会案内等
		振替貯金 0	総 会 費	624,587	総会関係支払
年会費収入	410,000	延204名	会 議 費	159,861	役員会等
総会費収入	384,000	50名	支払手数料	370	振替手数料
役員会費収入	129,000	43名	消耗・備品費	145,264	事務品・広告費・慶弔費
寄 付 金	348,000	延76名	繰 越 金	1,610,267	郵便貯金 810,267
広告料収入	510,000	延45名			定額貯金 800,000
冊子代收り	46,460				
そ の 他	95	利子			振替貯金 0
合 計	3,692,294		合 計	3,692,294	

以上

監査の結果、上記のとおり相違ありません。

平成27年 8 月 8 日

会計監査

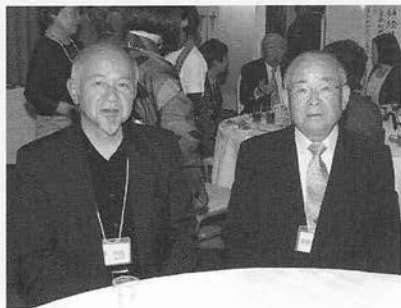
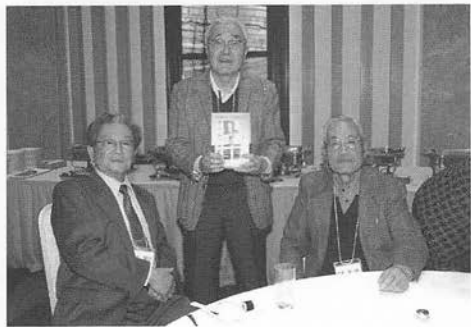
中居 篤子 中居  
谷 敬三 谷



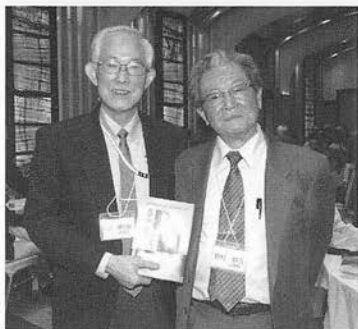
# 懇親会 スナック

撮影：岡 吉明









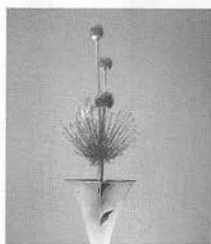


## 祝寿の方々ご紹介

郷友会では毎年の総会で八十歳を迎えられる会員に祝寿のお祝いをしておりますが、今年その記念の年に当たられる27名の方に、以下の項目でアンケートを依頼しました。そのうち、10名の方から回答頂きましたのでご紹介します。(五十音順)

- ①生年月日
- ②ご出身地
- ③上京の年月日
- ④上京の動機
- ⑤これまでに最も印象に残ることは
- ⑥祝寿を迎えられてひと言

昭和10年(1935年)・乙亥という年 天皇機関説を唱える美濃部達吉が貴族院議員を辞任、陸軍省軍務局長永田鉄山少将が斬殺されるなど、住みにくい世の中への傾斜が急となるも、渋谷駅では忠犬ハチ公が病死し、



いけばな・三觜拍洋

葬儀に数千人が集まる。国民の暮らしは幾分ゆとりがあったか。平均寿命男44・8歳、女46・5歳。白米10キロ2円39銭、天井20銭、ビフテキ1円。第1回芥川賞石川達三「蒼氓」、直木賞川口松太郎「鶴八鶴次郎・風流深川唄」。丹那トンネル開通。大阪(阪神)タイガース誕生。(本城)

## 浅香 壽一様

- ①出生は、1935年(昭和10年)1月なので、「私は昭和1桁世代」と「2桁生まれ」を適宜使い分けている。適宜といつても、なかなかスマイルにはゆかず、アナログとデジタルの「はざま」でヨタヨタしている。
- ②大阪市生まれ
- ③④戦争で丹波(旧沼貫村)に疎開、1967年に大阪の家電の会社に入社したが、1970年、新工場を作るといいうので群馬県に引越した。以来45年間群馬県。
- ⑤群馬県や栃木県などといえば、関西の人は勿論、関東の住人でも「アッチの方」程度

## 祝寿の方々ご紹介

の認識が多く、小生も転居当初は物凄い「カミナリ」と「地震」の頻度には驚いた。

⑥男子の平均寿命もすでに80歳を越え、長生きしたのか、これからするのか。

近年思うこと、誰が云ったのか「10代20代の“時”は時速10キロ20キロ、40・50歳では40キロ50キロの巡航速度、70・80歳になれば70キロ80キロの超法規的」、いい得て妙。最近は何もしないうちに、時が過ぎる。



いけばな・三鶯拍洋

### 足立 謙悟様



①昭和10年1月11日生

②氷上町井中

旧幸世村井中

③昭和38年7月

④社命により転勤、横浜にて勤務

⑤昭和20年8月15日。当時国民

学校5年生、運動場はサツマイモ畑になっていた。建国以来負けた事のない国、万世一系の天皇を戴く神国日本、負けそうになれば神風が吹くという国。それが負けた。また現人神あらひとがみである天皇の、今まで聞いた事もない玉音をラジオで聞いた。幼心には言い表せないショックでした。そのシ

ョックをいや増すような夏休み明けの校長の訓辞。あれ、こないだまでの話とどう繋がるのだ。これも幼心には解決するには難問でした。

⑥81回目の夏をむかえた。なおかつ、かなり元気だ。よくも生きて来たものと思う一方、まだこれからが「長いぞ」という気持ちで勝り過去を振り返り想い出にひたる感覚はありません。仮に今後20年生きるとするならば、子どもが成人する時間と同じなのだから、うかうかと過ごすわけにはいかない。これから先どのように生きるか、この命題めいだいかなり難題）に向かつてそろそろテイクオフをすところだ。

## 祝寿の方々ご紹介

### 足立 正美様

- ①昭和10年4月8日。気の置けない人には「釈迦の生れ変わりです」と自己紹介。
- ②その頃は兵庫県水上郡佐治町現在は丹波市青垣町。全国天気予報ではこの地の天気も気になり必ず見えています。
- ③あの頃は大阪〜東京間夜行列車で12時間余、堅い座席と煤煙に悩まされました。明け方に通過する熱海の花がきれいでした。山育ちの私にとって海は特別でした。昭和22年頃。
- ④次兄がすでに憧れの東京で就職していたので寮に転がり込み居候。大学卒業後NHKに就職。原爆の恐ろしさを身に浸みて知らされた広島と、多

くの文人を輩出、育んだ松山局に4年と3年を含め、35年間定年まで勤めました。

- ⑤ドキュメンタリードラマ制作に携ったロケの時、マッカーサー元帥の執務室の机にちよこつと、吉田茂首相の葉山の御用邸二階の座机にもちこつと座り、気分浸らせて貰う貴重な経験を。：其の外、映画か雑誌でしか見た事のなかったスター女優をスタジオで間近に：その美しさとオーラに圧倒されました。当時25歳、昭和35年頃。現在の女優さんの方が顔立ちも良く、スタイルもセンスも素晴らしいと思いますが、器の大きさとかある種の存在感の魅力はかなわないう様に思います。
- ⑥ボヤキとタメ息のオンパレー

ドの日々、「何があってもおかしくない歳ですよ」と医者に云われ久しい今、賢者のエッセイの様には処せない。財力も環境も違いすぎます。凡人はジタバタドタバタするしか仕様がなと思っています。



撮影・岡吉明

## 祝寿の方々ご紹介

### 石田 勝彦様

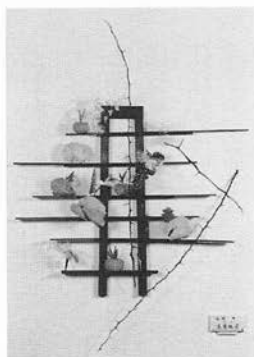
- ①昭和10年5月16日
- ②春日町
- ③昭和29年3月
- ④大学進学
- ⑤私の生家は妙高山を背にしたふもと（旧大路村）にある。その山頂近くの神池寺で高校三年のひと夏を受験勉強で過ごすため、同窓の上野重喜（今年2月3日逝去）と母の準備してくれた米一斗袋を背負って登った思い出が、今にして偲ばれる。
- ⑥故上野重喜君の去年の賀状に「富士山を踏破（昨年7月）され、今年はさらに一層の飛躍を……」と記されており、これも彼の遺訓と捉え、残る

人生をしつかりと生きていきたいものと思っております。

### 井本 逸夫様

- ①昭和10年9月23日
- ②氷上町石生
- ③昭和33年6月
- ④北海道大学を昭和33年3月に卒業して、同時に雪印乳業に入社しました。札幌本社を経由し、33年6月に同社東京支店（日本橋江戸橋所在）に配属され上京。
- ⑤昭和29年北大に入学するため、丹波の石生より札幌に行き、札幌駅より徒歩で同校正門に入り、エルムの茂る林中でクラーク博士の胸像の前に立った時。

⑥先の太平洋戦争は10歳の時に終り、それから70年の平和な人生を送っています。私より先に生まれた方々の多くが、10代の半ば過ぎから戦争にかり出され、故郷を遠く離れた南洋の島々や極寒の北の大陸で悲惨な最後を迎えられたこと、の後の平和であることが、いつも心に突き刺さります。



いけばな・三菊拍洋

## 祝寿の方々ご紹介

### 浮田 信子様

①昭和10年3月28日生れ

②春日町 現在丹波市春日町

③昭和28年3月

④憧れの東京へと就職目的で活動中、縁者よりの勧めにより保育所職員募集に応募致し採用となり、浜松へ途中停車致し、未来を担う幼児教育に生き甲斐を求め定年まで勤め上げました。

⑤夢多き青春 柏原高校時代が私の人生に大きなウエイトを占め、一駒一駒が走馬燈のように廻っています。実父の縁で柏原高校受験、丹波の気象現象、自然の豊かさの虜になりました。四季の移り変わりの中で印象深い思い出として

は、

・地域が一体となって開催される厄除祭（やくじんさんのお祭り）は物珍しく興味津々。今でも心に蘇って来ます。

・早朝一面の銀世界。近所の同級生と共に身を縮め一步一步雪を踏み締めながら通学のために黒井駅に向った折、目にした自然界のすごさの驚き。

・高校の裏山へ友人とお弁当をさげて登り、振り返り目に写った重みのある校舎全景に感動のひとつ。今にして思えば茶目娘の突飛な行動が出来たのも感謝の思い出です。

⑥八十年の歳月は決して平穩無事の日ばかりではありませんでしたが、八十歳の誕生日を迎えられた事と今日まで支えて下さった多くの人々に月並

な言葉ですが、ありがとうございます。と感謝をこめて申します。

戦中戦後の衣食に事欠いた日々の中、健康が保たれた事に視聴覚も健在。\*8020入歯なし。但し足腰は年齢なりの衰えにて格闘中ですが、自分自身をも誉めたいです。

今後は何事にも興味を持ち、心豊かな日常生活が送れるよう努力していきます。

例えば家庭菜園、季節の野菜と草花栽培。健康吹き矢、口コモ体操同好会活動。遊びとしてはインターネットで競馬観戦、時に投票も……。風変わりですが、元気で余生を過ごして行きます。

\*8020 八十歳で自分の歯を二十本以上堅持すること

## 祝寿の方々ご紹介

### 大西 修三様

①昭和10年（1935）8月26日

②兵庫県氷上郡（現・丹波市）青垣町

③昭和34年（1959）3月30日

④就職

⑤人類の月世界到達と地球への帰還

⑥健康に優る宝はないと思いません。



いけばな・三葉拍洋

### 金出一郎様

①昭和10年（1935）12月22日

②神戸市（但し、氷上郡大路村栢野に6年間在住した）

③昭和35年4月1日

④勤務先の伊藤忠商事より大阪から東京への勤務命令

⑤終戦の年（1945）の11月、集団疎開先の岡山から神戸に戻った。三宮駅で汽車を降り

て最初に目にした光景は見渡す限り焼け野原と化した生まれ故郷の無惨な姿であった。

その夜の宿泊は生家の隣人が廃墟の中に建てたバラック小屋。夕食後、主人に促されて戸外に据えられた「露天浴槽」（焼け跡から拾い集めたレン

ガと五右衛門風呂の釜で急拵えされた）に入浴。首まで浸かって一息つきながら気持ちの良さにしばし瞑想。しかし脳裏に去来するのは、国破れた日本と日本人の命運はこの先どうなるのか、明日からの住居や食物は何処で、空襲で破壊された学校へは行けるのか等々、子供なりの不安や心配ばかり。重苦しい気持ちになつて目を開き何気なく天を仰いでハツとした。そこには晩秋の満月が皓々と輝いており、清涼の気を孕んで凜としたその姿は神々しくもあった。うつとりとして数分間眺め続けていたその時、「強く生きよ!!」と月からの啓示が耳に響き心の震えが暫く止まらなかつた。



## 祝寿の方々ご紹介

⑥日本人男性の平均寿命まで生きて来れたことに感謝。今後の人生は「余禄」として、また18年前に60歳で逝った亡妻の「余命相続」として楽しく有意義に生きたい。

### 森本 浩様



①昭和10年8月8日

②兵庫県丹波市市島町徳尾

③昭和29年4月。横浜十字屋(株)(衣料品小売店)入社

④関東にあこがれ思い切って衣料品店に転職しました

⑤何としても自分で経営出来る店がほしかったのですが、時代の流れで小売店も大変で

す。職業によると思っています。

⑥商売の道に入り多くのお客様に接客出来た事が何より有り難く過ごせ、あつと言う間にこの年を迎える事が出来ました。健康で小さな幸を求めて頑張りたいです。



撮影・岡吉明

### 村上 高廣様

①昭和10年7月20日

②柏原町

③昭和29年3月2日

④父の知人の紹介により国鉄東京鉄道管理局に就職のため。

⑤以前から健康には絶対の自信を持っていたのに平成9年12月に心臓病により手術入院でペースメーカーの埋め込み、障害者1級の認定されたこと。しかし現在は1ヶ月に1度の通院治療で至って健康であること。

⑥このように長生き出来た事に驚きを感じ、今後も何かと平穩無事に過ごせるように念じております。



(撮影：徳田八郎衛)

## 中学時代の思い出

今 田 一三夫 (流山市)



重ね合わせる。私は旧船城村の出身で中学生になると黒井中学へ通った。二年生になった時、春日部、国領村の中学も統合され明徳中学校となった。四ヶ町村統合の中学校となったのである。同学年は二百人ほどで四クラスあった。従って全校生徒は六百余名だったと思う。新しい校舎は大きく、運動場も大変広かったのだ。私達は希望や夢を胸一杯にふくらませて喜んだ。その二十年後には大路中学も統合され春日中学となっている。生徒数は全校で三百人を割っているようで、五ヶ町村統合となってもいかに激減しているか驚かざ

るを得ない。部活では授業が終るとすぐ運動場に集まり練習を始めた。ボールは準硬式球（トップボール使用）で軟式球よりはるかに硬くデッドボールを受けるに痛かった。部員は下級生を入れても十人余でやっと一チームが出来るくらいで、練習など充分行えるどころか代打や守備交代用員の余裕は全くなかった。多くの町村から来ているにもかかわらず、何故もつと集まらないのかと思ひながら練習は毎日ローテーションを守り確実に進めた。監督の先生も熱心に参加していただけ指導を受けた。チームメイトも皆良き男で良い仲間であった。

今日のようにいじめや体罰等は聞かず良き時代であった。同級生のうち六人は柏原高校へ進学したが、投手で四番打者の藤井恒夫君、名遊撃手の原周作君は中心的選手であった。春と夏、郡内中学校野球大会があり、目標は当然優勝することだった。春は我が中学のグラウンドで行われ決勝戦で成松中学と対戦、一対六で完敗を喫した。夏は成松のグラウンドで開催され雪辱に燃えて臨んだ。又も決勝戦で成松中学と対戦、熱戦を繰り展げた。五回まで零対二で劣勢だったが六

回にチャンスが到来、一番の私と二番原君がヒットで出塁、三番は確実にバントで塁を進めた。そして四番の藤井君が期待に応え左翼手を襲う強烈な打球を放ち三塁打となり同点とした。その後スクイズが決まりこれが決勝点となった。ついに優勝旗を持ち帰ることができ最高の気分であった。やはりスポーツの勝負は勝つことが究極の目標で喜びでもある。秋には氷上郡代表として県大会に出場、西脇のグラウンドで宝殿中学と戦ったが零対六で完敗だった。都会チームだけによく洗練されているなと思ったものだ。

一方陸上競技では短距離競走で学年で負ける者はいなかったが、郡大会に出ると予選は通過しても良い成績をあげるほどの力はなかった。只一つ良い思い出は柏原中学の運動会で、郡内各中学校から男女二名ずつ選抜されて四名によるリレー競技に出場したことだ。女子がスタートから飛び出しトップのままアンカーの私が辛うじて逃げ切り優勝した。今でも忘れられない優勝旗でうれしかった。毎日の練習では体がくたくたになり、夜は予習復習でどうにもならないほど眠気がさし眠ってしまったことが多々あった。しかし部活を

通じてチームワークやエチケットなどの大切さも多く学んだものだ。毎日自宅の前を通る中学生が朝早くから夜遅くまで懸命に取り組んでいる姿を見るとうれしく思う。

卒業式で答辞を述べる役目を受けたが、困ったことに巻紙に墨で書くことだった。文章も考えなければならぬうえに大変なことになったと心配が体中を襲った。習字は授業で習っていたが太筆で書くばかりだったので、長い巻紙に細字で書くことは私にとって未経験で大変疲れた。何度も何度も失敗書き直しの連続だった。しかし、楽しかった中学時代の最後にこんな役目を授かったことは光栄であると思い、時間切れまで懸命に力を注いだことはいつまでも忘れることのできない経験であった。

高校卒業後金融機関に入り、大阪地区二ヶ店を経て昭和四十四年に東京へ転勤となった。以来銀行員生活の大半を貸出業務に携わった。貧困で大学も行けなかった私は東京の真中で仕事をすると夢にも思わなかった。高度成長期の真只中で、特に審査時代に多くの申請書の諾否を審査したり、大蔵省検査で不良債

権をいかに少くすべく、一つ一つ貸金を検査官に説明得するなど貴重な経験が出来た。お蔭で定年まで大きな病気もせず来られたが一歩手前の五十九才の時、突然心筋梗塞で倒れ緊急入院、緊急手術を受けることになった。幸運にも現順天堂医大天野教授（天皇陛下執刀医）に受けたのでその後十八年間も生き伸びることが出来た。医療技術も今日ほど進んでいない時で、かかりつけの医者が天野教授と懇意でなかったら他の病院へ運ばれ、どうなっていたかと思うと感謝の念で一杯の日々である。それと同時に中学時代に体力を鍛えたことも大きな力になっているのかも知れないと密かに思っている。今年喜寿を迎えたが健康の有難さを更に身にしみて感じるこの頃である。

（昭和13年生、春日町出身／前金融機関勤務）



いけばな・三菊拍洋

## 目立ちたくはないけれど、 柏原と織田家を知ってほしい

織田 信 孝（茅ヶ崎市）



「じゃあ、（フィギュアスケートの）織田信成とはどういう関係なんですか」。

店先で何となく言葉を交わし、私の出自を知った人から、無邪気な表情でそう尋ねられて、私は愕然としました。それが他ならぬ柏原（丹波市柏原町）でのことだったからです。こんなことは、かつては、まずあり得ないことでした。

私は柏原藩主であった織田家の現当主（織田信長から数えて18代、柏原藩主として数えると19代）に当たり、現在は神奈川県茅ヶ崎市に住んでいます。

私は東京育ちですが、柏原には織田家の廟所があり、前期柏原藩の織田三代を祀った成徳寺という寺もあるため、墓参などでたまに訪れます。幼少のとき、父に

連れられ、柏原に行くと、旧家臣の末裔の方々や町長が心のこもった応待をしてくださったのを覚えていますし、当時は住民の方々も、「よくお帰りくださいました」という接し方で、この地の織田家がどのような存在であったかを知らない人はいなかったと思います。

スケーターの織田信成君は大阪の方で、織田家から出た高家（数家があります）の末裔と言われます。ただ家系の三代くらいが抜けている（笑）らしく、最近「自称」などと揶揄されていますが、本当かどうか、私は判断できる材料を持ちません。私は彼がスケートで有名になるまで、その家系の存在すら知りませんでした。

というのも、大名家の織田家は、高家の織田家とはほとんどつきあいがありません。明治になってから大名家は爵位をいただいで華族となり、これも一種の閉鎖社会でしたから、なおさら交流がありませんでした。

他の多くの家と違い、大名家は藩主として記録が残るので家系は明確です。そして、柏原の人々は、正統的な大名家織田家の城下町であることをどこかで誇り

に感じている風情がありました。

ところが、冒頭のような経験をしたことで私は、名家と高家の違いも、柏原における織田家の存在も、そもそも一般的な歴史すらろくに知らない人たちが増えていると感じました。これは衝撃でした。旧知の（家臣団の末裔の）方に尋ねると、他地域から引越して来た人が増えたという事情もあるようです。世代交代や町村合併の影響などもあるのでしょうか。考えてみれば、そんなことはいまどぎ、驚くようなことではないのかも知れません。

少子高齢化時代に、人口増は望ましいことです。しかし新しく移り住んだ方々には（そして昔から住んでいる人にも）、もう少し、住む土地の歴史に興味を持ってもらいたいものだと思います。

織田信長からの直系の末裔で当主と呼べる人は、柏原藩織田家の私と、天童藩織田家の織田信弘氏（横浜市在住）しかいません。私も彼も目立つのは嫌いで、よほど熱心な取材依頼などが来ない限り、メディアなどには出ないようにしてきました。

ところが、織田家とはごくごく薄い関わりしかない

のに、目立ちたがる人もいます。近年の信長人気の高まりはそういう人が出やすい土壌を作っているようです（1980年代半ば以前、信長はこんなに人気者ではありませんでした）。

例えば最近では、「織田廟宗家十三世」という肩書きで、資金集めやイベント活動に熱心な人がいます。「織田廟宗家」という家系は存在しないので、完全にこの人の創作（捏造？）であるわけです。少し前にあった食品偽装事件みたいな話です。

私はこれまで、こうした手合いは無視すればいいや、わかる人にはわかるのだから、と黙殺してきたのですが、お膝元の柏原ですら「わかる人」が減っている事実（町の歴史について何も知らない人が増えている）を知り、笑いごとではすまされないかも、と思うようになりました。

ちょうどそんな折、週刊朝日から連載のお誘いをいただき、8月の頭から連載を書いています。内容は、織田信長が中心で、柏原藩織田家についてはないけれど、私の名が出ることで、多くの柏原住民の方々、丹波市住民の方々が、柏原藩織田家について知るきつ

かけになればと願っています。

(1959年生、柏原町出身/学習院大学法学部政治学科卒業後、広告制作会社、採用情報誌出版社などに勤務の後、30歳でフリーの文筆家となる。柏原藩織田家の現当主)

## 追憶「恩師の薫陶」

足立敏 晤(茅ヶ崎市)



私は、幼少時から小学生時代まで、至って虚弱であった。これを心配した母は近くに祭られる祠・薬師如来さんに健常への願かけをし、お参りを欠かさなかったことが忘れられない。学び舎の芦田小学校へ昭和23年4月

に入学し、同29年3月に卒業したが、昭和20年代は戦後の影響がなお色濃く残っており、大した娯楽もなく小学校の運動会と学芸会は地域にとって大切な行事であった。また、生徒にとつても家族と一緒に巻き寿司を腹一杯食べられるのが大きな楽しみでもあった。虚弱児の自分には、運動会の徒競走が大の苦手で6人が一組で走ると、いつも4位以下が指定席で、まさに泣きたい気持ちでゴールインした。

そんな私に大きな転機が訪れたのが、青垣中学校への入学であった。長距離の千五百・五千米で先頭争いをするようになり、人より前に出ることのなかった引つ込み思案の自分が目覚めた時でもあった。昭和29年の入学時に青垣中学が氷上郡駅伝大会で初優勝し、優勝旗を掲げてトラックで町内を凱旋されたことが忘れられない記憶である。

この優勝時から指導に当たられたのが、英語・社会科専任の「故・岡本丈夫先生」で、昭和29年から同33年までの5年間に優勝3回、2位2回というまさに青垣中学の黄金時代を築かれた。私は幸運にも2年間、駅伝の指導を受けたが、後の人生に活かせる大切な教訓

を与えていただいた。今もつて変わらぬ恩師への感謝の気持ちを、誌上をお借りし述べさせていただきたい。

## 1 練習の基本方針

岡本先生の指導は、常に科学的であり、かつ指導方針に最新の裏付けがあった。例えば、①全員を診療所に連れて行き医師の健康診断を受けさせ、体調に問題がないか、入念なチェックをされた。②走力の強化は、当時世界的に有名になりつつあったニュージーランドの長距離の名伯楽アーサー・リディアード氏による、いわゆる「リディアード方式」に沿い、即ち長い距離を走る途中に強弱を取り入れたトレーニングを導入された。私達には、神社の石段登り、アップダウンの厳しい峠道などで変化を持たせ、忍耐力と脚力の強化を図られた。腹部に筋肉が付けばタイムも伸びると申され、確かに腹筋の固まりを自覚するようになると不思議なほどタイムが上がっていった。

## 2 練習時にいただいた人生訓の言葉

練習中には、折にふれ指針になる言葉をいただいた

が、印象に残るのは「諸君はこんな苦しい練習をして、何の役に立つのかと思うかも知れない。しかしながら将来、大人になった時、駅伝の練習をしておいて良かったと思う時が必ずある。最後までやり遂げなさい」と説かれた。長い人生は決して平坦ではなく、苦しい時ほどこの恩師の一言「忍耐力」が脳裏をかすめ、精神面で大きな力となり、貴重な財産となった。恩師の薫陶に感謝して有り余るものがある。

## 3 駅伝の基本ルールの教え

どのスポーツにも守らなければならない規則があり、それに反すると失格する場合がある。団体競技の駅伝にあつても同様であり、一つの失敗がチーム全体に及ぶため、岡本先生から囁んで含めるように次の2点を言い聞かされた。

- ① 大会当日、ウォーミングアップする時は、中継点の白線より先（走る方向）に向かって練習しないこと、

- ② 次走者にタスキを渡す時は、相手が受取りやすいように両手でしっかり広げ確実に手渡すこと



近年、駅伝は箱根駅伝に代表されるように国民的人

気になっていくが、平成27年1月18日広島市で行われた第20回都道府県対抗男子駅伝で、優勝候補が上がっていた愛知県チームがタスキ渡しで規則に抵触し失格するという残念な事態が起こってしまった。1区の高校生ランナーがタスキ渡し直前に疲労困ぱいの末、中継点を目前に転倒を重ね遂に最後は立ち上がれず、2区の中学生ランナーにタスキを投げ出して渡そうとした。白線ラインには50センチ届かず、2区の走者が反射的に手を伸ばして拾い上げ走り始めたが、残念ながらタスキは駅伝の規則どおり手から手へ渡っていないと判定が下った。この場面はテレビカメラがはつきり捉え全国放映されたが、私は瞬時に過ぎし60年の歳月を越えて、岡本先生の話しがよみがえり、ルールを知悉することの大切さを改めて教えられた。それと同時に今回の2人のランナーは、私達と同じように日頃の練習で指導者からしつかりルールを教わっていたのだろうか……、将来性ある若きランナーの心にダメージは残らないだろうか……と気遣わずにはおられなかつた。これを糧にしてりつばなアスリートへの大成を祈

りたい。

#### 4 終わりに

学び舎「芦田小学校」は、少子化の影響を受け、平成29年3月をもって閉校となり、佐治・神楽・遠阪小学校の4校に統合され、同年4月から「青垣小学校」として新たな歴史を刻むべく着々と準備が進められているとのこと、名状しがたい寂寥感は覆うべくもない。しかしながらこれも時代の流れとして見るとき、この上は誕生する青垣小学校の大いなる発展を願って止まない。小・中学校は、その存在自体が地域の皆さんにとって心の拠り所のはずである。

なお、岡本丈夫先生（享年72歳）は、ご生前氷上郡の歴史風土を極められ次の著書を残された。

- ① 丹波のノート 昭和59年1月 神戸新聞出版セ  
ンター刊

- ② たんば歴史のみち（兵庫ふるさと散歩13） 昭  
和59年12月同刊

（昭和17年生、青垣町出身／元国家公務員）

## 戦時中疎開先での思い出

大垣 忠 男（大田区）



私は東京生れの東京育ちですが、太平洋戦争の末期、戦禍を逃れるため昭和十九年頃から、父の郷里が山南町草部でしたので、親戚知人のお世話で母子五人谷川に疎開しました。私は柏原中学校二年生に転入しました。

戦争はだんだんと激しくなり、三年生以上は京阪神方面の工場に動員され、我々、二年生以下は学校に残ったものの殆ど毎日、薪炭増産のため山行きの作業にかりだされました。私達は学校から一時間以上かかって、炭焼小屋に到達し炭焼用の材木の運搬をし、又帰りに三人一組で一俵の炭俵を交替でかついで学校まで運びました。

翌年三年生になったのでいよいよ我々も、京阪神行

きを覚悟していましたが、幸いにも東洋ベアリング社が学校に疎開してきました。工場は二十四時間、昼夜兼行で稼働し我々も一週間おきに夜勤がまわってききました。

作業はすべて軍隊式で工場長も軍服姿で毎日「朝礼」で檄をとばしました。作業は、ベアリングの製造で色々な職種があつて、一日中立ちっぱなし、又一日中腰掛けてやる作業等がありました。即ち旋盤、研磨、組立等です。夜勤明けの時は早朝なので、柏原から谷川まで帰る適当な列車がなく柏原の駅長さんのお計らいで丁度その頃通る貨物列車に、乗せてもらつて谷川まで帰つたものです。

さて我々の住まいは谷川で一人暮らしのおばあさんの家に私を含め母子五人間借りしました。食糧、衛生面では大変苦労しましたが、近くに住む田中祥雅氏（和田製材・故人）に生活面で色々と助けて頂きました。この御恩は忘れることは出来ません。この紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

（1928年生、山南町草部出身／元日本化薬株式会社、  
渡辺ケミカル株式会社、日進化成株式会社）

## 今思うこと

吉見起一（品川区）

県立柏原高等学校を卒業し、上京して今年で十一年になります。上京した直後、大きな街、複雑な電車やバス、行き交う人ごみの多さ。今でいえば「刺激的」な毎日だったのかもしれませんが、当時の私にとって、なかなか慣れず、衝撃の連続でした。

そのような日々の生活を送る中でも、たまの休みに帰省した際には、丹波の空、丹波の人、丹波の景色に癒され、励まされていました。東京でまた頑張ろう。そう決意する度に、高校を卒業するまで、まったく何とも思わなかった「郷土愛」とまではいきませんが、地元への思いや、地元つていいなという気持ちがあらずつ大きくなっていました。

東京都で特別支援学校の教員になり、様々な障害のある子供達と接する中で、いつかは丹波に帰り、地元の教育に関わることができたら……なんて考えてはい

ましたが、正直なところそこまで本気ではありませんでした。

そんな時に大きな転機がありました。丹波市を襲った豪雨災害です。昨年、帰省から東京に戻ってきた私のところにも、SNSなどを通して地元の変わり果て



丹波での豪雨災害ボランティア活動（市島町にて）

た姿が知らされました。夏休み中ということもあり、休暇を頂き、実家に戻って十日ほどボランティアへ行きました。

市島町の被災地区でボランティアをする中で、多くの支援の手や温かい応援が丹波に届くことが非常に有



丹波人ティーシャツを着て  
アグリフードエキスポ2015  
会場にて

難しく感じました。地元出身者だということで、市外・県外からいらしたボランティアの方々、被災された方との間に入り、橋渡し役として活動させていただきました。そこで多くの方と知り合い、繋がりが、人と人との「縁」を大切にしたいと思うようになりました。同時に、その頃から、私の中で「丹波に帰って地元の役に立ちたい」と本気で考えるようになりました。

もう一つの大きなきっかけとなったのが、インターン・Uターンで丹波に移住された方々との出会いです。「丹波をもっと盛り上げよう！」と多岐にわたって活動されている姿に、自分も何らかの形で関わりたい！と考えるようになりました。そして、「関東氷上郷友

会」にも、「柏陵同窓会」にも、せつかくの機会なので参加してみたところ、多くの先輩方に出会い、非常に刺激を受けました。心のどこかに丹波を想う気持ちがあるからこそ、あれだけの人数が集まり、素敵な会が続いているのだと思いました。

最後に、丹波であっても、東京であっても、丹波を想う気持ちを忘れず、丹波に生まれたこと、丹波で育つたこと、丹波人としての誇りを胸に、これからの出会いに感謝して、人生を歩んでいきたいと思えます。

(昭和62年生、市島町出身／柏高57回生、都立青山特別支援学校)



撮影・岡 吉明

## 地方から「しあわせ」を考える

田代春佳（丹波市）

自己紹介と丹波市に移住したきっかけ



私は平成2年の生まれで、千葉県我孫子市が地元となります。小中と地元の学校に進み、高校は一人カナダへ留学。異国にて

自国のことを全く知らない自分に気づき日本の大学に進学、卒業した私は現在、地元を離れ丹波市春日町のシェアハウスに暮らしています。丹波への移住のきっかけとなったのは偶然の出会いで、丹波市のある市議会議員の方が東京の秋葉原にて開催していた「田舎暮らしカフェ」というイベントに参加し、「若者の都会への一極集中の解消」、「地方の力」というテーマに可能性を感じたからでした。その後、その方にご縁を繋いでいただき丹波市に幾度かお邪魔し、仕事と住まいの場所が決まったタイミングで本格的に移住を決めま

した。当時知り合いは少なく、初めての車社会、村入りなど、多くの面で戸惑うこともありましたが、2015年7月で丹波市民歴1年半となった今も、その可能性を日々感じつつ暮らしています。同時に、当初予想していた可能性以上の丹波の魅力も感じています。季節折々に表情を変えるぼこぼことした里山の連なりは、毎朝起きて外にでる愉しみを与えてくれ、村の役割や催しが終わった後にご近所に御呼ばれされることも嬉しく、また、私同様に丹波市に移住してきた人たちとの繋がりも拡がり、何よりも、そういった移住者、Uターン者、地元の人たちと関わりながら丹波市のこれから、日本のこれからを考える機会に恵まれているのは、本当に「しあわせ」なことだと感じています。その感覚は、どうやら丹波が出身で、長いこと暮らして来た方たちには理解されにくいこともあるようで、「移住して来ました」と話すことも聞かれるのは、「なんで東京からこんなところへ？」という言葉です。ですが近頃は、私同様に丹波の魅力に惹かれて来た移住者の影響があるのかないのか定かではありませんが、「丹波には何も無い」が、「丹波つてええと

こ？」という疑問に変わり、それが今確信に変わりつつある人が多くなっているように感じています。

「よそ者、若者、ばか者」が丹波に見つける魅力とは

まちづくりを考える際に、よく「よそ者、若者、ばか者」という言葉がでてきます。その地域で当たり前とされている価値観やしがらみに比較的左右されない存在が、時に新しい視点でその地域の魅力を見つけだし、常識に捉われずに地域の活動に刺激を与えるという意味で、この言葉が多用されるようです。私が丹波市に移住をしてきてからしばらく経ちますが、各々の理由と選択で、丹波を暮らしの拠点としている若い移住者によく出会います。その移住者たちが取り組む活動は多岐にわたりますが、その中でも若者の活動が地域に活気を与えている様子がよく分かる活動の一つご紹介させていただきます。

### 山南町やまなん笛路村の物乞いキャンプ

私がここでご紹介させていただきたい活動は、兵庫県丹波市山南町谷川11区集落にあたる笛路村で毎月一度開催されている「物乞いキャンプ」です。キャンプのテーマは、「その日の食材はお百姓さんのお仕事を



笛路村の坂を登りきった高台から望む景色

ころに広がる隠れ里のような村です。

その村に毎月集まってくるのが、「キャンパー」と呼ばれる20〜30代のキャンプ参加者たち。2013年の5月から始まった物乞いキャンプには、学校の先生や大学生、地元の若者など様々な背景を持つ人たちが集まります。そのうちの多くは大阪や神戸から重い荷物を背負ってバイクや車で一時間ほどかけてやってきます。

物乞いキャンプの発起人は、笛路村最年少農家の竹岡正行さん。2014年現在13世帯が住む農業振興地

手伝って恵んでもらう」というもの。ただ「物を乞う」のではなく、「お手伝い」との物物交換により、キャンプ期間中を過ごす為の食材や知恵を賄います。笛路村は、兵庫県で多自然地域と位置づけられる丹波市の中でも「秘境」と言える場所。背の高い雑木林を抜け、小高い里山に沿う狭い坂道を上りきったと

域の笛路村に、30歳（2015年現在）の竹岡さんはIターン移住をしてきました。まずは父親が笛路村に建てた家に住みはじめ、村の人たちに農業を教えるも、いろいろな徐々に農家としての村の人達との関係、暮らしの基盤をつくってきました。

その竹岡さんが主催する物乞いキャンプのきっかけとなったのは、大学の先輩がつぶやいた「お金はないけど遊びたい！」という一言。そんな先輩に竹岡さんは、「お金はないけど遊べることはたくさんある」と、村で人手の足りていない作業の手伝いをすることを提案。早速その後輩たち3人で広大な休耕田の草刈りから「やってみた」ことがキャンプの始まりとなりました。



草刈りをするキャンパー達を眺めながら話す竹岡さん

キャンプでは、休耕田の草刈りから竹林や木の伐採、畑の耕運、倉庫の解体から倉庫づくり、そして農作物の収穫まで、村の人から頼まれること、頼まれていないけれど必要だと思ふことなど、ありとあらゆることに全力で取り組みます。そ



第一回目の休耕田の草刈りBefore



第一回目の休耕田の草刈りAfter

が沸くお風呂を横目に、敢えて川から汲んだ水で五右衛門風呂を湧かします。そんな、世の中の合理性を逆行するかの様に、便利なことを不便にし、敢えて困難に挑戦するスリルをキャンパー達は「本気の大人の遊び」と楽しみます。

そんな「本気かつ全力で遊びたい」若者たちの存在は、いつしか笛路村の農業従業者の高齢化と、それによる農作業の負担を解決する一つの兆しとなつていきます。始まりから2年が経つた今、笛路村に見る光景は「あいつらいつ来るん？」と、頼みたい仕事を留意してキャンパー達が来る日を毎月待ちわびる村の人たちと、どんなハードな仕事か次の日待ちわびてようと村に來続けるキャンパーたちの姿です。



作業開始！村のおじちゃんに敬礼する  
キャンパーたち

彼らはなぜ、物乞いキャンプに魅力を感じるのでしょうか。まず一つ目の魅力は、「楽しい」をつくり出せること。物乞いキャンプを通して出会ったという竹岡さんの奥さんである郁子さんは、「都会ではすでにある道に、どれだけ楽しく乗つかれるか」、用意されたものを「楽しませてもらってる」って感じやけど、ここだと「楽しい」基盤からつくらんといかんし、実際につくれる。自分がどう楽しめるかが大切で、都会の「楽しい」とは質が違う」と話します。物乞いキャンプには、それだけで完結する「与えられた楽しさ」ではなく、自分で試行錯誤してようやく見つけられる「楽しさ」があります。そうして気付いた「楽しさ」は、誰もが想像できるものではなく、やってみた本人たちでないと分からないものです。

二つ目は、「0からの信頼」をつくれること。笛路村は13世帯しか暮らしていない村。農業振興地域にも



刈りとった草を運ぶキャンパーたち

関わらず、農業従事者の高齢化が目立つ地域です。そんな土地で「若者」であることは、それだけでもとても価値のあることであり、若者にできる役割はたくさんあります。ですがその役割は、肩書きなしの信頼関係があつてこそ頼まれるもの。例えば会社の重役であろうと、教師だろうと、大学生であろうと、そこにあるのは「若者である」という事実のみ。

「こいつはきちんとやるヤツや」、そう村の人に思われて初めて役割をもらえる。目を見て話し、すれ違いうちに立ち話をして、挨拶をして、時間をかけて信頼を築いたキャンパーと村の人は、互いにとつて誰とも代えのきかない唯一無二の存在になります。そして、村の人からの信頼の証である役割を通して「働く」ことの対価になるのは、お金ではなく「働いた分美味しく感じるごはん」。キャンプでは、人の役に立った分だけおいしいご飯が食べられる。普段忘れがちな役割をもたえられることへの感謝を実感しつつ、





ごはんにお味噌汁は  
村でとれたお米とお野菜

何にも仲介されず「裸の自分」が築いた信頼を糧に食べられるご飯は、一際美味しいものです。そんな、「自分の力でつくれる幸せ」こそが、物乞いキャンプの醍醐味であり、キャンプたちを惹きつける理由ではないかと思えます。

この物乞いキャンプが成立しているのは、長くじっくりと培ってきた竹岡さんと村の方との信頼関係、そして、村がこれまで守ってきた農地や人の繋がりの財産があつてこそだと思えます。人と人の信頼関係は、スピードよりもいかに「待てるか」が大切で、時には真剣に話し合い、時にはお酒を酌み交わしたりして、じっくりと培うべきものなのでしょう。

「地方創世」というと、とても大きな規模の言葉に思えます。しかしそれを砕いてみると、国や県単位ではなく各地域、市や町、村などの単位でこれまで何が続けてきたのか、そしてこれからなにを続けて行きたいのかを、そこに住む人たちが自ら定義し見つけることが大事なのだ

と思えます。そしてその過程において、「この地域にとつて何が『しあわせ』なのか？」を、考えたいと思っている人口がどれほどいるか、どれほどの人に考えたいと思わせられるかが、とても大事になるのではないかと思っています。

【私の関わる事業を一部ご紹介させていただきます】  
奥丹波こされ便

丹波地域の農家さんの思いや生産物へのこだわりを、レシピとともに紹介する冊子付き旬野菜宅配便（3500円/月 次号2015年10月）。私がプロジェクトリーダーとなり、記事内でご紹介している竹岡さんを理事とする特定非営利法人「丹のたね」の事業の一環です。丹波にゆかりのある方にはぜひお申し込みをいただきたく、丹波を離れてしまったご家族にも故郷の味と魅力をお届けすることができます。お申し込みと詳細は、[magocoronotane@gmail.com](mailto:magocoronotane@gmail.com) まで。

（平成2（1990）年生、千葉県我孫子市出身／株式会社近所デザイナー兼ハピネスマーケット事務局（NPO丹のたねでは、会社の休みの時に活動しています）



# 変わる丹波変わらぬ丹波

写真と文：徳田八郎衛

## 秋祭の前日(1)

神輿も専用台車に載せられて巡幸する今日、若者が村に溢れていた頃の祭を知る者には、涙が溢れて撮影などできません。だが準備する前日だと、ほぼ昔と同じ風景が見られます。旧氷上郡で最小の村だった柏原町新井地区6集落の社を御覧下さい。



←大新屋の新井神社。5つの集落の神社を総社（統括）します。幟は800mほど離れた県道沿いの大燈籠側に立っていました。

欽明朝（六世紀）の創建といわれ「延喜式」に記載されている市内神社十七社の一つです。

### 新井神社

もとの祭神は天地創造の神、高皇産靈神とされていますが、江戸時代の初めに比較し巨磨寺の守護神である日吉大社の分霊が祀られました。日吉大社は俗に「世王権現」とも呼ばれ、山王の使者が猿であるといわれています。本殿（黒檜瓦文庫）には中井権次正貞の作による一對の猿の木彫像があります。また、一境内の御神木三杉の根もとをまたいで手受けをお願いするとよく聞き入れられるという信仰から参拝に来る人も多いです。

新井神社本殿	
<p>指定年月日 平成3年3月30日 所有者・管理者 新井神社</p> <p>大新屋字瀬の森に鎮座。欽明天皇在位の頃（6世紀）の創建といわれ、昔から、崇敬があつた。</p> <p>もとの本殿は今の神社より約500m東の境ヶ谷に祀られていたが、天正7年(1579)明智光秀の高見城攻めの時、兵火にかかって焼失、後に再建されたものが現存する本殿である。</p> <p>本殿は茅葺で、建築様式から推測して、江戸時代中期の建築と思われる。</p> <p>本殿両側に中井権次正貞作の一對の猿の木彫像がある。</p>	<p>Prefectural Cultural Assets The Niin Shrine, Main Sanctuary</p> <p>The old Shrine is situated in Yunomori, Doyas and is said to have been built in the reign of the Emperor Kinmei (6th century). For a long time the Shrine has been revered by many people.</p> <p>The former shrine was located in Takasadori, 500 meters from this site. It was destroyed by fire in the Teramori Castle assault led by Mitsunode Akachi in 1579. The Shrine was rebuilt and it is this Shrine that we can see today. It has a thatched roof and adorned by the architectural ornaments. It is thought that the Shrine was built in the middle of the Edo Era (1603-1868).</p> <p>On both sides of the front of the Shrine stand a pair of wooden monkeys carved by Gen Jinnosada Nakai.</p>
<p>平成3年11月</p> <p>兵庫県教育委員会</p>	<p>1991 November</p> <p>Hirodo Prefectural Board of Education</p>

# 丹波を撮る

## 秋祭の前日(2)



←鴨野が京都・賀茂神社の荘園だったことを示唆する賀茂神社。神主さんが居てもいいほどの立派な境内だし、この集落の児童は「うちの神社には厠もある」のを誇っていました。

↓確かにありました。



←<sup>むはしろ</sup>拳田の六柱神社。小さい集落の社なのに麓からかなり登った山の中腹に広い境内と鳥居。立派な釣鐘もあります。京都と同じ時期に祇園祭も催してきました。



この鳥居の奥に長い参道があり、次の鳥居を潜れば立派な本殿。祭の前夜にここで餅まきを行います。県道からここまで幼児が登って来るのも大変でしょう。映画やテレビのロケに使ってもおかしく無い神社です。福知山市大江町の「元伊勢さん」を彷彿させます。→

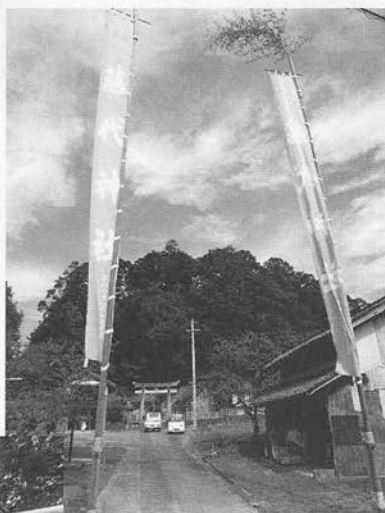


## 秋祭の前日(3)



←北山の伊奈利(稲荷)神社と幟。「祭神がお嫌いだから当集落では犬は飼わない」という伝統がありましたが、「価値観の多様化」「多文化共生」で今は守られなくなりました。名称は稲荷神社ですが隣の賀茂神社と一緒に5月3日には葵祭を祝います。実態は京都とは違い、集落住民の親睦を深める酒食の会です。

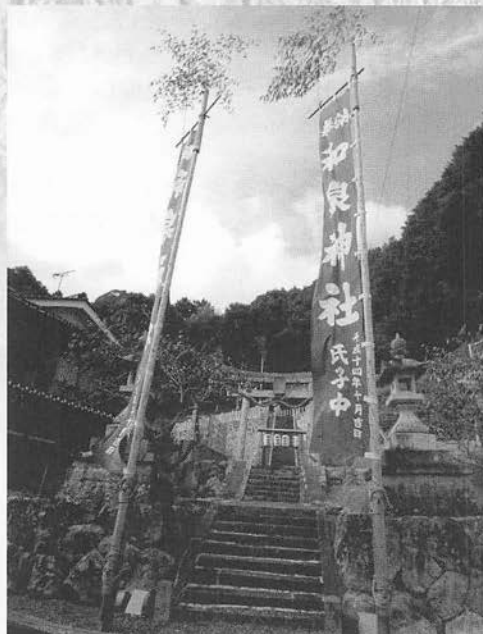
田路の藤代神社と幟。大新屋と田路は、戸数が100以上もある大集落だったので、児童がドラマーとして搭乗する「太鼓」を保有していました。今は若者が少ないので運行も厳しい。→



←だが、子供たちによる奉納相撲は途絶えることなく続いている。専用の俵編み機も使って早くも土俵は出来上がった。

# 丹波を撮る

## 秋祭の前日(4)



この集落の歴史を反映し、総社は氷上  
いちのみや  
町新郷の伊尼神社です。→



昔は神社で田舎芝居を上演する前夜祭  
(宵宮)でしたが、今は公民館前に手作  
りの夜店を出し、住民が語り合う前夜  
祭。豊作を祝う祭からコミュニケーシ  
ョンの場を提供する祭に変身。ヤング  
の出席が多いのは目出度い。↑→

←旧新井村で一番小さい集落だった母  
坪の和泉神社。市内のほとんどの神社  
が祭神の名前を冠しているのに、ここ  
では神社の地名を冠しています（柏原  
町母坪字和泉）。幟が至近距離の2か所  
に立つのも珍しい。



## 元旦の降雪(1)



2015年元旦午後に始まった降雪で交通機関も乱れました。もっとも困ったのは、夏タイヤで帰省した人たちでしょう。

←たちまちホワイト・クリスマス、いや1950年頃の新年風景となりました。

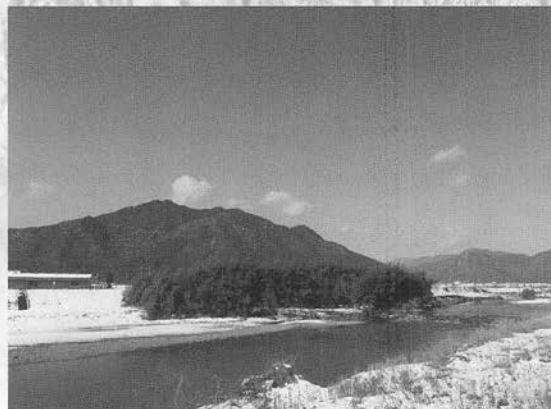
暮れに掃除したばかりの墓石も綿帽子を被りました。竹には雪が合いますね→



←幸い翌朝は快晴となり、向山連山の雪も消えて行きました。(いずれも柏原町母坪にて)

# 丹波を撮る

## 元旦の降雪(2)



←「雪の佐治川」を撮りに行きましたがドンドン融けます。1960年代の河川工事で、それまでは蛇行していた佐治川が直線になり、江戸時代の船泊も消え、それ以前の川裾祭風景も一変しました。先人が護岸のために植えた竹藪が、わずかに残っています。

かつては川裾祭の祭壇が設営された場所（御座所）です。今は水害対処のわかりやすい説明板が……前方に見えるのは、高山寺や高山寺城が山上に築かれた弘浪山。→



←夏タイヤ帰省客も動き始めました。よかったですね。納屋の軒下から玉ねぎも別れを惜しんでいます。  
(いずれも氷上町本郷にて)



## モンテッソーリ教育と私の夢

池田 和子 (市川市)

モンテッソーリ教育とは、イタリアの医学博士であり、教育者であるマリア・モンテッソーリ女史の理念に基づいた教育学であります。0歳児教育から幼・小・中・高・大学まであります。

幼児教育には、五つの分野があり、日常生活の訓練、感覚教育、数教育、言語教育、文化の領域があります。教育の特徴は、普通の幼稚園が同年齢の子どもの集団であるのに対し、モンテッソーリは縦割り、即ち、違年齢、三歳から六歳の子どもが同じクラスに編制されています。学習も遊びもお仕事と言います。

子どもは同じ年齢でも四月生まれと三月生まれでは一年の差があり、違年齢編制では、その差が気になりません。年少児は、年長児の子どものお仕事を見ることができ、自然と学び合う環境にあり、また、五つの分野のお仕事を次々学べる環境にもあります。





日常生活の訓練は、日頃お母さんが行っておられることを子どもサイズでやります。感覚教育では、感覚の洗練、視・聴・触・嗅等同一性識別の分類力を養う。数教育は具体物の量と抽象化された数学の一致・理論的思考・数学的頭脳の育成。言語教育は、言

語の敏感期の子ども達に読み書き文法遊びにまで発展。文化は、地球の成り立ち、生命の表を学びながら世界の国旗を通して各国にも興味を広げ、また、日本地図は模造紙大に県別を覚え、それぞれの地域を確認しながら地図を作成等、全人的な人間の育成を目指します。私がこの教育を知ったのは、従妹のシスターが神戸のモンテッソーリ園の園長をしていて、これからの幼児教育はモンテッソーリ教育よと言っていました。

私が最後に赴任した学校で、入学式の際、同じ敷地内にある公立の幼稚園から一年生に上って来た子ども達が飛んだり、はねたり、大声を出して、入学式が式

らしく出来なかった時、園長先生にどんな教育をしているのですか、とうかがったことがあります。「自由保育です。」という答えによくよく聞いてみると、毎日砂場や大きな積木で遊んでいますという答えでした。こんなことをしていて本当に良いのでしょうか。子どもの中には教室になじめず、校長室に何人もの子どもが「エスケープして困ります。」あづかって下さいという担任に大変困ったことがあります。

退職して、モンテッソーリ園を、例のシスターが訪問させてくれました。長い廊下に千のビーズを一から数えている子、文字に集中している子ども、全員が別々のことを一生懸命やっているではありませんか。私はこの小さな子ども達が熱心に教具をさわっている様子に驚かされました。市川に帰って早速「東京国際モンテッソーリ教師トレーニングセンター」を訪問して学ばせて下さいとたのみました。一年間は目からウロコの毎日でした。

退職金をはたいて、主人の援助もあり子どもを設立し、今年で十九年になります。

卒業生も大学四年生になりました。毎年、国立大に

入っています。今年は五回生が千葉大に高二からとび級入学しました。二名の合格者の内の一人です。塾に行かないで京大に入学した先輩もいます。

子どもは0歳から六歳までは大人の四倍吸収すると言われています。六歳を過ぎると努力しないと学べないそうです。

モンテッソーリ園を卒園した世界のリーダーには、オバマ大統領、クリントン大統領夫妻、ビル・ゲイツ、グーグル、アマゾンなどの創立者の方々がいます。幼児教育の重要性がうかがえることです。

私も世界二十数ヶ国を五、六年かけて視察して来ました。それぞれの国で工夫されたモンテッソーリ教育を実施していました。

残念ながら、日本には小学校以上の学校は一校もありません。プレスクールとして在籍校に籍を置いて、通っている子どもや、私共のように週二日(四時から六時)通ってくるのが現状です。毎日がモンテッソーリ教育だと、自分のペースで学ぶことができ、登校拒否や不登校の子どもはなくなるのではと思います。

子ども達が毎日生きいきと楽しく学習できる学校を

作りたいのが私の夢です。

モンテッソーリ教育は平和教育です。一人ひとりが生きいきと、自分の天分を伸ばし最上の自分を育てるべく努力し、お互いに励み合い社会に貢献することが平和な世の中の到来になると信じています。

(昭和8年生/モンテッソーリ・スクールひまわり子ども  
の家園長、NPO法人小学生モンテッソーリ・スクール  
理事長)

## 遙かなるチャコ

前田 武彦 (目黒区)

チャコ地方

チャコ地方といっても「山ざる」の読者の大部分の方々には、多分、初耳で無縁の地名であろう。

チャコとは南米大陸の内陸、そのほぼ中央に位置し、

ブラジル、アルゼンティン、ボリヴィア、パラグアイに広がる広大な大乾燥地帯のことで、永らく、「人類に残された最後の未開地」と云われてきた。粗放な牧場地帯で、主に灌木の繁る大平原地帯で、面積は日本の国土に匹敵するかそれ以上と云われる。地形は平坦で、唯一標高数百呎程度のレオン山があるのみである。パラグアイチャコは、パラグアイ河流域の湿地チャコ、ピルクマージョ河流域の低地チャコ、そしてこの両流域に挟まれる乾燥チャコの三地帯に分けられている。パラグアイ河の辺りで年間1500mmの降雨があり日本とほぼ同じであるが、北西に奥へ入るに従い雨量は少なくなり、ボリヴィアとの国境地帯では、年間200〜300mmほどになってしまう。

荒野に牛を追って、銃と投げ縄を馬具に備え、夕陽に消えゆくガウチョ（カーボーイ）の姿と風景は、パラグアイの人々に、そこはかとなく哀調と慕情を引き起こすのである。

### 三国戦争とチャコ戦争

パラグアイの人々にとつて、チャコは思い出と悲しみを呼び起こし、愛国心を奮い立たせる地名でもある。

パラグアイ人は、一八一一年の建国後、二度の戦争を経験した勇敢なる国民でもあった。一八六五年、領土的野心を武力で解決しようとしたブラジル、アルゼンティン、ウルグアイの三国は同盟してパラグアイに戦争を挑んだ。一八七〇年、パラグアイはこの三国戦争で敗北し、甚大な損害を被った。領土の大半を失い、人口も百万人から二十万人に激減し、このうち九十パーセントは婦女子と老人であった。この時、パラグアイの多くの婦女は、子孫を残すため多くの父のない子を産んだという。今日の私生児が多いというパラグアイの風習は、ここに起因するという。

この甚大な被害をもたらした三国戦争の後、一九三二年、パラグアイは植民地時代から不明確であったボリヴィアとの国境線の確定をめぐる、領土戦争を戦った。このチャコ戦争の背景には、両国の石油事情が絡んでいた。パラグアイとの国境に近いボリヴィアのカミリイには石油を産するが、この搬出に東へはアンデス山脈に阻まれ、太平洋への道は閉ざされている。そこで利権を獲得した石油企業がピルクマージョ河を通じて、大西洋へのルートを確保しようとしたのである。

この戦争は、一九三五年に終結したが、パラグアイ、ポリヴィア両国とも戦勝を唱えている。

このチャコの戦いはパラグアイの民族主義の源であり、国民に、国家的団結を訴える魂の拠り所となっている。そして、戦後パラグアイの支配層の多くは、この戦争に参加した軍人によって占められてきた。

今もパラグアイの国会議事堂の近くに、戦利品の戦車が展示されている。また首都アスンシオンの中心に位置する英雄広場には、パリのアンバリッドを模して造られたドーム型の霊廟が建てられている。ここにはパラグアイのチャコ戦士達の霊が祀られており、昼夜24時間滞ることなく、パラグアイ国軍の衛兵に守られている。

### チャコの調査

私は、パラグアイには通算十年間程勤務しており、赴任中何度かこのチャコに入った。帰任後日本に勤務している時にも「チャコにおけるホホバの調査」を命ぜられ、このチャコの奥深くに踏み入ったことがあった。大分以前のことになるが……。

我々調査団は、ランドクルーザー2台でアスンシオ

ン市を出発し、一路、経過地のポツソコロラド（濁った水の井戸の意）へ向かった。ポツソコロラドまでは道路の両側数kmが牧野として開かれており、牧野には檳榔樹に似た木の林立しているのが目立った。時折、自動車の音に驚いて数十羽の鳥が舞い立った。この地帯は野鳥の宝庫でもある。チャコには、減少しつつあるが、ピューマ（アメリカライオン）などの野獣やワニなども現存している。チャコとは、巻狩りを意味する語でもある。

ポツソコロラドは、地図上では四角に市街地があるように表示されているが、着いてみると、数名の軍隊の屯所とガソリンスタンド、バラック小屋の食堂が原野の中にあるばかりであった。ポツソコロラドを過ぎて更に奥地に向かった。国道の両側には、同じ様な景色が延々と続き、道路は地平線に点となるまで伸びていた。

このパラグアイチャコは、面積が凡そ日本の六割に相当する広さがある。人口は正確には把握されておらず、大分以前のことになるが、公的機関で訊ねても、六万人とも九万人とも言われ、正確な人口は分からない。

かった。主にガラニー族が住み、人口密度の希薄な地帯である。

我々は、この古戦場跡でもある、兵どもの夢の跡を経つつ、目的地に向かった。稀に出会う原住民の集団の中、遠くに、一人白い足をした母親が子を抱いているのを見つけたが、これもチャコ戦士の落とし子であつたらうか。

パラグアイには、チャコ地方とは別にパラナ河沿いに数十kmの中で、所謂テーラロシアと呼ばれる肥沃な土地が凡そ三百万畝広がっている。テーラロシア地帯の開発では、官民の開発努力が傾注されてきたが、チャコ地方は、灼熱の乾燥地帯であり、デング熱、レーシマニア、シャーガス、レプラなど悪疫瘴癘の地とも言われ、開発は遅々として進んでこなかった。

産業は、主に肉牛の畜産であるが、周辺地域と比較して条件は悪い。牧場を経営してゆくには二千畝以上が必要、とされている。もつとも、地価は低く、私が調査したところはヘクタール当たり、国道沿いで50〜100ドル、国道から100kmも離れると10〜20ドルであつた。売買の面積も数百畝以上であつた。

一方、近年、パラグアイ政府はチャコにも目を向け始め、医療の未発達時代など悪疫の地と恐れられていたこの地帯を開発し、国の経済に組み入れるべく、チャコ開発委員会を設けてチャコの総合開発を緒につけようとしている。

開発委員会は、チャコ開発を国家目標として、天然資源の合理的利用により、チャコ地方を国の経済活動生産活動に連動させようとしている。

#### メノニータ入植地

チャコのほぼ中央、フィラデルフィア市を中心に、約八十年の歴史を有する特筆すべきメノニータ（キリスト教系の宗教団体）の入植地がある。このメノニータの入植地は、ドイツ系の Colonia Fernheim と Colonia Neuland、カナダ系の Colonia Menno の三つの入植地から成っており、地区は凡そ百万畝におよび、約一万二千人のメノニータが居住している。

メノニータの歴史は古く、元々ドイツに存した宗教集団で、一七八〇年代の終わり、祖国の教育や宗教に対する干渉と迫害に耐えかねて、彼等はロシアに移住した。一九二〇年代には幾つかの入植地を形成し、人

口は十万人に達した。しかし、一九一七年のロシア革命で破壊と殺戮が繰り返され、その苦しみと食糧の窮乏から、彼等は居住地のロシアを棄てて、再び移住を開始した。ロシア革命後の体制のもとで、キリスト教の信仰を禁止されたメノニータは、信仰を守り安住の地を求めて、ロシアに背を向け、アメリカ大陸に再び入植地の建設を決意した。その数は一万人を超えたと言われる。彼等はドイツを経て Breder in Not (大事な同胞) と Menonita Central Comitee (メノニータ中央委員会) の組織の支援を得ながら、カナダ、パラグアイに渡った。しかし、彼等の受け入れは必ずしも温かいものではなかった。パラグアイ政府は法令第五一四号に基づき、当時「地獄の緑地帯」として名高かった中央チャコ地帯の開発移民として、彼らを導入した。

メノニータの移動は難渋を極め、航海中にはチフスが発生し、又チャコに入植してからも氣候、風土、習慣の違い、食糧と飲料水の不足に辛酸をなめ、あげく病気に侵され、多大の犠牲を払った。

しかしメノニータ集団は、今もこの未開地の過酷な自然条件の地に生活の基礎を築きあげ、厳しい宗教戒

律のもとに、自律的、自給的、求道の生活を送っている。彼等は、綿、ヒマ、落花生、牛乳の生産を行い、共同組合、加工工場、農業試験場を運営し、独自に、組織的な、行政・経済基盤を持つに至っている。そして、入植地の建設に成功したメノニータ集団は、更に周辺インディオ一萬三千人を混住させ、インディオの教化と保護まで、その活動を広げている。

我々がメノニータの試験場を訪ねた時、その人夫頭は土着のインディオであった。彼はこの地帯に存するインディオの種族を、カトレラ(西語で悪い寝台、の意)族、レングア(西語で舌、の意)族と言っていた。スペインの侵入者達は、征服されたインディオの先祖にこれらの種族名を付けたわけであるが、スペイン人とインディオの接触の様相が何となく俚げられる命名である。

#### ホババ調査

我々はフィラデルフィアを出立し、ボリヴィアとの国境に通ずる土道の国道9号線を北上した。道の両側には、灌木の林が迫ってきている。チャコ地帯は西にゆくほどだんだんと雨量が少なくなり、道脇の木々の樹高も低くなり、棘の多い乾燥地特有の樹木が目立つ

てくる。時々黒い幹に、枝を思いのままくねらせ、魔法使用の手を束ねたような木が天を搔くように聳えていた。調査団の目的は、この乾燥地帯でホホバ栽培の可能性について調査するものであった。

ホホバは、カリフォルニアとメキシコのソノラ砂漠に自生し、その実から搾った油をアメリカインディアンが、食用、皮膚病の治療用として用いてきた。これが、鯨の捕獲禁止とあいまってマッコウ鯨油の代替品として着目され、用途が急速に拡大した。一畝からの生産量は、七十五頭分の鯨の油に相当する、と言われた。この油は、当時は対高熱高速用の潤滑油としてロケットエンジン、ジェットエンジンに、また研磨油として、最近では抗生物資の材料として医薬品、化粧品などに用いられていることなどが報じられていた。が、近年は石油化合物が開発され、需要は減ってきているとも言われる。

ホホバの注目すべき特質は、半乾燥地に生育し、土壌塩分に強いことである。即ち、従来あまり利用価値の少なかつた不毛の地に栽培が可能であること、従つて土地の利用上、大豆、トウモロコシ等の一般作物と

競合しないことであつた。

ホホバは椎の実に似た実をつけ、油成分の含有量は四十乃至五十%と極めて高い。ホホバ油は、天然油として純度が高く、エステルロウの成分が九十七%を占めている、と云われる。

チャコ地方には、数十本試作されているものを含めて、調査時点で、十四か所、約二千畝に植え付けられていた。

我々は、米國、アルゼンティンのホホバを見る機会も得たが、灌水によらず栽培されていたチャコにおけるホホバに比較して、非常によく生育しているのが見られた。

貧困は乾燥地に多い、半乾燥地の農業開発はこれからの大きい世界的課題であろう。その中で、ホホバの新たな用途が開発され、重要な作物として見直される時が来ることを期待したい。

(昭和15年生、春日町出身) JICAパラグアイ国ホホバ栽培開発計画調査団団長、参考文献 KAPUNI MENNONITA、チャコ戦争における鋤と銃、他

## 細見綾子さんのこと

藤 田 玲 子（入間市）

細見綾子さんは、明治四十年三月三十一日兵庫県氷上郡芦田村東芦田、現在は青垣町の東芦田に生まれました。大正八年、柏原高等女学校に入学、翌年お父様が亡くなります。綾子さんはお母さんと二人の生活に



細見綾子さん

なりますが、伯父様の賛成もあり大正十二年、日本女子大学に入学し、昭和二年に卒業しています。その後、東大医学部助手の太田庄一と結婚して、東京本郷区小石川に住みます。二年後夫が病気になる、お母さんを丹

波から呼んで二人で看病しますが、その甲斐なく、夫が亡くなります。又、三ヶ月後に、お母さんも同じ病気で亡くなります。自分も肋膜炎になり古里丹波に帰って療養生活をしていました。その時、佐治町の医師、田村菁齋先生が、俳句を勧めました。病氣のことより俳句の話ばかりして、はじめはうるさいなど思っていたと話しています。

田村菁齋先生は松瀬青々主宰の「倦鳥」の同人でした。細見綾子さんもやがて松瀬青々の教えを受け、この松瀬青々から、生涯を貫く指針を得ておられるようです。

松瀬青々は正岡子規から囑望されていた人で写生ということを大切にしていました。初めあまり気乗りがしなかった綾子さんは物事を深く観て考えることを教えられ、それがおもしろくなった、と云っています。その頃の句が、第一句集「桃は八重」

でで虫が桑で吹かる、秋の風

そら豆はまことに青き味したり

来て見ればほ、けちらして猫柳



この「来て見れば」の句が後の夫君、沢木欣一氏の目に留まりました。

彼は「倦鳥」の同人でしたが、出征する時自分の句稿を綾子さんに託します。

昭和十九年に託された句稿を沢木欣一の第一句集「雪白」として、綾子さんが出版しています。

昭和二十年十月に復員した沢木氏と二年後に結婚しています。三年後に長男太郎さんが生まれています。

これは、沢木欣一氏の句なのでしょう。

眉濃ゆき妻の子太郎栗の花

家族の喜びが目に見えるようです。

この頃、綾子さんの第三句集「雉子」

山茶花は咲く花よりも散っている

雪今日も白魚を買ひ目の多し

昭和三十一年、綾子さんは金沢市より武蔵野市境南町に家を建て転居します。その家を建てる時には丹波から材木を運び、大工さんも丹波から呼んだそうです。

それから十年余り経った頃ですが、私も結婚して、丹波から東京へ移り住みました。綾子さんは昭和五十年に第五句集「伎芸天」で文部大臣賞を受けました。又、俳句では最高と言われている「蛇笏賞」も受けています。その後、NHKの趣味講座「俳句入門」の講師もしておられました。

綾子さんは有名になられても少しも変わらず丹波布のような、飾り気のない、自然の美しさを持っておられました。

私の好きな句を挙げますと、

ふだん着でふだんの心桃の花

黒豆を煮んか粉雪が降つて来る

木蓮の一片を身の内に持つ

雉子鳴けり少年の朝少女の朝

キャスリン、バトル虹立つように唱いたり

虹立つ、は句集の題名にもなりましたが、私は、黒人歌手のすきとおるような美しい声を思い出します。

(昭和31年柏原高校卒／氷上町出身)

# 岡倉天心市民研究会に

## 参画して

鴻 谷 正 博 (横浜市)

幕末に横浜で生まれ、日本の美術行政の基礎をつくり、近代日本画の創設を指導した岡倉天心——その思想や精神を学ぶことを目的に設立された岡倉天心市民研究会(横浜顕彰会)がスタートして1年余りが経過しました。そこで、世話役の一人として、天心の実像や研究会の活動などを紹介してみたいと思います。

### 1 幼少時代の天心

慶応義塾の創設者となった福沢諭吉は、開港間もない横浜を訪れますが、蘭語が全く通じず、これからは英語の時代だと痛感した、といわれています。幕末の横浜には、多くの人々が様々な目的をもって集まってきました。岡倉天心の父、岡倉勘右衛門もその一人で、福井藩主・松平慶永(春嶽)の命を受け、羽二重など

の販路を海外貿易に求めてこの地にやってきました。安政6年(1859)、横浜開港の年のことでした。店は運上所(現在の神奈川県庁所在地)の前で、一方は外国人居留地に面していました。

天心が生まれたのが文久2年(1862年)、生麦事件の年)、店の蔵の角で生まれたため、角蔵と命名されます(後に寛三と改め、そして天心に)。天心は7歳から、宣教師のジエームス・バラ夫妻に英語を学びます。天心9歳のとき、母が急死し父の再婚もあつて、神奈川宿の長延寺に預けられます。寺には漢学の第一人者の玄導和尚がおり、ここで漢籍の素養が育まれます。天心にとって、英語と漢語は教養の基礎になっていきます。

やがて明治の廃藩置県で店は閉鎖され、一家は東京・日本橋の旧福井藩の屋敷へと移り、天心は、東京外国語学校を経て、開成学校(後に東京大学)に進むことになりました。東大にはお雇い外国人が多く、英語で苦勞する学生も多い中、天心は類まれな英語力を発揮し、アーネスト・フェノロサ教授の通訳になります。

このように、開港間もない横浜で生まれ、時代の激



横浜開港記念館前の「岡倉天心生誕之地」の碑

動を肌身で受け止めていったこと、そして古美術愛好家であったフェノロサとの出会いが、審美眼や知識を養い、天心の生涯を決定づけることになったものと考えます。

## 2 天心の残したもの

当時は廃仏毀釈の時代で、お寺とか仏像が壊されたり、また、日本の古美術がどんどん海外に流出したりしていました。天心はフェノロサとともに、文部省美術品調達掛として、全国を回るようになります。そして、そういうものの保護を図るとともに、今の国宝、重要文化財の指定制度を作りあげましたが、これらは天心の大きな功績といわれています。

天心は、明治22年（1889）の東京美術学校（後の東京芸術大学）開校に尽力し、翌年には校長になりますが、やがて追放され、そして、創設したのが日本美術院です。天心のもう一つの功績は、その日本美術院による日本画の復興、いや近代日本画創設への指導があげられます。

横山大観、下村観山、菱田春草らを育て、その系譜

は、小林古徑、前田青邨や平山郁夫など、現在に続きます。一番弟子だった横山大観の初期の作に、楚辞で有名な「屈原」の絵がありますが、それまでの花鳥風月の殻を打ち破るスケールの大きさを思想性が感じられます。

天心と言えば、「茶の本」を思い出される方も多いと思います。1907年に出されたものですが、1894年に内村鑑三の「代表的日本人」（二宮尊徳や西郷隆盛など5人を紹介）、1900年には新渡戸稲造の「武士道」と相次いで英語で出されています。中身は触れる必要がないと思いますが、いずれも欧米人の間で大きな反響を呼びました。アジアは一つで始まる「東洋の理想」も天心の名高い著作ですが、思想家としての名を高らしました。

### 3 美を求める心を大切に

天心顕彰会は、これまで、父祖の地の福井、五浦の六角堂の北茨城、晩年に移り住んだ妙高の3か所にあります。生誕地の横浜にはありませんでした。

一昨年は天心生誕150周年（没後100年）にあ

たり、横浜では地元の大学やマスコミが中心となって、様々なイベントが実施されました。これを一過性のもにしないということで、昨年6月に「岡倉天心市民研究会」（岡倉天心横浜顕彰会）が発足したわけです。この間、日本美術院同人をはじめ、天心ゆかりの講師を招いての研究会（隔月）、天心生誕記念碑前での前祭（10月）、福井での天心サミット（11月）への参加などを行い、さらにはそれらの内容を報告する会報「天心報」を7回発行することができました。幸い、会員も増え、多くの方に支えられて様々な活動ができ、会員同士の交流も進んでいます。できるだけ長く続けていきたいと考えています。

あの小林秀雄がこんなことを言っていたのを思い出しました。

「絵にしても音楽にしても、文学にしても、そういう（美の）姿を感じる能力と、そういう姿を求める心は誰にもある。……たくさん触れて感じなさい。わからないのがわかるようになってくる……」。

（1949年生、青垣町佐治出身／会社・団体の顧問、二宮尊徳研究に従事）

## 医学と信仰

前田 和 市（狛江市）



医者でも学者でもないのに、この見出しはどうかと思います。が、お許し下さい。

裕福ではなかったけれども、

信仰心の篤い両親をいただいた故か、これだと思えます。えがあればと、常に心の中で探していたように思います。

私が三十五歳の春に次男が生まれ、その陣痛の産室に盲腸の急患で坊やが運び込まれた。その奇縁で、私はある宗教に尊い仏縁を得た。気弱な私が「善い教えのようだからお願いしようね。」と家内に言ったのだから余程感銘を受けたのだと思います。

最初の帰苑は二日後の四月八日、花祭りの日、読経の経頭は教主様、厳かで優しく温かい音調、膝に抱いていた長男もおとなしくしている。二、三度の帰苑で頂いた苑独特の接心修行の不思議な心の安らぎと救い。

示されたことを素直に行った時に、迷路に入っていた事態の好転。頂いたその教えと事象を逢う人毎に、語り説いて歩いた。

開祖教主様の立教された頃のご手記に、仏陀本来の救いは、神霊現象のみによる病氣治療は賛成出来ない。仏陀本来の救いは、人間が本来具有している動物本能的な動物格をせめて人間格迄向上せしめ、更に此の人間格を仏格迄引き上げてゆく修行過程に、靈癒を顕わすのだから、そうでない宗教は私は邪道であると言いたい。（以下略）一九四〇・五・二三

このご手記は、開祖が真の救いに向けて道一筋に立たれた真情で、教団の信、行、解。信じて行えば解る。というあり方に生きております。

私は生まれ乍ら胃腸が弱く、八人兄妹で次男と三女は大腸ガンを患い五十代で、母も八七歳の長寿を頂きましたが、大腸ガンが全身に転移して亡くなっております。

入信当時私は三十代四十代。昼間は保険の仕事で神経を使い、月に一度、ある顧客と大酒を飲み交わす生活。外で飲まない日は晩酌を欠かさない。更にピース

一日六十本。

四十八歳の初夏でした。その日は立川の総本部でのご奉仕で、その責任者。略終りに近づき、お池の中に建つ弁才尊天堂に向って感謝の合掌をした時だった。一瞬、目の前がまっ暗に。咄嗟にこれは胃の出血と。明日は必ず病院と誓い、心から感謝の掌を合わせました。

翌日、赤坂の前田外科に受診、「即日入院手術」の宣告。「月曜に必ず入院しますから、今日は家に。」とお願ひして、翌日帰苑し、相談接心を頂いた。病に至る因縁や手術に向ける“お護摩”“お施餓鬼”を教わり「手術を受けると、数日は船底を擦られるような症状が示されますが、沖に出ると穏やかな航海になるようですよ。一切をみ仏様にお任せして、院長を教主様と思ひ手術を受けられたらどうでしょう。そして、元氣な体と、心で感謝の精進ですよ。」常に苑では病氣の時は先ず医者に、次に接心に取組むようにと教えられている。

月曜に入院即手術か。「貧血が酷い、栄養を摂って二、三日病院の周りを散歩して下さい。」二日程努力した

が、数値がちつとも上らない。「これ以上延ばすと命が危ない。この貧血では一滴の血液も無駄に出来ないし輸血はやりたくない。副院長と二人で手術をします。」と、胃の三分の二を切除。一日遅れていたら命は無かった。執刀の院長先生が、ほっとした笑顔で説明をして下さった。

術後は接心で示された通りに展開し、衰弱した身体に動物霊が入り込み、病院のコンクリートの壁が蚊帳のように揺れ動き、豚や牛が押し寄せた。家内の頂いた接心で、それは、幼い時殺生したり、飼育していた関係の動物霊で、教えられたお施餓鬼を今申込んだと電話が。それと同時にピタリと収まった。

加えて我が家に大きな変化が起きた。「今何もこれと言って心配な事がないのに、何故そんなに信心するの？」と反発していた家内が変ったのです。「今主人にもしもの事があつたら、未だ小さな子供二人を抱えて、私はどうする事も出来ない。どのように教えを求め歩むと主人の命が頂けるのですか。」と、導いて頂いた方に、食いつくように尋ねたと言う。

「解りました。教えて頂いた三つの歩みと、二つの

誓約、その為には趣味の藤纏染とお茶をきっぱり止めます。」と誓い、その大事な道具を全部廃棄物に出したと言う。秘めていた仏性がよかったのか、教化力のない私に、貴方が説得出来なければ、自分の体で問いなさい。と、お力を下さったのか。五つの請願を取り組むのが、大きな歓びになったのだと思います。苑の中で声をかけて下さる先輩に恵まれ、接心修行のお仕えが出来るようになってからは目が輝いて来た。八十歳を迎えた家内は、あの時苑の連がりが無かったら、今の充実した生活は考えられないと申します。有難い極みです。

その間、胃の心配は腸に移っていた。術後住まいと同じ狛江の名医を紹介され、毎年胃と腸の内視鏡検査を受け、腸には七、八回何個かポリプがあつて、都度切除した。高齢になつてここ十年余内視鏡を求めず、医院からも検査と言われない。二ヶ月程前に久しぶりに名医の問診を受け、その心配を問うと、「前田さん、お互いの齢になると、腸の内視鏡は命懸けなんですよ。」先日、葉だけなら近くの医院にしようと同うと先ず内視鏡検査と言われ、腸は断わつて胃の内視鏡を

受けた。胃潰瘍の手術跡以外、言うことありません。三枚の写真付できっぱりと。

喫煙は四〇歳の時に、お酒と両方では自滅と止め、飲酒は何かの薬と合わず、自然に晩酌はしなくなつていた。

そして十年程前から、就寝前に胃と腸を摩るようになった。何時しか朝夕の読経を無言で唱える。出来るだけ元氣な心と体で教えと体験を、と。何かが身体に伝わつて来る。そのような時、苑のある控室に段ボール箱が置かれ、中に雷様が手にされるようなマツサージ器が入っている。男性の部屋では誰も使わない。私は興味があつたのでチラシを頂き、書いてある電話で調べやつと渋谷の東急ハンズで一個求めた。その夜から今日迄それを手にして、食道の上をゴロゴロ、痩せてるから気持よくはない。けれど構わず、胃から腸と、昨今は頭の後部から首筋、腰迄擦る。始めは一、二だったが直ぐ読経に變つた。その頃一番難渋していたのが、胃の手術後起るようになった逆流性食道炎、夜休むと激しくなる。その辛さが堪らず、背の所が持ち上がるベッド迄購入し、限度迄上げたがちつとも効かない。

そのマッサージを始めて二ヶ月程経った時、あの辛さは何処へ行つたのか、痛くも痒くもない。効いたのは、読経とそのルンルン間違いない。

悪かったのは胃腸だけでなかった。五二歳の春先に苑の定めで健診を受け正常。秋に入った頃に微熱と軽い咳で日大板橋病院受診、肺ガンの疑いで精密検査待機中に、苑の運動会打合せ会合の場で高熱に倒れた。何をしても熱が下らない。清瀬の結核病棟に入る羽目になった。診断が出ない。約一ヶ月後「前田さん、お目出とう。」何がって、結核菌が出たのよ。肺ガンだったら命が危ない。肺結核で死ぬ事はない。」先生は我が事のように喜んで下さった。後で前記の先生方を交え、三人の先生がこんな結核もあるんだと話し合われたとお聞きした。

数日前テレビで腰痛の治療に、何でも手術でなく、運動で筋肉を強める療法が主流になって来たというのを見た。最後は多くの人を手術で治された有名な先生が、よく診て、その方に合った処方を見出すことが大切と、力無く話しておられた。

(昭和4年生、山南町出身/㈱永愛友オフィス役員)

## 私の仕事(株)セシアテクノ

足立忠司(狭山市)

「私の仕事」での寄稿も3回目となるため、少し仕事を離れた内容を前書とさせて頂きます。山ざるへの最初の寄稿で、就職して見知らぬ埼玉県川越市にある研究所に配属されたが、川越にある喜多院には三代将軍家光と春日の局が生活した屋敷が江戸城から移築されており、川越に縁と親しみを感じるようになったと書きましたが、春日の局との縁はその後も続いているように思われます。定年後しばらく、東京ドーム近くの本郷1丁目で過ごすようになりました。この辺り一帯は、春日の局の所領だったとのことで、春日町名の交差点や地下鉄の春日駅など、丹波と同じ春日の文字が目につきます。丸の内線の後楽園駅前を南北に通る春日通は、江戸時代から川越街道と称され川越に通じています。また、後楽園駅から中央大学に向かう富坂には、春日の局の銅像(写真)が春日通を見守るよう





文京区中央大学近くにある春日の局像

前を通り過ぎようとした時、思いがけなく春日の局墓所の表札が目に入りました。これはと思いいきますと案内があり、その先に、ひとときは立派な春日の局のお墓がありました。此処でも何か懐かしさを感じながらお参りしました。

歴史話のついでになりますが、田舎では足立姓が多く、高校ではクラスの4、5人が足立だったため、平凡でありきたりな名前だと思っていました。この時は、東京の足立区と丹波の足立とのつながりは意識してい

に立っています。2年ほど前から上野不忍池近くで生活するようになりましたが、東大の構内を抜け、春日通を湯島天神に向う散歩の途中で、小さな門構えのお寺（麟祥院）の

ませんでした。つい最近、書店で埼玉県史の本を何気なく開いたところ「埼玉の足立氏」の項目があり、そこには伊豆で挙兵した源頼朝が、相模の国、石橋山の戦いで敗れた後、阿波から武蔵に入った際、最初に出迎えたのが、足立郡（埼玉、東京にまたがっていた。）の領主、足立遠元であった。との記載が有りました。元々は藤原氏北家の流れのようです。その後、鎌倉幕府の要職を務め孫の足立遠政が、丹波佐治庄の地頭となり栄えたようです。これが丹波で足立が多い理由と納得した次第です。田舎の親戚に系図が残っているのでも聞いたところ、足立遠政の名前があるとのことでした。近頃、足立区の北千住に行く機会が多くありますが、長い時を経て子孫が戻ってきたと勝手に思い込んでいます。

ところで、足立の名前ですが、奈良時代の木簡に「足立」の文字があるそうです。名前の由来は諸説あるようですが、私が気に入ったのは、日本武尊が東征の途中、埼玉県大宮市近くの浅間町に来た時、急に足が動かなくなり丁度そこにあった松に座っていると、老人が現れ、近くに先祖（スサノウ）を祭った神社がある、

そこに願いをかけると治ると説いたので、その通りにすると足が良くなり立てるようになった。それからこの地を足立と言うようになった。という「腰掛の松伝説」起源説です。足立には、立ち上がり事を始める、目標に向け出発する、の積極的な意味もあるようです。このように足立姓も結構面白いことが分かってきました。

つい前書きが長くなってしまいました。本稿のテーマである「私の仕事」について少し近況を紹介し、ご存知のように「はやぶさ2」は昨年12月に打ち上げられ、小惑星1999JU3に向かっています。この小惑星は岩石が主体の「いとかわ」より一回り大きく、炭素を多く含む組成のため、地球生命の起源に関わる情報が得られるかもしれないと期待されています。私の会社では、この「はやぶさ2」プロジェクトに参加し、小惑星探査ロボット「ミネルバーII」の開発に携わってきました。この「ミネルバーII」は小惑星上を送り込まれ、自律移動しながら写真撮影や温度計測を行います。開発期間が短く、性能要求も厳しかった為、打ち上げに間に合わせるのに結構汗をかきました。打ち



MINERVA-IIは小惑星上を自律移動しながら、表面温度計測、カメラ撮影を行う。データは、はやぶさ2経由で地球に伝送

いますが、残念ながら中国に先を越されてしまいました。他国の月面探査ロボットの動力源に採用されている原子力を使用することなく、厳しい月面環境で活動できる我が国独自の技術開発にどうか目処が立つてきました。最近、世界で初めて月の極域に行く計画案が出てきており、日本の月面探査計画は流動的な状況になっていきます。我々の月面探査ロボットが、月に行けるのももう少し先になりそうです。

未だに宇宙ロボット分野に関わっていますが、福祉介護ロボット、農業ロボット等、ロボット技術の活用の話題には事欠きません。何かふるさとに貢献できる

上げ後の機能確認試験結果では、機器の動作は正常であったとの報告を受けています。しかし、3年後の到着ですので、まだまだ気が抜けません。この他、月面探査ロボットを月面で走らせる為の研究開発に長年関わって

テーマを見つけれないかと思う今日この頃です。

(昭和24年生、春日町出身／(株)セシアテクノ代表取締役)

## 古希を超えて思うこと

足立 東一郎 (白井市)

「古希」という言葉を辞書で引くと、七十歳の異称。杜甫の詩の「人生七十古来稀なり」にもとづく語とある。また、稀な年に達したのを祝う意味でも定着している。ただ、杜甫自身は五十九で亡くなっていると伝えられており、古希を経験したことにはならない。

幸いにも私は古希を無事に超えることができた。これまで、大きな事故や災害、病気などに遭ったことがない。運が良かったのだろう。

古希を過ぎてから、身体的な面で変化を感じることも多くなった。

妙に涙もろくなり、ドラマのシーンやせりふに感動

し涙が滲み出ることがしばしばだ。

人や物の名前がとっさに出て来なくなったり、漢字がなかなか思い出せなくなってきた。

何気ない普段の生活の中でも手やひじが周りにぶつかることが時折おきる。若い頃にはなかったことだ。

否応なく歳のせいだと認めざるをえない。

今年、戦後七十年ということで、新聞、テレビの報道でも戦後の様子がいろいろな形で取り上げられている。七十年ともなると戦争を体験した人達も年ごとに少なくなっていく。戦争の悲惨さを知らない若い世代に戦争について伝えていく良い機会でもある。

偶然にも、私は、我が国が無謀にも大國米國に戦いを仕掛けた年の生まれである。その意味でも戦後七十年は自分自身の歩んできた年月そのものと重なる。

丹波の山深い田舎で生まれ育ったため、戦いそのものの記憶はない。わずかではあるが、夜、電燈のまわりを黒い布で覆い、灯りが外にもれないようにしていた様子が頭に残っている程度だ。

小さい頃は、家が農家であったが、とにかくいつも腹をすかせていた。日常的におやつを口にした記

憶はない。食べる物は自給自足で、身につける物など日用品は、今から思えば必要最小限の物しかなかった。物のない時代に育ったせいもあってか、物が足りないとか欲しいとかの気持ちは強くなかったと思う。

時代が進み、中学、高校の頃には、農家にも耕運機、精米機など機械が入ってきた。同じ頃、農業の普及によって、回りの田んぼや小川から田螺やどじょう、蛭などの姿が消えた。

高校を終え上京した頃は、大量生産、大量消費の時代に入り、生活の利便性も向上し、テレビや映画などの娯楽が広がり世の中は活気にあふれていた。

私自身は、残念なことに、貧乏学生であったため、豊かな生活とはまるで無縁の日々を送っていた。就職してから、バブルの時代も経験したが、バブル景気を直に感じたこともなかった。

低成長の時代に入って、生き方の多様化もあると思うが、今や、働く現場では非正規の労働者が四割を占め、しかも若年層が圧倒的に多いとのこと。非正規雇用は、地位が不安定の上、低賃金で健康保険や年金の保険料を払えない現実がある。これでは、結婚、子育て

など難しいと思う。このままでは、社会の基盤である社会保障制度は遠からず機能不全となる。若い人たちの未来に心が痛む。とにかくどのような境遇にあっても未来を信じて頑張つて欲しい。

経済優先の社会は、人と人との関係や心の問題をいつの間にか置き去りにしてしまった。インターネットやスマホなどIT社会の進展は便利だけ人間への関心を薄くしてしまった。この先の社会を私のようなアナログ人間には想像したくもない。

今、我が国で起きている動きも非常に気になる。私は、東京で「60年安保」を体験した。時の政権が強行する安保改定に反対する大衆が、連日、デモで抗議した。学生も積極的に参加した。条約改定が自然成立した1960年6月19日午前0時、私は国会前に座り込んだまま朝を迎えた。ただただ「無力感」だけが残っていたのを今でも覚えている。

半世紀以上経って、また同じような光景を目にするとは想像していなかった。いま進められている安保法案の改正は、国の安全という国民にとって最も大切な事を、憲法解釈という姑息で乱暴なやり方で、しかも

数で押し切るといふのは言語道断だ。国際社会の信頼は得られるのだろうか。

また、福島第一原発の事故から4年、事故によって今でも11万人の住民が避難生活を余儀なくされ、ふるさとを奪われ、放射能の危険にさらされている。にもかかわらず、日本各地の原発で再稼働が淡々と進められていることが理解できない。

いずれも、命に係わることであり、次の世代へ大きな負担を残すことになり、許せない。

七十年は重ねてみるとあつという間だ。平均寿命から考えても、この星で暮らせる年月は残り少ない。今日の一日は、これまでの一年にも相当する貴重な日々だ。無駄にするわけにはいかない。

南米には、年の取り方について、「老いる者と、若さを重ねる者がいる」という表現がある。というのを何かで読んだことがある。

私も、それにならない、健康寿命を維持し、子供たちに介護の心配だけはかけないよう努力していきたいと思っている。

(昭和16年生、青垣町出身／元東京都職員)

## 終活 献体という選択肢

井出恭子(川崎市)

一 献体とは 医学及び歯学の発展と未来の医学を担う医学生の実習として人体を解剖し学ぶ為に、生前本人の意志で自らの肉体を提供する事である。医学生にとって解剖実習は生命線であり献体者の志なしには医者は育たないのである。献体希望者は各医科大学にある医学生を育てる為の後援組織である会に親族の同意書など添えて正式な手続きを踏み登録を完了すると会員証(献体登録証)と献体の会が発行する機関誌が送られてくる。登録者が死亡すると遺族の連絡により遺体の引取りが行われ移送費などは大学の負担となる。通夜や葬式後でも可能であり、通常出棺して火葬場に向かうのだが大学からの迎いで大学に運ばれる点が違うだけである。運ばれた遺体は血抜きをし防腐剤注入などの処理を施し一休ずつ袋に納められ霊安室のロッカーに保存される。それらの準備期間に三

六ヶ月を要しその後、解剖学の教授の指導の元、一人の遺体に数名の医学生が決められた時間割により行われ生前の病歴や手術歴などは「正常」のものとの比較する事によつて良い学習が出来る事になる。実習期間は各々の状況により異なり数年をかけて終了後は一体毎に大学側で丁重に火葬し、公式行事として毎年厳肅な慰霊祭として法要が行われ遺骨となつて遺族の元に帰ってくる。

二 遺族の心情 父から献体をするに聞かされ、その動機を問うと、自分の病気が何らかの役に立てるといふ事、長男として祖父母、両親を田舎の古い慣習に従いその大掛りで煩雑な葬儀で見送つた経験を息子には同じ思いをさせたくないといふ事、遠く離れて暮らす子供達と病弱な妻に一切の負担をかけたくないといふ事だと、また献体をして葬儀関連の行事を行わないとその強い意志は翻る事はないと私達姉弟が納得し承諾したのは父が喜寿を迎えた頃だつたと思う。しかしいざその時が訪れ息を引取つた病院から直接大学からの迎への車にストレッチャーに乗つたままの父との今生の別れはあまりにもあつけなく事務的でスピーディな

事の成りゆきに涙も出ず茫然と立ち尽くしていた。余命数ヶ月の宣告を受け覚悟もし個室での一ヶ月の看病を私達は出来る限り付き添ひ悔いる事はなかつたはずだが……人の死は、古来から受継がれてきたお通夜、葬儀火葬など二連の儀式と自らの手で遺骨を抱き生の別れを体験して悲しみの中でその死を受け止め納得していくものだと思う。献体者の遺族となつた私は数年間父の死を現実の事として受け止められない苦痛を味わつた。安置されたロッカーからどんな姿で取り出されどんな処置を受けているのかと悪夢にうなされる事もあり、「自分だけええかつこしたつもり? 残された者がこんな心境で苦しむ事まで考えてくれたの?!」と何度も父を恨む事もあった。三年の時を経て大学からの連絡を受け大学の菩提寺での立派な法要の後、父はずつしりと重い全骨で私達の元に帰つてきたのである。その年の会の機関誌には実習生達の献体者への感謝の思いが切々と述べられていた。献体者一人に対して数名の医学生が数年の歳月をかけて向き合いその人が生きてきた証と最期のメッセージを深く心で受け止めその人生にまで思いを馳せたという。解剖実習とい

う貴重な体験を通じこれからの人生をかけてその恩に報いたいという医学生達の純粋な文面であった。

三 父の終活 昭和五十三年、山南中学校八代目校長として定年を迎えた父、藤田茂の晩年は数々の病との闘いでもあった。退職後重度の老人性喘息を発症し、その治療に依るステロイド禍の後遺症、肝臓などの内臓疾患、全身の通風発作などで入退院を繰り返し、夥しい薬の投与に依る連鎖的な薬害後遺症もあり喜寿を迎えた頃から父は漠然と自分の死期を悟り教育者としての最期のけじめをつけたいという自己満足の中で終活を始めたのではないだろうか。献体の承諾を私達から確認した後、通常の葬儀なども一切しない事、献体という形で静かに生涯を終えるという挨拶状を作成し親戚親族、友人、教え子とそれぞれのジャンルに分けて出すべき人の宛名までも自筆で書いてあり、その用意周到ぶりには呆れながらも脱帽であった。あれから十六年という歳月の中、父が本当に望んでいた思いは何であったのか、献体という選択は正しかったのか、生前親しく関わりのあった人達からの見送りもなくひっそりと逝った事が本当に良かったのか、私達は父

の意志に背いてでも父が生まれ育った丹波との別れの儀式で父を旅立たせるべきではなかったのかと今もまだ私の中で答えは出ていない。命日月の六月、雨の丹波へ一人帰省した私は、自分の人生の残された時間とどんなふうに向き合うべきなのか、悔いのない終活とはどうあるべきなのかと墓前で父に問うてみたけれど……。

○春浅き喜寿の命は淡くして刻の重きに夕暮れなすむ

○わが齡喜寿にとなりぬ老いゆきてなお幾年を生きは

永らふ

○悔い多き日々を悔いずとふてくされ居直りてみて今

日も生き居り

喜寿に詠んだ父の歌である。

(昭和19年3月生、市島町出身)



撮影・岡吉明

## 柏陵同窓会に

### 参加させて頂いて

石塚 富貴（足立区）



今年の七月十一日（土）に  
学士会館にて柏陵同窓会（東  
京支部の総会・懇親会）が開  
催されました。私は東京で勤  
務するために移り住んで二年  
目になるのですが、東京でこのような会が催されてい  
ることは知らずにおりました。今回参加させて頂いた  
のは偶然同級生から伝え聞き、その友人が誘ってくれ  
たからに他なりません。吉見君、素敵なきっかけを作っ  
てくれたことに感謝します！

私は参加させて頂き大変驚いたことが二つあります。  
一つは私が予想していたよりも遥かに多く百四十九名  
の方がお集まりで、来賓の方にも辻丹波市長を始め  
錚々たる面々がいらしたことです。その多くは三十〜  
四十歳程も歳の離れた大先輩であり、二十代は私を含

めて三人だけ。東京にこんなに柏原高校出身の方がい  
らしたと、身を以つて柏原高校の歴史を感じ圧倒  
されてしまいました。沢山並べられたテーブルの一角  
に私たちは最初三人で固まって、どんなお話しをさせ  
ていただいたらよいものかと恐縮してしまうほどでし  
た。ただ、そう思っていたのも最初だけでした。いざ  
懇親会の部が始まると「どの町出身なの？ 今はず  
ぜ東京にいるの？」と周りの方が優しく声をかけてく  
ださり、皆さん同郷ということもあり「あ〜！ 山南  
町は私の姪がいるのよ。」等と地元トークが始まり、  
すっかり歳の差も忘れて話に夢中になりました。また  
既に定年退職されているような方もたくさんいらつ  
しやり、若い時のご経談をととても熱心にお話してく  
ださる姿にこちらもとても興味を持って質問してい  
ると、気づけば次のコンテンツに移っており、途中で「そ  
このテーブル、少し静かにしてくださいね。」と司会  
の方に注意を受けてしまうほどでした。やはり同郷の  
好みというパワーはぐっと距離を近づけるすごいもの  
です。

もう一つ驚いたのは参加されている皆さんは私の両



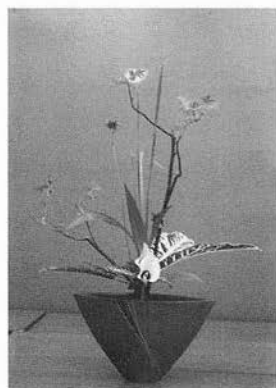
親よりも遙かに先輩にあたる年齢の方が多かったのですが、本当に生き生きと生きていて活発な方が多いようにお見受けしたことです。こんなに素晴らしい同窓会を伝統的に受け継がれていくパワーの源はこういった先輩方の努力の積み重ねなのであると肌で感じた瞬間でありました。と、同時に名簿を拜見しある年代を境にまったく参加されていない層があることも知りました。友人と私の三人は平成十七年卒（五十七回生）なのですが、ご参加者の中で一番近い方はなんと二十九回生のことで、約三十年分のブランクがあるということが分かりました。会の途中で若手であるというところで歓迎頂き壇上に立ってご挨拶をさせて頂きました。若手を代表して挨拶をしてくれた吉見君もその時に少し触れてくれた事なのですが「若い層にも会の存在を知ってもらおう、そして興味を持ってもらおう」という工夫ができればよいのではと切に感じました。

会の最後には柏原高校の校歌、応援歌を合唱するプログラムとなっています。卒業して約十年になる私ですが歌い始めると高校時代の音楽の授業が思い出される歌詞が蘇ってきました。そして、参加されているかた

と一緒に歌うという一体感を感じ、丹波から離れて東京で働いている私の中のルーツを強く感じる一日となりました。

おそらく若い参加者の方を一気に増やすというのは難しいかもしれませんが、折角こんなに素晴らしい機会があるのであれば少しずつでも興味を持ってくれる同年代や、後輩の方が増えればと考えております。

（昭和61年、山南町生まれ／柏高57回生、（株）リクルートキャリア）



いけばな・三觜拍洋

## 常岡幹彦氏を想う

坂上 勝朗

「常岡 わたくしは（郷友会には）割合早くから親友の荻野武君といっしょに出ていました。荻野君は先輩方からの信任も厚く後年、会場の手配から弁当の心配まで、一手に引き受けていました。わたくしも、お手伝いに駆り出されることが多かったけれど、注文した弁当が時分頃になっても届かないときなど『弁当まだ来やへんナ』と二人でハラハラしたものでした。……わたくしにできることは、絵をもって郷里のご恩に報いるほかないと考えています。」



常岡幹彦氏

こよなく関東氷上郷友会を愛し、それにもまして丹波を愛した画伯常岡幹彦氏が享年八十五歳を以て、黄泉に旅立たれました。強い

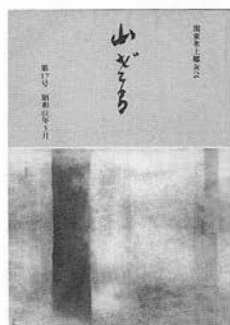
郷土愛は、長い東京暮らしをされていたにもかかわらず、話し言葉は純粹の丹波弁で押し通されていたことを以てしても、十分うかがい知ることができました。（以下、常岡さんと書かせて頂きます）

冒頭の文言は、「山ざる」第四十号に掲載された座談会記事からの抜粋ですが、常岡さんは御父上の文龜画伯とともに二十歳代の初めから、郷友会に出席されていたようで、「山ざる」が発行されるや親子二代にわたってその表紙絵を頂戴したのでした。

「常岡 一二号の『栗』をはじめとして十七号までが



山ざる2号表紙絵



山ざる17号表紙絵

親父の作品です。……十号の表紙絵「茄子」を親父がわたくしに手渡すとき「これでおしまい」といいましたが、まさにこれが絶筆となりました。」(以後十七号までのものは、遺作からの選択掲載)

したがって「山ざる」十八号から三十六号までの表紙絵が幹彦画伯の作品です。実に十九年の長きに亘って、本誌の顔というべき表紙絵をご提供頂いたことには、どのような言葉でお礼を申し上げてよいやら、途方にくれています。

また常岡さんは、普段我々と接するときには、極めて物静かで謙虚なかたでした。反面、絵に関することとなると、芸術家の多くがそうであるように、とことん突き詰めてまだ止まぬという、強靱な精神の持ち主でもありました。

こんな話をご当人から聞いたことがあります。

「台湾故宮博物院でのこと、はんかん范寛(北宋初期の画家・筆者注)の“谿山行旅図”に出くわしたとき、全身に脂汗がにじんできて、手足の震えが止まらなくなってしまうた。」そしてしばらくは絵が描けなくなつたと。それから暫くお会いできないでいるうちに、訃報に

接することになるうとは、まことに残念至極というほかありません。

山ざる18号表紙絵



山ざる36号表紙絵



昭和五年八月二十五日生まれ

旧籍 柏原町小倉

昭和二十三年二月 芸大受験準備のため上京、山本

丘人師の指導を受ける。

日展入選十七回 以後無所属

平成二十年 紺綬褒章受賞

平成二十七年七月十一日 逝去

謹んでご冥福をお祈りいたします。

## 弔辞 上野重喜さん

高見 秀 史（船橋市）

上野さん。今、信じられないままにお別れの言葉を申し上げなければなりません。

年賀状の添え書きに「平穏な羊年でありますように」と、お書きでした。「寄る年波を感じつつ、闘病中です」ともあり、秋頃から、体調がどうも…と云いながら、辛かったろうそぶりを見せない貴方に、「お互い様」と云い合っていました。

二月三日の午後、貴方にメールして、返信がなかった翌朝、電話を…と思ったところ「上野です」の電話。弟さんからの、悲しいお知らせでした。驚愕しました。高校入学から、六十年余のお付き合いでした。同期五百人、ただ一人、丹波の山奥から、東大へ進んだ秀才のあなたは、誰とも分け隔てなく接してくれた優しき存在でした。

社会人となって、NHK広島時代や、制作された様々

などコメント番組、そして、退職後、JICAに参加されていたインドネシアやトルコのお話を、聞くのも私どもの楽しみでした。ラジオ深夜便のアンカーとしての放送では、標準語のような、しかし、丹波弁らしき発音が混じった語り口には、私どもは癒されました。もう、その声を聴くことはできません。

「このころの時代」では、各界の著名人を取り上げられた中で、私の知人で、余命半年と言われた癌を乗り越えた女性が始めた「がん患者が励まし合う金つなぎの会」の事を話したところ、貴方は無名の彼女への取材に、三重の名張まで赴いて、その活動を二夜に亘って放送し、大きな反響を呼びました。

「金つなぎ」。ひびが入った茶碗を金でつないで修復する骨董茶碗から名づけられたこの活動に、早くから、手を差し伸べた貴方こそ、癌に立ち向かう患者さんをつなぐ、大きな「金」だったと思います。

「逝者（逝くもの）は、生者（生けるもの）に命をくれる」。その彼女の言葉です。

「宗教の時間」、十一月の放送で新井満さんが、お母様の遺品だった「般若心経」を「自由訳」で出版した



熱海 ハーブ園で



後列左端が上野さん



二月三日永眠 七九歳。氷上町出身。元柏陵同窓会東京支部長。元NHKエグゼクティブディレクター。定年退職後、JICAにて開発途上国への国際協力活動に参加、インドネシア国営放送の指導や、トルコの人口教育促進プロジェクトで放送を活用しての母子保健・家族計画の普及促進に寄与。後年、NHKラジオ深夜便「明日への言葉」「こころの時代」などの制作に携わりアンカーも務めた。

思いを、移住先の北海道まで出向いて、インタビューされました。先日、奥様からは、それは既に厳しい病状の中でのことだったと伺いました。貴方にとつて、限られた時間の中だったのでしょうか。番組の担当をもう終えると聞いていた時期に、病をおして、遠くの「満さん」を取材されたのは、なぜだったのでしょうか。宗教心や、困難に立ち向かう人に目を向けて来られたあなたの使命感だったのでしょうか。

君の御霊は、新井満さんの歌の通り、もうすぐ、千の風になつて、大空を吹きわたるでしょう。星になつて、みんなを見守つて下さい。

ご家族の手厚いご看病の中で、貴方は長い眠りにつかれました。今、ここでお別れすることは、淋しく、悲しい事ですが、貴方は、いつまでも私どもの大切な友人です。ありがとう。どうか安らかにお休みください。さようなら。

平成二十七年二月十日

兵庫県立柏原高校同期友人代表 高見 秀史  
(昭和11年生、市島町出身/前柏陵同窓会東京支部長)

# 丹波人物伝

## 地籍調査の先駆者、

### 高槻文三郎春日町長

徳田 八郎衛（浦安市）

#### 1 はじめに

一九五七年、進学に伴い郷里を離れたが、これほど多くの逸材を輩出し貴重な歴史遺産を誇る我が郷里の認知度が低いのに驚いた。救われたのは医学部の上級生が「君は兵庫県の柏原？ 全国に三つしかない最新の結核療養所がある町だね」と言ってくれた時である。次に



高槻文三郎

地球物理学科へ進み、測量の基本となる測地学

を学んだご縁で、測量関係の方々と知り合った時だった。「郷里に春日町という町がありますか？ 兵庫県で一番早く地籍調査に取り組んだ先進的な町ですね」ところが他の町ではこれを知らない。今も知らないようだ。丹波市誕生で春日町が消滅した今、是非書き残しておきたい。（敬称略）

#### 2 高槻町長の英断で県下初の実施

読者は郷里の土地台帳を御覧になったことがあるだろうか。明治初期の「地租改正」に伴って実施された地籍調査の成果だが、現実とはほど遠い字限図に、課税を目的とした地積が記されただけのものだ。一九世紀半ばから所有権を明確にするため地籍調査を進めてきた西欧諸国のもとは大違いである。敗戦で狭められた国土の開発、保全、有効利用のためにも近代的な地籍調査の早期実施が必要であったが、戦後一〇年は都市経済の復興が優先された。だが一九五一年の「国土調査法」の成立で地籍の明確化を達成する研究が開始され、ようやく五七年には速やかな地籍調査が必要と認められた地域に対しては関係府県と協議の上、事

業が実施できるようになった。

一九五五年に五カ町村合併で誕生するや直ちに「新農漁村建設総合対策地域」の指定を受けた春日町は、翌年秋の東京での市町村職員研修会に係員を派遣するが、そこで学んだ「国土調査法」の趣旨に共鳴した係員は、新町建設事業の一環として地籍調査を取り入れるよう初代町長、高槻文三郎に進言する。それを認められた高槻は、五七年一月、県農政課の指導の下に検討を始め、まず町議会、農業委員会の同意を得る。岡山県津山市での実施状況視察を経て、その年の中に山林部を除いた地籍調査実施一〇か年計画を策定し実施に踏み出した。皮切りは旧船城村地区の山田、牛河内、新才、長王である。すでに全国で三〇府県、一四〇市町村が実施していたが、県下では春日町が最初で、山崎町、福崎町、姫路市がこれに続いた。

今のようなGPS測量システムは無論のこと、レーザー測遠機も未だない。赤白の測量ポールと巻尺、そして鉛直軸と水平軸の周りを回転しながら角度を計測するトランシット経緯儀で行われる測量だが、日本列島のどの位置にあるのかは確定された。回転楕円体の

地表を平面図にすると誤差が生じるが、それをなくするため日本を13（沖繩復帰もあって今は19）の座標系に分け、兵庫県・鳥取県・岡山県を第5系とする。その原点は東経134度20分0秒、北緯36度0分0秒にある。それからの位置を既設の三角点及び新設する4等三角点も利用しながら一筆地ごとに確定し、縮尺500分の1の地籍図を制作していく。精度にも国の定める厳しい算定基準があった。

\*これは比較的狭い範囲の測量に適合する日本固有の平面直角座標系であり、5万分の1地形図以上の広域図制作には全世界的なUTM座標系を用いる。

### 3 四面楚歌での事業遂行

町長の「決断と実行」によつて一九六八年三月には、計画面積30平方キロ、実施面積24・7平方キロと、初期の目的がほぼ達成された。投じた経費は一七六五万円余、国庫補助6分の4、県費補助6分の1、町費負担6分の1という高い補助率であったが、明治一〇〇年を記念するのに相応しい事業となった。51681筆を調査し、合筆6614、分筆2854を行なった。

この合筆により、相続や購入の際、区画の中に正確な位置は判らないまま地積だけが記載された「筆」が幾つか存在し、それが不明確のまま登記するという馬鹿馬鹿しい手続きから所有者は解放された。新規登録地5551筆、うち長狭物（里道や水路を表す測量用語）5356筆という成果も私有地と公用地の境界、地積を明確にする画期的なものだった。

だが一方、地目変更102220筆という成果も、税金の安い山林で登記してきた宅地や農地の所有者には不満となる。現状に即した地目での登記を求められるからだ。正確な地積算定も痛しかゆしである。太閤検地以来、所有者は地積を少なく評価してもらい税金や供出米を少なくするのに懸命だった。もちろん売却の際は実測して正しい面積で売るのである。欧米とは違う狭い国土での土地への執着心は如何ともし難く、町議会では総論賛成でも現地では各論反対となる。測量拒否や杭の引き抜きは続出。一つの測点を決めるのに半日を要することもあった。

境界線が明確になるのは誰にも朗報のはずであるが、先代、先々代から休火山の状態で伝承された境界問題

が地籍調査によつて活火山となり、町役場が恨まれるというトバッチリも受けた。国家の一大事業を担つていけるのだが、国政のトップから国民への呼びかけもない。地形を解明する測量や三角点維持は建設省・国土地理院、県土木事務所の所管だが、この事業の推進役は、管轄外の経済審議庁や県耕地課であった。経済審議庁、後の経済企画庁が国土総合開発法や国土調査法を制定し、同庁総合開発局国土調査課長が次々と指示を出す。成果の受益者は、登記を扱う法務省であるが、この役所には中央から出先機関に至るまで事務官ばかりで測量専門の技官など居ない。だが民事局長からの通達は現場へ降りてくる。土地課税に関しては大蔵省と町の税務課の所管となる。行政の一貫性がないから、町役場と測量業者の混乱や当惑は察するに余りある。地元代議士にも県議にも、事業の意義を理解し町民の啓蒙にあたる政治家はいなかったし、直ちに春日町に続く町も氷上郡内には現れなかった。

#### 4 高槻町長のプロフィール

孤独に耐えながら事業を推進した高槻文三郎町長と



は、どのような人物だったのか。高槻は一九〇五年黒井に生まれ、高等小学校から県蚕業技術員養成所に学び、県農林技手として五年間奉職し、日本蚕糸(株)で一八年間勤務した後、一九五一年に黒井町長となった。五五年、五町村合併後の春日町初代町長として一期、六三年から二期八年を務め、合併に伴う職員整理、もちより山林の調査・接収、新役場の位置決定と建設、教育施設の新設、新農村計画の実施と国の地籍調査への協力、工場誘致などでリーダーシップを発揮した。頭を悩ましたのは郡内初の簡易水道の普及と誘致工場への給水に伴う水不足である。さらに早害もあつて農業用水の不足さえ生じたが、船城小学校近くの水田をボーリングし、日産2500トン余の水を得て救われた。国土調査推進協会兵庫県会長や氷上育英会理事長も務め、一九七六年、勲五等瑞宝章を授与された。叙勲理由には「果敢な実行力」が挙げられている。

それまでの町村長の多くは、町村役場を実直に勤め上げた人や農林業や商店、医院等を営みながら町村議会に籍を置き、地方政界に関与してきた「だんなさん」であり、「Uターン町村長」は少なかつた。高槻は、

この稀なUターン町長であつたからこそ、この先駆的な事業に踏み切れたともいえよう。現在の電子・自動車に匹敵する蚕業という輸出産業で20年近くも勤務してきた高槻には、旧態依然の役場業務がじれったく思えたことは想像に難くない。

戦中戦後も群馬県下の製糸工場まで絶えず脚を運び、併せて幼い子息にも全国の名所旧跡を見学させている。当時の厳しい交通事情、食糧事情を知る者には驚きである。自他ともに認める「仕事が趣味」の人生だったが、三車と号し、俳句に親しんだ。「土くさき草刈り鎌で柿をむく」が愛顧の自作だったという。

## 5 事業を支えた測量士



トランシット

だが高槻の施策への理解者も少なくなかつた。就職した測量会社が郷里春日町の地籍調査を請負い、喜び勇ん

で郷土の測量業務に従事した吉森猛もその一人である。しかし事業予算は乏しく、民間や他官庁が支払うよりもはるかに少ない金額で請負わねばならない。案じたとおり会社は請負うのを止めてしまった。事業の意義に感じ、町役場の関係者の熱意に魅せられた吉森は退職し、自宅で合資会社・撰丹測量所（現在は（株）兵庫エンジニアリング）を起業して高槻の先駆的事业に協力した。もともと利益の少ない受注業務だ。所有者と揉めて作業が進まない場所は適当に測り、きれいに製図して提出すれば済むのであるが、職人氣質の吉森測量士には、それができなかった。郷里の全ての地籍図に測図者として自分の名が後世に残るのだ。神経をすり減らしながら線を引き続けた。

事業終了後に町役場から刊行された「春日町の地籍調査」には、事業の大黒柱だった吉森も乞われて寄稿し、数々の教訓を記している。その大半は当局の啓蒙不足とエキスパートを養成しないお粗末人事を指摘するもので「肝心なのは、役場がこの事業に取り組む以上、アルバイトや新米職員、素養のない職員、多忙な職員に何年も任せ切らず、もっと前向きな態度で関係

住民と十分話し合い、万全の協力態勢とまではいかなくても、せめて所有者に進んで自分の所有地の各々の筆に正しく境界杭を打たせることである」、「いまだに国民は無関心であり、実施町の住民ですら国の補助金で役場が勝手にやっている仕事ぐらいにしか考えておらず、そのくせ自分の土地に関係してくると騒ぎたてる。重要な国家事業なのにマスコミもキャンペーンしないし、国会で討議されることも殆どない。国も県も市町村も、所管が異なれば深く理解している部局は全くなく、殆どが事業の存在を知らないし、知っていても自分たちの仕事とは無関係と思っている」と役場へも国へも苦言を呈する。役場吏員なら書けないことだが、民間人、それもキーパーソンだからこそ書けたのであろう。

## 5 今も続く地籍調査

春日町での事業終了から四年後の一九七〇年、ついに氷上町も地籍調査を開始し、七四年には一部完了となり、残部は休止中。市島町は八四年に開始し、〇八年に完了。山南町は二〇〇三年に開始し、丹波市が継

続実施中。柏原町と青垣町はついに始めなかった。地域なりの困難な事情があったと伝えられる。4等三角点等を網羅した「網図」は、作業中の地域から隣接地域へ拡張するのが効率的であるので、丹波市は二〇〇九年、実施中の山南町に隣接する柏原町の調査を開始した。山南町完了後に青垣町で開始する予定である。

いずれも平地部についてであるが、より困難な山林部についても一部で実施され始めた。高槻町政が直面したのと同じ抵抗を受けながら、丹波市産業経済部農林整備課は本事業を推進してきたが、山林の調査は大きな挑戦である。山林の荒廃と境界を熟知した所有者の減少で未確定境界も急増した。丹波市は本誌読者も含め、できるだけ多くの所有者が「放置山林」を見直し、調査に立会するよう希望している。

二〇一四年度末の調査進捗状況は末表に示すとおりであり、丹波市全体の平地で76.5%、山林で8.4%しか進捗していないことが判る。この表には、地籍調査と同等の測量成果を持つ「ほ場整備」の成果も含まれている。

丹波市の地籍調査進捗状況（2014年度末） 単位km<sup>2</sup>

	柏原	氷上	青垣	春日	山南	市島	全体
平地部	6.64	26.99	13.89	28.18	16.29	21.24	113.23
進捗率	76.2%	59.2%	25.7%	100%	76.9%	100%	76.5%
山林部	25.49	77.23	79.88	44.76	76.50	52.84	356.70
進捗率	19.4%	30.2%	0.0%	0.0%	0.0%	3.3%	8.4%

## 6 おわりに

この報告を記すに際し、数多くの元春日町吏員の方々に聴取させて頂いた。高槻町長ご子息、雄二郎氏と吉森猛氏ご子息、誉氏からは貴重な文献と写真の提供を受けた。丹波市の塩見良一地籍調査係長には本事業についての数々の解説や記録に触れさせて頂いた。各位のご厚意に御礼申し上げ、本事業が一日も早く完了するよう祈念したい。

（昭和13年満州奉天市生まれ・柏原町出身／（財）平和・安全保障研究所客員研究員）

## たんば黎明館

荻野 祐一

(丹波新聞社社長)



たんば黎明館の正面外観

今年4月2日、柏原高校の近くに新しいスポットが誕生した。ご存知の方も多かるうが、かつて柏原高等女学校の校舎として使われた建物を活用した「たんば黎明館」(以下「黎明館」)である。有名フランス料理店も入居しており、オープン以来、活況を呈している。黎明館を生かした事業を企画する委員会に、私も加わっていることから、今回の「丹波通信」では、PRを兼ねて黎明館を取り上げさせていただく。

黎明とは、「夜明

け」「新しい時代の始まり」という意味。黎明館は、その言葉の通り、地域の新しい時代を切り開き、地域の夜明けを告げる施設になることを期待して名づけられた。

黎明館は、明治18年(1885)、氷上高等小学校として建設されたのが始まりで、明治42年(1909)には氷上郡立柏原高等女学校(のちに県立)の校舎となった。氷上高等小学校の設立時の棟札には「教育は国家の根底なり。学校は教育の土壌なり」とあり、山間の地にありながら、学校教育を通して国家を担う人材を育成していくという先人たちの思いが伝わってくる。

女学校の校舎として使われていた時代は、氷上郡、多紀郡、多可郡の3郡の女子教育の中核として輝かしい歴史を刻んだ。高等小学校、女学校いずれも、「黎明」の表現がふさわしい教育施設であったことが、「たんば黎明館」と名づけた理由の一つ。

教育の場が施設の原点であったことを重んじ、黎明館では教育的な事業を展開するなど、過去から引き継がれた文化遺産を、現代に即した施設へと再生

し、地域の新しい時代をつくっていく。そんな思いも、「たんば黎明館」という命名の理由だ。

黎明館は、建物としての価値も高く、平成21年には県文化財に指定された。近代初等教育施設の建築物としては県内最古の部類に属し、玄関入り口の2本の彫刻入り円柱、正面2階の欄干付きバルコニー、玄関欄間の色ガラスなどが明治時代初期の洋式建築をしのばせる。「明治時代初期の教育施設として日本でも五指に数えられる建物」と評価する専門家もいる。

創建当時の姿を忠実に復元する形で、耐震化を含めた改修工事を丹波市が進めた。レストランホールやライブラリーカフェ、多目的ホールなどを整え、庭園も整備した。また建物の東側に鉄骨2階建ての建物を増築し、エレベーターを設け、トイレも整えた。柏原町内で空き家を活用した店舗展開を支援している「まちづくり柏原」が、丹波市から指定管理を受けて運営している。

1階には、大阪やフランス・パリで計4店舗を展開している「ル・クログループ」のフランス料理店

が出店している。同グループのオーナーシェフ、黒岩功さんは鹿児島県指宿市の出身で、21歳で渡欧。三ツ星レストランなどで3年間修業し、帰国後、京都や大阪の名店で料理長を歴任。2000年、大阪・西心斎橋に町屋を改装した1号店を開店し、一昨年にはパリで4号店を開いた。ベストセラーになった「日本でいちばん大切にしたい会社」(坂本光司氏著)でも取り上げられている優良会社だ。

黎明館内の料理店は、同グループにとつて5号店になり、店名は「ル・クロ丹波邸」。フランス料理という堅苦しいイメージがあるが、「靴を脱いで、お箸で食べられるフランス料理」をコンセプトにしている。



黎明館の玄関



黎明館のガーデン



フランス料理店「ル・クロ丹波邸」の店内

黎明館内での挙式や披露宴も受け付けている。同グループの3号店（大阪・天満橋）であるウェディングレストランでは、披露宴参加者に多くの選択肢の中から事前の料理を選択してもらい、すべての参加者にそれぞれの好みの料理を出すという方式をとっており、丹波邸でもその方式をとり入れている。ちなみに3号店は、近畿のウェディングレストランで、新郎新婦やゲストらの満足度ランキングでナンバーワンの人気を得ている。

気になる値段だが、ランチは1500円（税抜き）から、ディナーは3900円（同）から。これ以外に黎明館の2階には、800円（同）でピザやパスタなどのランチが楽しめるダイニングカフェがある。

建物を彩る庭園も、黎明館の特色の一つ。神戸市

出身のジャルディニエ佳代子さんが庭園のプランを手がけた。ジャルディニエとはフランス語で「庭師」のこと。イギリスでランドスケープ、フランスでフラワーアレンジメントを勉強し、小野市の「ひまわりの丘公園」を監修するなど、兵庫県を中心に数々の公共施設の景観づくりを手がけている。

庭園には100種類を超える和洋の植物が植えられ、黎明館を彩っている。地元の花を代表するひとつ、セツブンソウをはじめ、初夏に咲くアガパンサス、冬に咲くクリスマスローズ、寒暖に応じて葉の色を変える針葉樹、いろいろな種類のアジサイなど、四季折々に楽しめるようにした。ジャルディニエ佳代子さんによると、3、4年もすれば、土地になじみ、しつとりとした味わいが出てくるだろうという。

先にも少しふれたが、黎明館では、教育的な事業も展開している。その一つは花木とふれあう講座で、ジャルディニエ佳代子さんを講師に招いて、今年度は4回程度開く予定。6月にはガーデンの植え替えやブーケづくり、7月にはアロマスプレーづくりやガーデンの手入れを学んだ。二つ目は、丹波市ゆか



2階にあるダイニングカフェ

りの偉人を顕彰する講座で、6月に1回目を開催。僭越ながら私が講師を務め、「丹波聖人」の異名を取った青垣出身の小島省斎や、同じく青垣出身で武庫川学院創設者の公江喜市郎、明治時代に小学校教育の充実を図った国領村村長の上田捨蔵らについて話した。三つ目は、児童生徒らを対象にしたイベントの開催で、7月には、黎明館を描く写生会を催した。

高等小学校、女学校の校舎でもあった黎明館からはこれまでに数多くの人材が巣立った。その一人が、俳句界でもっとも権威のある賞とされる「蛇笏賞」などを受けた青垣出身の細見綾子（1907—1997、青垣出身）。黎明館の庭園には、「雉子鳴けり少年の朝少女の朝」という綾子の句碑が立っているが、5月に綾子の血縁者から句集や関係の

書籍など約50冊が贈られた。それらの書籍は黎明館内に保管されており、希望者は閲覧できる。女学校時代、綾子は読書にひたつたらしく、綾子が少女期に本に親しんだ建物で、綾子の本を読むというのも趣がある。

日本女子大学の校長を務めた春日出身の井上秀（1875—1963）は高等小学校の卒業生。高等小学校時代、今井まき子という先生に出会ったのがきっかけで、今井の母校である京都府立第一高等女学校に進んだ。その女学校で広岡亀子と同級生になり、亀子の母親の浅子と知り合った。浅子は、炭鉱を経営し、銀行を設立、大同生命の創業にかかわるなど、明治時代を代表する女性実業家だった。浅子との縁から、秀は日本女子大学校に進み、のちに校長となった。この秋から始まったNHKの朝ドラ「あさが来た」の原案本『小説土佐堀川』（古川智映子氏著）にはしっかりと秀が登場しており、朝ドラにも登場するのではないかと楽しみにしている。

実際に登場すれば、秀の母校だった黎明館も注目されるのではとひそかに期待している。

## 50の手習い

### テレビ出演格闘の日々

近藤 和行

2013年の秋から、BS日テレの報道番組「深層NEWS」(月～金、22～23時)で、キャスター(司会者)として週2回ほどテレビに出ている。

大学卒業後、新聞社に入社した。以来30年余り、取材や執筆、出稿(原稿を提出すること)を生業としてきた。書くことが仕事だったわけだが、50歳をすぎて突然、テレビカメラの前で「話す人」に役割が変わってしまった。

深層NEWSは、平日は毎日放送される、いわゆる「帯番組」である。放送当日の動きはザツとこんな具合だ。

放送の当日体制は、午後5時から「当日会議」が始まる。番組を管理するプロデューサー、放送内容の企画責任者であるディレクター、それを補佐するアシスタント・ディレクター(AD)、それに台本を構成する放送作家、画面を切り替えたりスーパード(文字情

報)を出したりするオンエア・ディレクターなど20～30人の会議だ。会議は、基本的に台本に沿って大まかな流れを関係者が共有する——というのが主旨だ。ところが、

時に台本の順序を入れ替えたり、用意された資料映像を差し替える、などという「ちゃぶ台返し」が起きることもある。そうになると、数時間後に迫っている本番をにらみ、ドタバタの修羅場がやってくる。地上波でのニュースや報道番組



など（日本テレビ系列なら夕方のNEWS E V E R Yや深夜のZ E R Oなど）は、秒単位で時間が管理されている。挿入するV（ビデオ）の長さや司会者、アナウンサーの発言時間は秒単位で決められている。

それに対し、深層NEWSは全編フリートークである。発言の尺など決まっていないし、台本もあるにはあるが、その通りに進行することなどほとんどない。

それだけに、事前に大まかな流れは関係者間で共有しておく必要がある、念入りな打ち合わせが大切になる。

そうこうしているうちに午後6時を回り、私たち出演者は番組が用意してくれる弁当を食べ、出演用の衣装に着替え、メイクをして

時間を過ごす。その間に司会者同士で、進行について腹合わせをしておく。

「ちなみに月々木曜を担当している女性キャスターの小西美穂さんは加古川市の出身だ。彼女はアナウンサーではないが、テレビ記者にとつて「関西なまり」はご法度だという。アクセント辞典を持ち歩いて何かにつけ、話し方をチェックしている努力家だ。とはいえ、やはり関西出身者らしく、本番中に関西なまりは出る。例えば、「濃い色」は、「こいいろ」だが、「こいいろ」と発声したりするのもご愛嬌である。

スタッフの内情も少し書いておく。当日の動きは、先ほど書いたような流れだが、本番当日を迎えるまでに、番組は「4日前会議」前

「日会議」などを経て、当日にたどり着く。その間のスタッフの作業量は膨大だ。

台本作成のもとになる取材を行い、データを集めてグラフィ化し、番組で使う映像の編集作業もある。画面に出すスーパーの類いの準備もある。本番前の2日ほどは、A D君らは徹夜続きだ。朝まで作業して、スタッフルームで軽く横になる程度しか休息時間はない。立ったまま寝ている若手も珍しくない。かなり厳しい労働条件であることは間違いない。

慣れないながらも、今の仕事の楽しみは、本番前後に交わす雑談で、ゲストの素顔に触れられることだ。

7月の下旬に、田中角栄元首相の娘、田中真紀子さんをお呼びし



深層NEWS本番中の風景。正面が近藤。左は小西美穂氏

た。機関銃のような早口と絶妙の比喩で相手を斬り捨てる。そんなこわもての印象が強い。かつて

の自民党総裁選で、梶山静六氏（元官房長官）、小淵恵三氏（元首相）、小泉純一郎氏（元首相）が立ったが、それぞれの特徴をとらえ「軍人・凡人・変人」と呼んだのは痛快だった。個人的にも過去にお会いしたこともなく、本音では少々、気が重かった。

しかし、彼女は控室で会うやいなや「いつも見えます」といって数日前の放送内容に触れ始めた。「先日の『加齢臭』を取

り上げた回は良かったですね」と、手をとってまくし立てた。

おそらく、いつも見ていることにはないと思う。出演が決まってから番組をチェックして、当方の性格などを分析したのだろう。少し意地悪な質問をして、「あの田中真紀子を困らせてやろう」という思いもないではなかったが、一瞬にして籠絡されてしまった感じだった。角栄氏のDNAを継いだ「人たらし」な一面を強く感じた。

エキセントリックに相手を罵倒するのが特徴の、ある政治家は、実は極めて礼儀正しく戦略的である。「僕は今日、これを強く主張する立場で行きます。少々言い方がきつくなつて失礼があつてもごめんなさい」と事前に共演者や司会者に宣言する。

番組中は宣言通り、強い言葉で相手をやりこめようとする。そして、本番が終わると「申し訳ありませんでした。気を悪くしないでください」と礼儀正しく謝るのだ。画面の中のキャラクターと、それをフォローする律義さを演じているのがよく分かる。だからこそ、変に敵を作らず、テレビの世界で生き延びることができるとも思う。

もちろん、楽しいことばかりではない。意見が対立したり、十分な発言時間を与えられなかったりして、ゲストとの間で険悪な空気になることもある。でも、番組終了後は、なんとなく「お疲れさん」と互いをねぎらう気持ちになる。一緒に生番組を成功させようと、「同じ釜のメシ」を食った同志意

識がそうさせるのだろう。

テレビの難しさは、新聞と違って複雑で難しいテーマを伝えにくいところにある。当たり前だが、テレビの説明は一度聞き逃せば、もう聞くことはできない。新聞なら理解できないと、もう一度前に戻って記事を読み直すことができる。テレビは、途中で理解がとぎれたら、視聴者はチャンネルを変えてしまい、そこでサヨナラとなる。誤解をおそれずにいえば、正確さは少々犠牲にしても、まず分かりやすく、というメディアである。実際、番組終了後に、「今日は分かりにくかった」「せつかくゲストが説明を始めて聞こうと思ったら、あなた（近藤）が話題を切り替えたので話が中途半端に終わった」など、おしかりを受け

ることもたびたびだ。

だから結構、気分が落ち込むことも多いので、半分は早く「卒業」したいという気持ちが占めている。でも、たまの帰省時に故郷のひとから「見てるよ」と声をかけられたりすると、緊張が走る反面、うれしい気持ちがドツとわいてくる。ゲストの素顔と故郷の方の激励でなんとか、「50の手習い」で日々を過ごしている毎日だ。気がつけば、フルタイムで働ける年月も残り少なくなってきた、時の流れの速さに愕然とすることもあるが、深層NEWSを、なんとか愛される番組にするのが当面の目標である。

みなさま、ぜひご覧になってア  
ドバイスを下さいね。(了)

(市島町出身)

## 山名フィロソフィーで世界へ飛翔

—誠実と情熱と感動の人間力—

コニカミノルタ株式会社  
代表執行役社長

### 山名昌衛さん

●インタビューア

岡田昌子  
上 高子



《プロフィール》 市島町出身。柏原高校卒業25回生。早稲田大学卒業後、ミノルタカメラ（株）入社。ミノルタ（株）とコニカ（株）の経営統合後、コニカミノルタホールディングス（株）常務執行役、コニカミノルタビジネステクノロジーズ（株）代表取締役社長を経て、コニカミノルタ（株）代表取締役社長（現在）に至る。

——中央郵便局が商業ビルに生まれ変わったJPTタワー14階・15階のコニカミノルタ株式会社を訪ねました。1階での2回に渡るIDチェックには、NYにいるような驚きでした。

#### ◆恩師の教え

——コニカミノルタといえばカメラ、という認識世代がまだ多いと思うのですが、そんな意識のままニューイヤードでコニカミノルタの松宮兄弟を応援していただきました。

山名 そうなんですネ！（笑い）私も群馬まで応援に行くものですから、元日は丹波の母に会いに行くことが出来ません。

——ご両親はご健在で市島におられるのですね？

山名 父は昨年の10月に亡くなりましてね、母と弟家族が元気で居ます。私は跡取りの長男なので、本来なら家業を継がねばならないのですが、弟が継いでくれていまして、弟には頭が上がりません。関西に帰れる時には家族に顔を見せたいと思っっていますが……。

——お父様はご愁傷様でした。社長昇格には間に合われて良かったですね！ お喜びになったことと思います。今日は、多彩な人材を輩出している柏原高校ですが、企業界の世界的リーダーはどのような生まれたのか、その成長過程をお聴きしたいと思います。



(笑い)

山名 丹波で育った普通の人でした。(笑い)ただ、小学校の同期には優秀な人が多かったですね。そ

れぞれ、京大の教授、医者、県庁・経済界の重要なポジションで活躍中ですが、先生方からいろいろと教えられてきました。例えば、ごみが落ちているのに拾わずに歩いていたら、「率先して拾え」とプールに立たされ怒られました。

——誰もが見過ごしかねないことを、ですか？ 相応な腕白坊主だったのでしょうか？(笑い)或いは、将来トップに立つ子だと既に見通されていた、とか……。

山名 7人の侍に対してでしたね。それでは駄目だと公共道徳を教えてくださいました。

——先生に先見の明があり、将来リーダーシップを取る者の心得を、優秀な7人の生徒に教えられたということでしょうか。小学校にそのような先生がおられ、しっかりとその教えを身につけられ、リーダーシップを発揮されてきたのですね？

山名 中学では生徒会長になりました、その為かどうかは分かりませんが、古い暗かった校舎(山東中)が建て替えられたりしましたね。勉強できる人は沢山居たと思いますが、高校時代も、勉強よりは、「人間と



しての模範と  
ならねばなら  
ない」「人間  
性としての  
リーダーシッ  
プをどうとる  
か」、そんな  
考えを優先さ  
せて来まし

た。今では、ビジョンを見据えて皆を引っ張って行かねばならない立場になりました。丹波や恩師が人間としての基礎的な部分を、会社が企業人としての私を育ててくれました。その恩返しはまだできていないので、しっかりと社会貢献をして恩を返して行きたいと考えています。一昨年前となりますが、柏高生に、「何故海外に行こうと思ったか」など、仕事を通じての人生観を話してきました。触発されて職業選択の一助となればと思っています。また、同窓会会報「恩師登場」に岸名経夫先生についての寄稿をしたり、ボランティアですが大学の学生に教えたりしています。

#### ◆わが社の方針

——思春期の自分を掴みきれずにボーと彷徨っていた者にとつては、将来を見据えたその真剣さに驚かされるのですが、丹波から、地方・東京・海外へと着実に仕事を拡げて行かれた基礎は丹波にあったのですね。世界的にシェアを広げるには様々な困難があると思いますが、日本と世界各国の習慣、伝統、思考方法、価値観等、いわゆる異文化をどのように越えて来られましたか？

山名 様々な葛藤はありますが、先ず個のアイデンティティ（ID）は一生ものですから、私は丹波人としてのIDを、次に日本人としてのIDを大切に、海外では日本人の持つ素晴らしさを元に考え、発信しています。

——日本企業は優秀な外国人の採用に乗り出していると聞いていますが、人事システムや 採用後の日本特有の企業文化への適応は難しいのではないのでしょうか。

山名 わが社の従業員は4万2千人、その内、日本人は1万人で、売り上げは1兆円。8割は海外です。最

初からマーケットは海外が対象です。ついでに説明させていただと、コニカミノルタの事業は、オフィスサービス、商業・産業印刷、ヘルスケア、産業用光学システム、機能材料等の方面です。世界のお客様様に満足していただく為には、その国の国民性、その国のやり方を知ることが大事です。全世界共通のフィロソフィーの中での理念と、新しい価値観の創造を浸透させながら、会社が大事にするバリューを組み込んでいく。Open and honest、Customer-centric、Innovative Passionate、Inclusive and collaborative、Accountable の6つのバリューをモットーにしています。その為、新規採用だけではなく、キャリア採用もしています。国によって価値観は違うので一律にするわけにはいかないので、個性は大事ですから、わが社は個の輝きを求めています。クリエイティブイティ―を大事にしたいので互いの違いを認め合う。一人では出来ないからチームは組むけど、個々が輝いていなければならない。日本人の良い所は目的を共有しながら造り上げるところです。会社が成長するためには前提は環境問題と、従業員が満足して働けるために



メンタル面にも重きを置く。そして、多くの人々に役立つようにと考え、目下、ビジネスパーソンの新しい働き方の提案や、また、介護士の負担を軽減するためのセンサー、画像認識の見守りサービスなど、実現に向けて進めているところです。

◆人を大切にすることの喜び  
—— 柏陵会館だよりの陵友サ

ロンに、「人間力を育むわが丹波」として、原体験・心の絆の大切さを語っておられました。どのような企業であろうと個のメンタルを大事にし、より良い人間関係やチームワークが、より健全な商品を産み出し、世界の人々の役に立つということですね。

山名 心の幸福は人によって違うのですが、「人の役に立つ」ということは比較的誰にも幸せ感をもたらすと考えています。その心の持ちようは教育で育まれるのではないのでしょうか。小さい時から教え込まれたこ



とは忘れないものですね。

——山名さんがどのようなお子さんで、どのように育てられて来たのか、趣味、愛読書、初恋は、などと、週刊誌ネタをお聞きしたかったのですが（笑い）、やはり、グローバル企業のトップともなれば、私人ではないのですかね？

山名 私のは半分は公人ですね。常に「私」を捨てるという心を心しています。

——最後に、社長になられて嬉しかったことは？

山名 そうですね、嬉しい事、辛い事いろいろありますが、ある病院で筋ジストロフィーの高齢者の方が「星を見たことがない。星が見たい」と言われた。それをお聞きした社員が、当社の移動式プラネタリウムを見せてあげたいと、ボランティアでイベントを企画した。他の社員も積極的に参加支援して、ご本人、関係者に喜んでもらえた。患者さんの一言で、喜んでいただけ

る企画を、社員同士で力を合わせて立ち上げたということが嬉しかったですね。人に対する情熱が、誰かの役に立ちたいという情熱が、感動を呼ぶ。私は人が感動したことで感動します。商品を通して人の気持ちに届くことが嬉しいですね。社会は人。人が感動して周りに影響を与えるものですね。

——コニカミノルタの高尚な指向性、チームワークの良さなど、人々の幸せに添って伸展している企業を実感させていただきました。ますますのご発展を祈っています。

### インタビュアーひと言

岡田昌子（人間関係士・元臨床心理士）

仕事への情熱と部下・消費者・環境への愛情、配慮はさすが世界のトップリーダー。エレベーターホールまで見送って下さり、我々の姿が消えるまで、秘書さんと頭を下げて下さいました。その謙虚さとスマートさに、稔る程に穂を下げる稲に思い至り、大感激しました。

上 高子（認定NPO法人アジアの新しい風・理事長代行）

私たちNPOでは最近留学生の就職支援を始めたのですが、外国人が日本の人事システムになじまない、すぐやめてしまうというようなことを見聞きしているので、コニカミノルタはすごい会社だなあと感服しました。



# 丹波ブランド紹介



## その6 大納言小豆

大粒で高品質の評価を持つ丹波大納言（丹波農業改良普及センター提供）

### 最高の品質誇る

小田 晋作

（丹波新聞社会長）

小豆（あずき）の生産地は、栽培面積が断トツに多い北海道を除くと丹波の兵庫県と京都府が一番多く、中でも大粒の「大納言」は「兵庫大納言」の品種を持つ兵庫が品質面で最高の評価を得ている。まさに丹波市が誇るブランド産品だが、栽培農家の高齢化等の問題を抱え、いかに安定的に供給していくか、また意外にもそのブランド性を知らない一般市民の認知度をどう高め、新たな需要の創造を図るかという戦略の必要に迫られている。

### 県内最大の栽培面積

「大納言」の名は、煮ても皮がはじけないという特性を、「殿中で刀を抜いても切腹しないで済む」という大納言の身分の重さにもじったと言われる。「丹波氷上郡志」によると、国領村（現丹波市春日町）の領



完熟したさやから順次もぎとる  
(丹波農業改良普及センター提供)

したところ、さらにそのうちの幾分かが京都御所に献上  
じられて評価が一層高まったという。

このことから同地が発祥の地とされ、兵庫県内の栽培  
面積(2014年)647haのうち丹波市が294  
haと半分近くを占め、神河町、篠山市など2位以下を  
断然引き離している。

丹波市産は、さやの色から「茶さや」と呼ばれる。

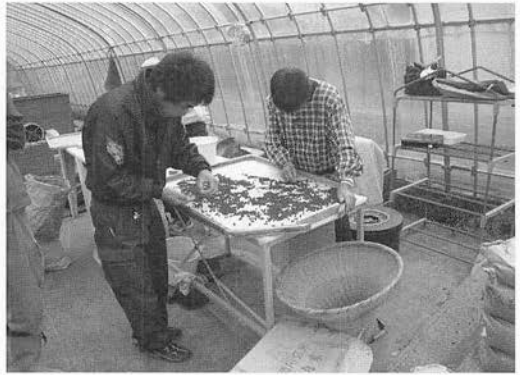
主だった亀山  
(亀岡)藩主、  
青山下野守忠  
重が宝永2  
(1705)  
年、同村東中  
で産する小豆  
が特に優良な  
のに目を付け  
て精選種を納  
めさせ、その  
一部を特選し  
て幕府に献納



見事に育った圃場(青垣町で。丹波ひかみ農協提供)

丹波ひかみ農協がほとんど一手に集荷し、「春日大納  
言小豆」の登録商標で販売。丹波のブランド力で小粒  
の北海道産より3〜5倍の高値で売れ、年間出荷額は  
約3億円。米の10億円に次ぐ基幹作物の地位を占める。  
7月中下旬に種をまき、10月に収穫し11月に乾燥、  
脱粒して選別、出荷する。部分的には機械が取り入れ  
られているが、手作業も多い。暑さには強いが、種ま  
き後に雨がが多いと育ちが悪くなり、管理になかなか手  
間のかかる作物と  
される。

生産農家は青垣  
町、春日町を中心  
に市内一円にあ  
り、ここ10年、1  
200〜1600  
人で推移、栽培面  
積も比較的高位を  
維持している。営  
農組合で集団で取  
り組む所も18カ



選別作業も手で行う農家が多い  
(丹波農業改良普及センター提供)

最近では2012年が反収100キログラムを超えたのに対し、降雨量の多かった13、14年は60キログラム前後にとどまった。栽培面積300畝以上を確保出来た今年は、種まきを終えて間もない本原稿執筆時点（8月中旬）ではまずまず順調という。

### 戦略会議が発足

一見順風とも言える産品ながら、抱える問題は少な

所。個人では6畝作る農家もあるが、大半は10〜20畝程度の小規模栽培で、種子代のほか米の転作の助成もあり、副次的に考えている農家も少なくない。

天候によって収量が変わり、

くない。「小規模の兼業農家が多く、高齢化も進んでいる。現在の栽培面積を維持しながら、ある程度まとまった規模に集約して機械も取り入れながら、栽培技術を向上させて反収を増やすことが重要」と丹波ひかみ農協の藤本周作営農企画課長。このため、「小豆生産部会」を作って6町の支部ごとに生産組織を固め、圃場巡回や講習会を頻繁に開くと共に、中核的なリーダーを育成することを計画している。

また今年度、同農協と県丹波農林振興事務所、同農業改良普及センター、丹波市などにより「丹波大納言小豆ブランド戦略会議」が発足した。穀物業者、菓子業界など需要者が望む高品質の小豆を安定して生産供給すると共に、新たな需要を創造し、ブランド価値の確立を図る目的。品質向上・生産拡大をめざした「生産力強化部会」と需要喚起のためのPRを展開する「需要創造部会」が設けられた。

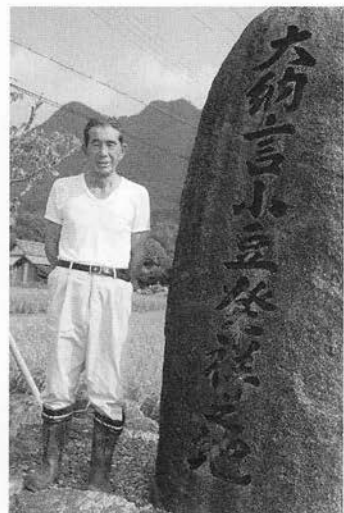
生産力強化では、「栽培ごよみ」を各農家に配布して、種まき期の排水対策、中耕培土（土寄せ）の励行、効果的な防除法などの栽培指導を徹底。特に最近豪雨などで畑が冠水することが少なくないので、集落営農

者を対象に周囲に頰縁状の溝を作ったり、畔を高くするなどの現地研修会を開いた。需要創造では、大阪、京都の大納言を取り扱う卸業者、和菓子店などから意見を聞いたほか、丹波市民に対しても丹波大納言への認識を深めてもらう活動を展開する計画。

### さらに高価格の「黒さや」

これら農協からの出荷とは別に、量は少ないがさらに高値を付ける「ブランド中のブランド」として一目置かれているのが、春日町東中の「黒さや」大納言。リーダーの柳田隆雄さん（79歳）が、自家用に作り続けられていたが量的にはごく僅かだった東中独特の黒さや小豆を、10数年前に仲間呼びかけて「黒さや会」（丹波黒さや大納言小豆を栽培する農家の会）を結成。ある程度まとまるまでに復活した。

「黒さや」は一般の「茶さや」とは異なり、粒が大きいだけでなく、俵型の角ばった形をしているのが特徴。種まきから、1回だけ行う防除、もぎ取り、天日干しから選別まで完全な手作業で、全員で持ち寄って品質を点検、生産者の名前を書いて出荷する。作付面



春日町東中の「大納言発祥の地」の碑と柳田隆雄さん

積は一時は2鈔までに増えたが、現在は15農家で1.5鈔を栽培。同じように作っても他の産地とは風味が異なるといい、固定の高価格で神戸の穀物問屋に収めるほか、滋賀県の有名和菓子店や地元の菓子店「夢の里やながわ」に直接販売している。

篠山移封後の青山藩から明治維新まで続いていたという黒さやの皇室への献上を2001年、愛子内親王御生誕の際に約150年ぶりに実現。テレビのグルメ番組などにも再三取り上げられ、全国的に知名度を上げていく。

白小豆の生産も始まる

もう一つ、新しく産地化をめざす動きとして白小豆の生産が始まった。柏原町で衣料品店を営む元氷上高校特別講師の畑道雄さんが、生徒から「赤い小豆はあるが、白い小豆はないのか」と聞かれたのがきっかけ。県が以前に兵庫大納言小豆と大粒の白小豆を交配育成した「白雪大納言」がほとんど活用されずに僅かな量の種子だけが残されていたのを探し当てて一昨年、自ら春日町に30㍓の畑を借りて栽培。昨年は7人の若手農家に加わってもらって200㍓を生産。今年は生産組合を立ち上げてさらに組合員を募り、20人、2㍓以上に広がった。

白小豆は小粒の在来種が北海道、岡山で栽培されているが、7ミリ〜1センチ以上の大粒の品種はほとんどない。加工品も従来 of 白インゲンで作る餡に比べて、小豆特有の香りを持ち、鹿の子(蜜漬け)の試作品では赤小豆に劣らない香り、風味がするという。畑さんは「紅白セットで売り込めば新たな展開が期待でき、丹波が両方の産地に育てば面白いのでは」と話している。

市内業者の需要創造が課題

一方、需要面では「高値でもいいのもっと売ってほしい」と言われる全国向けより、むしろ市内での需要創造が課題。丹波の食材をめざして外部から進出してきた業者が丹波産にこだわるのは当然だが、地域内に限定した営業が中心の地元菓子店では、どうしても北海道産などの安価な原料の方に目を向けがち。丹波の消費者が丹波産の小豆に触れる機会が少なければ、ブランドとしての認識や誇りが広からず、発信力も強まらない。

そうした中で、地元材料を出来るだけ使った製品を、心がける菓子店、夢のりやながわ(春日町)は、小豆については東中産の「黒さや」も含めて全量地元産



舞鶴自動車道春日インターを降りたところにかかる丹波大納言の看板



やながわが商品開発した「黒さや金時」

を使っている。昨年開発した水ようかん「黒さや金時」は夏場の限定だが、黒さや小豆製の水ようかんに、丹波産の牛乳を煮詰めたミルクジャムをセットにし、ジャムをかけて食べられるようにし、ギフト用を中心に人気を呼んでいる。「確かに原料コストが高く、販売価格にそのまま転嫁できないのが頭を痛めるところだが、まるごと丹波を感じてもらえたら丹波のPRに役立つと思う」と、市観光協会長でもある柳川拓三社長。

同社長はまた別の地域おこし会社と共同で、地元産の小豆と赤米、黒ごまを使った赤飯を真空パックのレトルト食品として開発することも計画中。「丹波の農家の古くからの風習を、“小豆の文化”として掘り起こすことで、さらに丹波を見直してもらおうきっかけになれば」と話す。

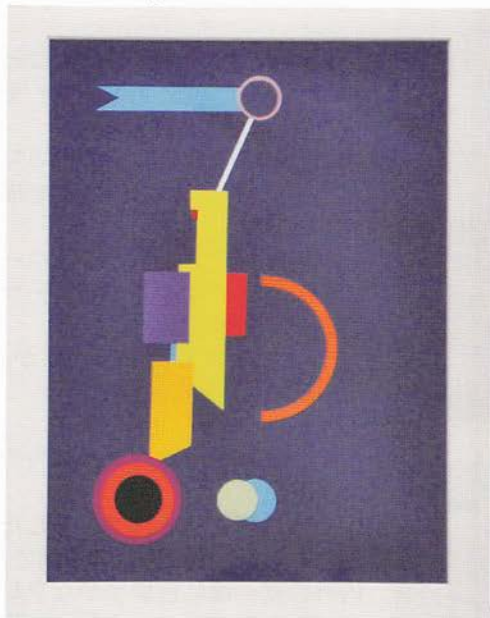
丹波市恐竜・観光振興課では今年度から市内のスィーツ業者に呼びかけ「スター（丹波産の小豆と黒豆、栗）コンテンツ盛り上げ隊」を結成。やながわなど約10社が集まって新しい商品作りや大阪の百貨店のイベントへの参加、また10月に丹波の森公苑で開かれる「ゴーフェスタ」のスィーツフェスティバルでの出品などを計画している。

“珠玉の名品”とも言える大納言小豆。丹波栗などと共に地域の市民自らがそのブランド力を認識し、地域全体で盛り上げていくことこそが、丹波ブランドを活用した地域力のアップにつながるようになるだろう。

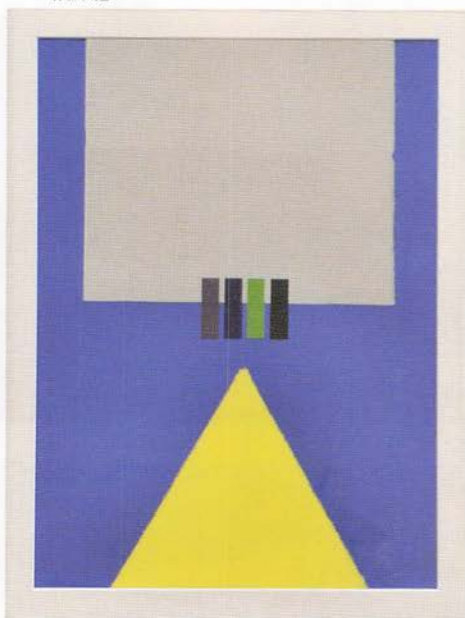
# My Gallery

徳田 悦男さん（日野市）

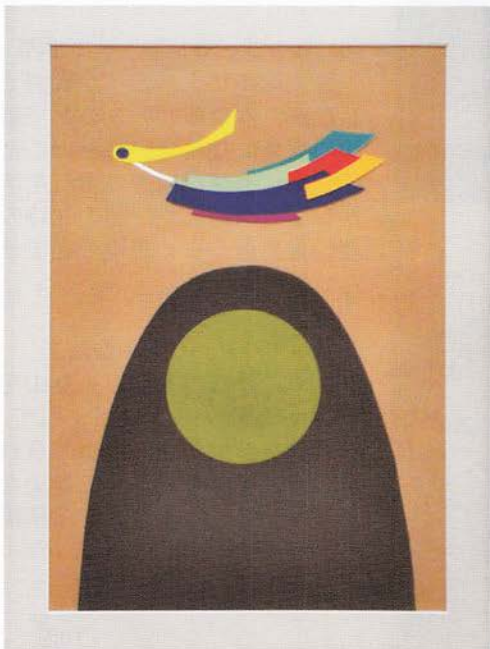
『サッカー』



『構成』



『山の上』



作品は色紙を切って張り付けるコラージュ的なものです。

初期は「構成」のような表現でしたが、ここ10年ほどは具体的なイメージを基にそれを表現しています。

色紙を切るのは、カッターは一切使用せずハサミのみでのカットとしています。刃物の鋭敏さは極力抑えハサミの動きの味を出せたならと、思っています。」

金沢美術工芸大学

工業デザイン専攻卒

現職：専門学校 東京ネットウエイブ  
学校長

# My Gallery

井上 巖さん（葛飾区）

## 旅の風景スケッチ

2年前に暇つぶしの趣味にと通信講座で「風景スケッチ」を習いました。

その実践演習として、旅行の写真を見ながら思い出の風景を描いています。

昨年6月にブルガリア、ルーマニア、12月にニュージーランドへ行きました。

絵としては大変未熟ですが、その旅の思い出の風景です。

### ① ルーマニア ブコヴィナ地方の修道院



### ② ニュージーランド テカポ湖



### ③ ブルガリア リラの僧院



### ①ルーマニア ブコヴィナ地方の修道院

6つの修道院を見学しましたが、いずれも同じ形式の建物で、内外の壁一面に色鮮やかなフレスコ画が描かれていました。周囲にはバラの花も満開でした。

### ②ニュージーランド テカポ湖

野生のルピナスの花が満開でしたが、外来種ということで駆除の対象になっているとのことでした。氷河が周辺の岩石を溶かして流れ込んだ、湖の独特の淡い青色はうまく表現できませんでした。

### ③ブルガリア リラの僧院

遠くには残雪をかぶった山を望み、緑濃い山々に囲まれて、凛とした神聖な空気を感じられました。1000年を超える歴史を湛え、シマウマを思わせる横縞の教会建物が印象的でした。



# My Gallery

岸本 敏子さん (坂戸市)

① ばら (家に咲いた花々で)



① 満月 (古木の皮に蔦蔓、苔等)



① 湖畔の眺め (パセリ、白樺の皮等)



② 連獅子



① 源氏物語 (トウモロコシや茄子の皮等)



③ ピエロ・つるし雛



①押し花額縁・植物、葉や花を押し花にし絵の具代わりに使用します。

額の中に乾燥剤を入れて長期保存が可能となります。

②木目込人形・布を裁断し、切り目に衣装を入れ込みます。

③ちりめん手芸・ちりめんの布や着物をほどいて表地裏地などを再利用します。

井出 恭子さん (川崎市)

## ① 丹後半島 経ヶ岬かまや海岸



旅の思い出  
旅に出て写真を～

①丹後半島 経ヶ岬かまや海岸  
映画「喜びも悲しみも幾年月」  
の舞台にもなった灯台があり海  
を朱く染めた夕陽は圧巻でし  
た。

## ② 京都嵯峨野 竹林の道



②京都嵯峨野 竹林の道  
人通りのないこんな瞬間は珍し  
い観光スポット、何度訪れても  
癒されます。

## ③ 京都嵯峨野 大河内山荘



③京都嵯峨野 大河内山荘  
京都をこよなく愛した俳優大河  
内伝次郎の別荘庭園比叡山を見  
渡せる東屋からの晩秋

④京都大原 寂光院にて  
見事な蓮の池でまるで花と語ら  
っているかのように動かないで  
いたトンボに思わずシャッター  
を切りました。

## ④ 京都大原 寂光院にて



**Mステ登場！  
「キユウソネココカミ」**

丹波が生んだ人気ロックグループの「キユウソネココカミ」が7月24日のテレビ朝日「ミュージックステーション」に出演した。「キユウソネココカミ」は篠山市出身のギター担当のオカザワカズマ君を始めとする関学の軽音楽部出身の5人グループ。今までに既に計5枚のアルバムをリリースしている。若者には大人気で、栄養ドリンク「メガシャキ」のCM曲「MEGA SHAKE IT!」や、アニメ「ドラゴンボール改」のエンディングテーマの「GALAXY」などはよく知られた彼らの楽曲である。

丹波出身のアーティストには前回紹介した小南泰葉さんを始め、今やたくさんいるがMステ出演は珍しい。みんなまで応援したいネ。



『MEGA SHAKE IT!』のジャケット

**コウノトリが  
丹波・絹山に飛来**

水上町絹山の大師の杜体育館前の休耕田でコウノトリが目撃された。3月くらいから飛来するようになったという。水上町にコウノトリが来るようになったのは今年が初めてではない。一昨年にも水上町香良に現れた。

ご存知のようにコウノトリは安全で綺麗な田園にしか飛来しない。丹波の田園は綺麗という証左だろう。昨年、大雨で大きな被害にあった丹波にも大きな幸せを運んできてほしいものだ。

**青垣から  
タカララジエンヌ誕生？**

宝塚音楽学校に青垣中学校を今春卒業した足立由結さんが合格した。足立さんは青垣町大名草出身の15歳。倍率約30倍を突破しての快挙。幼い頃から宝塚を目指して週6日、篠山までレッスンに通ったという。その一方で、陸上部の朝練にも欠かさず参加したという頑張り屋さん。将来、宝塚歌劇団の大舞台のセンターに立ってほしい。頑張れ、未来のタカララジエンヌ！

**氷上高だけじゃないよ、  
柏高バレー部も近畿大会へ**

氷上高校の女子バレーボール部が強豪なのは全国的に有名だが、柏原高校のバレー部も捨てたモノじゃない！女子バレー部は2年連続で近畿大会へ出場した。残念ながら

近畿大会では1回戦で大阪の府立大塚高校に敗れたが、男子ソフトテニスの団体も県総体で優秀な成績をおさめ、近畿大会に出場した。

**活躍、プロボクサー  
角谷淳志**

篠山市東新町出身の東洋太平洋ライトフライ級11位、日本同級5位の角谷淳志選手が頑張っている。4月29日、堺市の「産業振興センター」でインドネシアの選手との一戦に臨んだ。そして国内同級2位のヘンギー・バランサノを2回2分22秒KOで下し、勝利を飾った。

角谷選手は篠山市のボクシングジム「ロス・ロコス」の出身で自衛隊勤務を経て2008年にプロライセンス取得。10年度の新日本新人王でもある。

(井徳正吾・横浜市)

# 丹波のまつり

## 氷上町のまつり

進 藤 凱 紀 (丹波市)

氷上町の神社 (丹波志昭和三十年四月発行より)



(沼貴村)・天満宮(\*) (小野)・大歳大明神 (朝坂)・若宮 (朝坂)・弁才天 (朝坂)・稲荷社 (片田)・大歳大明神 (\*)

(油利)・婦美津大明神 (小原) 矢降大明神 (佐野)・大歳大明神 (佐野)・矢降大明神 (稲畑)・大歳大明神 (見田)・正一位一宮大明神 (伊尼宮) (\*) (新郷)・大歳大明神 (新郷)・内神ノ宮 (新郷)・弁才天 (新郷)・白山権現 (谷村)

(幸世村) 八王子大権現 (氷上) 賀茂大明神 (北田井)・三寶荒神 (井中)・賀茂大明神 (御油)・八王子 (沼)

若櫻大明神 (沼)・上野大明神 (沼)・三宝荒神 (小谷)・熊野権現 (鴨内)・荒神社 (伊佐口)・加和良神社 (香良)・住吉大明神 (香良)・若宮ノ森 (香良)・稲荷社 (絹山)・山王大権現 (北由良)・愛宕山 (北由良)・四社明神 (南由良)

(葛野村) 貴船大明神 (柿芝)・鍛ノ宮 (柿柴)・大梵天王 (柿柴)・大歳大明神 (長野)・牛頭天王社 (長野)・牛頭天王 (大谷)・賀茂大明神 (大谷)・大歳大明神 (三方)・日間大明神の森 (下村)・粟賀大明神 (中野)・正一位内尾大明神 (三原)・高位大明神 (上新庄)・天満宮 (本庄)・若王子社 (本庄) 大歳大明神 (下新庄)

(生郷村)・一ノ宮大明神 (横田)・熊野大権現 (横田)・八王子権現 (永間下)・賀茂大明神 (市辺) 天王社 (大崎)・愛宕山 (大崎)・八幡大神 (石生)・花大明神 (稲継)・荒神 (稲継)・山王社 (稲継)・諏訪大明神 (\*) (本庄)・阿知大明神 (\*) (本郷)

(成松町)・一ノ宮大明神 (\*) (上成松)・大歳大明神 (犬岡)・大歳大明神 (黒田)・正一位大梵天王 (常楽)・大護神社 (\*)・愛宕山・八幡大神・蛭子神社

# 丹波のまつり

(成松)

(\*印は中井一統の彫物あり。)

## 川裾まつり

兵庫県は、南は瀬戸内海、北は日本海に接しており、丹波市氷上町成松はその中の中央に位置する。太古、成松付近は湖沼であったと考えられ、長い間の地殻変動で、湖沼が干し上がり、盆地が形成された。成松の南東三キロメートルに、「水分<sup>みづわけ</sup>」があり、海拔九五メートルの日本一低い分水界である。南は加古川水系となり瀬戸内海に、北は由良川水系となり日本海に注ぐ。

この地域に人々が住み始めたのは六、七世紀と伝えられているが、水陸交通の要所でもあったので、交易市場としての街道集落の発生が成松の基を築いたと考えられる。特に、加古川を利用した水運が盛んで、遠く播州、高砂、大阪あたりとも交易が行われていた。近郷から米、麦、薪炭、畑作物、手織り布などの販売と、海産物、塩、日用品、鍬、鎌の鍛冶品など、農商共栄の市場が開かれ商業地の基盤が築かれた。村も葛野庄柿芝村から元禄八年柿芝町

として独立。明治二十二年成松村柿芝と称し、これが西宮神宮から分霊し成松蛭子神社が奉祀された年である。水運と深い関係のある川裾まつりの導入もその頃と考えられます。川裾まつりは、水無月祭とも云われ、京都府綾部市では大きな祭として行われています。先祖供養の灯笼流しが基です。氷上町では、本郷や朝坂で続けられています。川裾大明神の石碑は成松町下町の川治に建てられています。祭神は被戸大神、河の水戸の神である瀬織津姫、灌漑用水の神の速佐須良姫らです。流行諸病や作物被害、悪事災難除けにも効果ありと云われています。七月下旬に実施。旧成松町は氷上町の中心で、現在も行われている「まつり」を詳しく紹介します。

## 蛭子祭

### 成松蛭子神社の歴史

町の中央に海拔一六八メートルの小高い山があり、古くは高岡山と言う。平安末期後三条・白河天皇時代の学者で正二位権中納言の大江匡房の歌に、

たかおかに 群れゐる人も 諸ともに

千代の契りし わかなをぞつむ

戦国末期近江の国甲賀の士が一時この地に移り砦を構えてから甲賀山と呼ぶようになった。その山麓一帯が公園と神域となっており、氏神である大護神社を中心に蛭子神社・愛宕神社・八幡神社・稲荷神社が在る。中でも蛭子神社はその中心場所に位置し、玉垣に囲まれた威風堂々とした社です。明治二十二年西宮神社の分霊として奉祭祀された。明治三十三年御分霊十年祭、明治四十三年御分霊二十年祭と、商業地としての成松商店街の発展と共にご神徳を慕うものが増加し、浄賽寄進によって社殿の改修、境内の拡張を行った。

昭和四年の四十年祭には、時の西宮神社の宮司吉井良晃氏による御歌を頂き、

移しかえてはやも四十ちに成松の

さかゆる色も見えてたのし母

と寄進の碑を建立した。大鳥居の扁額「蛭子神社」は明治神宮初代宮司、一戸兵衛氏勤書によるもの。社殿の改築の用材は木曾檜、工費二万五千円。

「成松蛭子祭」は毎年西宮えびすまつりより一ヶ月

遅れの理由は諸説あるが、当地は寒冷であること、年末には誓文払いがあり、商家にとつて日が接近していること等によるとされている。祭礼は商売繁盛、家内安全を願う神事のほか、「福娘」による神札、吉兆の頒布、福餅まき、福うどんの振る舞い等、商工会協賛の元春の訪れをかんじさせるぎょうじとして近郷からの参拝客も多く、境内あふれる人出となり終日賑わう。平成十年には、遷宮百十年祭を執り行った。

## 愛宕祭

① 愛宕祭の歴史や祭にこめられた願い

江戸時代中期、年号では、元禄（一六八八〜一七〇四年）宝永（一七〇四〜一七一一）のおおよそ今から三百年前、氷上町（当時は柿芝町）の周辺では飢饉や大火が続いた。住民たちは災難にうちひしがれ、これを案じた村役たちは相談して京都の愛宕神社に詣で、鎮火、五穀豊穰を祈願しその分霊を勧請した。このことがあってからしばらく村人達は災難を免れて大いに喜んだ。それからというものの村人は

# 丹波のまつり

愛宕神社を守護神として崇敬しその信心熱は高まっていった。そして各町毎に石灯籠（現在一七基）を建立し（一七〇四〜一九二八年）、毎夜輪番で献灯することが、村の毎日の習わしとなっていた。この習わしは今も続いている区もあります。そこで毎年八月二十四日を大祭日と定めお祭りの行事を行うようになった。

成松が商売の街として大きく発展したのは昔の街道交通の要所であったこと、柏原、石生、から幸世、青垣佐治へ、山南和田、西脇、加古川へ。

五穀 米・麦・豆・黍又は稗・粟

飢饉 農作物がみのらず、食物が欠乏して飢え

苦しむこと。食べるものが不足すること。

大火の理由 成松は家屋が密集していたこと。

当時は屋根も麦わら屋根がほとんどであったこと。

## ② 愛宕祭の特徴

約一ヶ月前の七月二十三日頃京都の北西にある、愛宕神社（海拔九二四メートル）へ代表がお参りします。

この愛宕神社は雷神を祀り、防火の守護神として祀られています。

八月二十三日からは、火の神様である（ホノムスビノミコト）火武須比命、または火之神迦遇槌（加具土）（カグツチ）火伏の神、にお祈りし防火、防災を祈願し護摩木をたいて防災と家内安全を祈る事があります。

護摩木（ゴマ木） 火炉を設け段木、乳木などを焚き、無病息災、増益、敬愛を祈願する。

神さまについて

神話 古事記（日本最古の歴史書三卷）天武

天皇（七二二年）

口述から本に 稗田阿礼（ヒエダノアレ）太

安万侶（オオノヤスマロ）

命（いのち） ……（みこと）

二礼 二拍手 一礼 お願い事ではなくて、生

きていることに感謝する気持ちで

このお祭りに奉納されるのが名物の造り物であります。造り物は愛宕祭の御供えが発展したとの説が有力であり、材料は日常使っている、お祝いに使う

道具類（祝儀物）や金物、陶器類等、日用品で、その時代に話題になった事柄にちなんだ人物や建造物、風景、動物等を造ります。

材料は一種類の材料のみで造るのが特徴で、材料を変形したり色を塗ったりせずに材料の持ち味を工夫して生かして造ります。これが伝統となり成松独特のものとなつていきます。制作期間は約一週間、町内会毎に、年々技を競い合い、総出で協力して造り上げます。

平成十年、この造り物を伝承文化として継承していくため、造り物保存会が設置され、平成十二年、氷上町指定無形文化財に指定されました。造り物の発祥ははっきりと分かりませんが二百年ぐら以前からと推定され、記録としては明治二十四（一八九二）年百二十四年前からは確認できています。

造り物の写真は昭和三（一九二八）年八十七年前、カラー写真は昭和四十（一九六五）年五十年前からあります。

夜は地元企業や、踊り保存会が連をなして、氷上町音頭で町内を練り歩き、最後は中央小学校で総踊

りが行われます。また愛宕祭の二大呼び物の花火大会は商工会協賛により、打ち上げ花火、仕掛花火大会が催され、町内メイン通りには多くの出店が出て、毎年数万人の人出で賑わいます。この花火大会は大正八（一九一九）年九十六年前から始まったとされ三丹にその豪勢さを誇っています。

#### 造り物の歴史（全国）

不忍池弁財天の開帳に文銭で作った蛇を奉納  
日本最古と言われている

寛延二（一七四九）年二百六十六年前

#### 造物趣向種三種

##### 造物趣向種

天明七（一七八七）年二百二十八年前

##### 四季造物趣向種

天保八（一八三七）年百七十八年前

##### 造物趣向種二編

安政七（一八六〇）年百五十五年前

島根県西伯町 法勝寺一式飾り

左義長（とんど）の行事

江戸時代の末明治の初め



## 丹波のまつり

島根県出雲市平田区 平田天満宮祭

奉納一式飾り寛政五年（一七九三年）

成松の祭りに出会った頃（私・進藤の手記）

配属将校だった父が外地に出兵し、京都市から母は三人の子どもを連れて伯父を頼って成松町犬岡に疎開した。昭和十九年の晩秋、綿入りの頭巾帽を着ていた事は覚えている。裸電灯一球を田の字型の家に引つ張り回していた。静かな山村で、母は慣れない田圃仕事と服飾の内職で生活していた。近所の腕白はいろんなことを教えてくれた。イタドリや槇の実、桑の実、茱萸（グミ）の味も覚えた。何も他になかったから食べられたと思う。家の手伝い以外、毎日泥んこになって遊んだ。まだ、戦後の影響が残っていた成松小学校に入学した。入学の写真をみると服装はまちまち、足下も総ゴムの靴（ピンピン靴）、藁草履、ゴム草履、色々。この時期の様子がわかる。時間をみつけて運動場を走り回っていた。たのしかった。夏休み、母が成松の商家から嫁いでこられた友達に誘われて愛宕祭にいった。その店に行くくと、

お母さんは手伝いをされていて、「奥にいるよ」と教えられた。友はお祭りの御馳走をたべていた。家で食べて来た素麺より美味しくみえ羨ましかった。食べ終わるのを待つて表にでた。造り物を見て回った。富士山、天橋立など絵はがきの写真で見た風景が漆器や瀬戸物等を使って立体になっていた。初めて見ただけに凄いなと思った。云われたように愛宕社にも参って手を合わせて街に戻ると頭上で火花が舞った。見終わって、独り街灯のない土手堤を知っている歌を大声で歌いながら帰った。出かける時、母に貰った小銭は翌朝、母の財布に戻した。

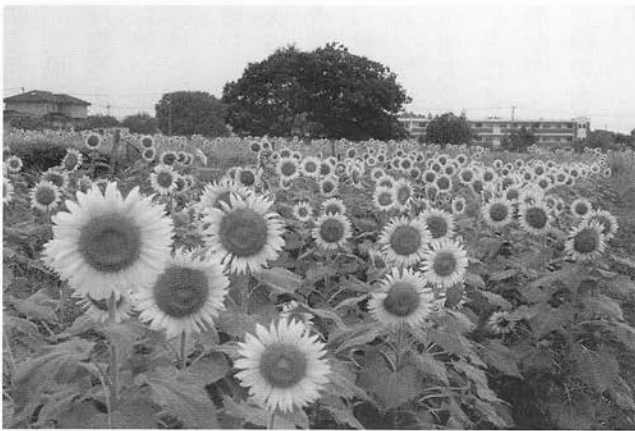
大護神社の秋祭りも誘われてでかけた。家々の軒下に家紋の入った提灯が下がり雰囲気はあつた。御神輿太鼓や布団太鼓が若者たちの肩で威勢良く太鼓のリズムで担ぎだされていた。前後左右大きく揺れて、中で太鼓を叩く友は紐に括られているが必死の姿だった。近隣の太鼓もできて、賑わいになった。「一台、二台、」と数えていたら「一社、二社、」と数えるのだと見知らぬおじさんが教えてくれた。

成松の川裾まつりに行ったことはない。まつりの

ある葛野川には友達と泳ぎに行つたが水量もあり、冷たい水の印象が残っている。成松の一週間後に、隣村の本郷（現、氷上町本郷）の川裾まつりに堤を歩いて行つた。昔、船着場だつたと云われる柳の木を中心に露店が並び、先祖供養の灯籠流しを橋の上から眺めていた。友達がラムネを買つて二人で飲んだが、中の玉が邪魔して、友のように上手く飲めなかつた。

成小六年の時、沼貫村新郷に引越した。六十余年前になつた。

（二九四二年（昭和十七年）京都市生まれ、成松小学校卒、沼貫中学校卒、柏原高校入学後三年間肺浸潤で休学。柏原高校第一五回生。神戸大学農学部卒。兵庫教育大学大学院修了。柏原高校での二十一年を含め兵庫県下の高校教員として三十二年間勤務。其の後、丹波市の多くの環境問題委員を歴任、中井権次一統顕彰会理事、成松ペンクラブ副会長、柏原プロバスクラブ幹事等）



撮影・岡吉明

## 葛野村の秋祭り 内尾神社例祭

(旧水上郡葛野村)

足立 義雄 (横浜市)



昭和三十七年三月高校卒業後、すぐに大阪道修町の製菓会社に就職いたしました。三月月間新入社員研修を受け、八月に東京支店勤務の辞令が出て、さてどうしようかなと迷っていました所、親父から「男子たる者、東京くらいで、臆するな、日本の首都で頑張つてきなさい」との一言で、意を決して上京致しました。東京に上京しまして五十三年になり、現在があるのは親父のお蔭と感謝しております。

故郷の秋祭りについての思い出を皆様に、ご紹介させていただきます。

私は、旧水上郡葛野村字下村(現丹波市氷上町清住)で生まれ育ち、周りは山に囲まれて丹波の自然

が色濃く残っている所です。丹波の正倉院と呼ばれている「達身寺(曹洞宗)」があり達身寺は平安鎌倉期の仏像が八十餘あり、そのうち十二餘が重要文化財として年間気温二十四度に設定された空調設備の整った施設に安置されています。京阪神地区から仏像拝観に毎年たくさんの方が来られるそうです。

さて、葛野村秋祭りは五穀豊穰を祈願する為に、毎年十月中旬頃に当時は二日間開催され大変強く思い出に残っている秋祭りです。葛野村は当時十八カ村から成り、その総社が三原村(現丹波市氷上町三原)の内尾(うちお)神社であり毎年秋の例祭が行われる。内尾神社は由緒ある神社で、大宝二年(七〇二年)に、三原奥丹治大登峰に山伏の宿堂立てられ、社頭に春日大明神、地藏権現、八幡宮、天神、弁財天を勧請して、法道仙人が千日の行法をつとめたことが起源である。

例祭は各村から太鼓神輿(以下太鼓という)、神輿、中野奴が繰り出し賑やかに村を練り歩く勇壮な秋祭りです。太鼓は葛野村には、下村に一基、下新庄に

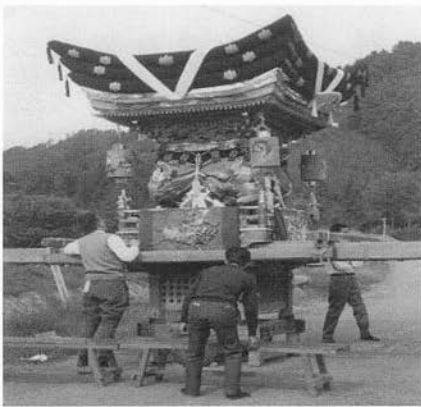


神輿 内尾神社詣で



内尾神社鳥居 参道並木

一基しか無くて、神輿は他村に三基あり、例祭二日目に内尾神社へ詣でる為神社に集結する。葛野村あげての秋まつりなのです。太鼓には乗り子が四人乗り、担ぎ手の音頭に合せて、太鼓を打ち鳴らしながら村を練り歩くのです。乗り子は小学校三年生〜四年生の一家の次男坊でないと乗れない規律があり、私は次男坊でしたので、昭和二十七年（小学三年）に太鼓に乗せてもらいました。現在は男子小学生ならず、長男、次男を問わずに乗れるそうです。しかし少子化に伴い対象となる乗り子が居ない為、太鼓が出る年と出ない年があるそうです。乗り子に選ばれ



太鼓神輿（布団太鼓・ふとん神輿とも）

ると例祭一ヶ月前からタイコの打ち方の特訓が、毎日夜十時頃まで、村の青年団の指導で厳しく鍛えられたものです。太鼓は約一トンの重さがありまして、それを青年団、一家の男子が総勢五十〜六十人くらいで担ぎ、音頭を発声しながら練り歩き、一日中太鼓を担ぐと肩に負担がかかり、時には練り歩く途中で太鼓が倒れる事があり倒れてもタイコは打ち鳴らせと厳しく言われた事を恐いと思いつながら一生懸命に太鼓をたたいた事を思い出します。

いよいよ、祭り初日の日は村の乗り子専用宿に集

結して、乗り子

四人は一番風呂

に入り心身を清

め、顔は白塗り

化粧をして、乗

り子衣装に着替

え、太鼓も衣装

飾りをし終える

と我々が乗り込

み村を一日練り

# 丹波のまつり

歩き始めるのです。二日目は葛野村祭が最高に盛り上がる日で、総神社の内尾神社詣りで、葛野村の神輿、太鼓、が中野奴行列（現氷上町中野、無形文化財）の先導で神社に詣で致します。参道にはお祭りの露店がたくさん出ていたのを思い出します。神社詣でが終わると太鼓は近隣の成松町まで練り歩き、夕方近くに下村まで威勢よく音頭を発しながら最高潮に達し、村人が大歓迎の中帰還し、最後は氏子神社に奉納するために、太鼓の衣装飾りを取り奉納されて無事秋祭りが終了します。



太鼓神輿乗り子（昭和二十七年当時）  
（本人左から二人目）



太鼓山車 内尾神社詣で



中野奴行列 内尾神社詣で

現在は太鼓、神輿、中野奴の保存会がありですが、旧葛野村全体で内尾神社の例祭に詣でする事が、無いそうです。しかし最近旧葛野村で総合秋祭りを実施しようとの機運があるそうです。ぜひ期待をしたいもので、後世永久に続くことを願って益々故郷が輝く様に祈願するばかりでございます。

現在、氷上町清住で開催されているイベント  
主催：清住村おこし実行委員会

かたくりの花まつり 四月上旬頃

コスモス花まつり 十月上旬頃

（昭和19年生、氷上町清住生まれ、氷上町出身／昭和39年小林製薬大阪本社入社、東京支店、現在「ヘルスケアあだち」を個人事業経営）

## 川裾祭りの思い出

足立 勝（ふじみ野市）

昭和十九年八月、国民学校一年生の時に戦時疎開で生まれ育った大阪を離れ両親の故郷の丹波氷上郡幸世村に移り住みました。そして早く大阪に戻りたいといつも念願しておりましたがその望みはついにかなわず、大学受験で国許を離れるまで田舎に住み続けることになりました。

七十数年経過した今、正に水は清き故郷、山は青き故郷の思いを深くしています。そのころの佐治川はとても水量が多く魚もたくさんいました。いつだったか漁師さんの投網にイザという魚がはちきれんばかりにかかっていたことを鮮明に覚えています。また、初夏のころには蛍がわんさと飛び交い蛍の群舞が見事だったことも思い起こされます。

私が疎開で移り住んだのは、幸世橋の袂の野中の二軒やうちの二軒で歩いて一分で泳ぎ場にいけるほ

ど川に接近した場所にありました。夏場は部落の仲間の子供たちと一緒に川泳ぎを毎日のように楽しみました。家の直ぐそばを川が流れているということで台風のとときの川の上を風が吹きすさぶ様がすさまじかったことも良く覚えています。

さて、川裾祭りのことですが何しろ七十数年前のことなのでほとんど何も覚えていませんが、芦田の神主さんにきてもらって、川裾のにわか仕立ての小屋で部落の二十数人の子供たちの前で祝詞を上げてもらったこと、夜は夜店も数十軒出たりして結構人出で賑わったことは記憶に残っています。

いつも寂しい我が家の周辺がこの日ばかりは大勢の人でごった返したことが懐かしく思い出されま

す。  
（昭和12年、大阪市生まれ／氷上町出身）

# 丹波のまつり

## 「川裾祭り」あれこれ

大木 辰 史（丹波市）

川裾祭りの思い出

「カワツサン（の頃）が一番暑い！」、祭りの準備に追われる大人たちが、吹き出す

汗をぬぐいながらしゃべっていた。そんな苦勞もし

りめに子どもたちは、露店の組み立てを興味津々で見入っていた。昭和三十年代、夏休みの楽しみといえば、七月末から八月初旬にかけて加古川水系で行われる「川裾祭り」であった。氷上町成松、氷上町石生、氷上町本郷と川裾祭りはそれぞれの特徴を出しながらおこなわれた。買い物に恵まれなかった頃である、露店に並ぶ珍し



祭りの準備、板橋の仮設



宮司による神事

いおもちゃを想像し、小銭を握りしめて、わくわくしながら、祭りに行ったものである。成松、石生の川裾祭りは、夜店も多く出てにぎやかだったが、歴史的には比較的新しいものである。一方純農村である本郷で一夜だけおこなわれる川裾祭りは当時から「本家」川裾祭りと言われていた（加古川水系では他にも規模の大小はあったが山南町梶、山南町井原、氷上町朝阪、氷上町絹山でもおこなわれていた）。ここでは本郷の川裾祭りについて、紹介したい。

## 本郷川裾祭りとは

川裾祭りの準備から運営は、七〜八戸からなる宮の当（神社の清掃、管理の当番の組）が持ち回りでおこなう。祭りの当番にあたった年は、特に「川裾講」といつている。土手の草刈り、提灯の飾り付け、さらに川の中央部に突き出すように板橋を仮設し、先端に竹で囲んだ祭壇をもうけてサカキ、御幣、灯籠、供え物で飾りつける、三日がかりの準備である。



子ども会の灯ろう販売

その灯籠の屋根に「文政五年」の年号が書かれており、祭りは少なくとも二百年の伝統があることを示している。こ



船座跡に建つ「川裾大明神」大灯籠

の病、罪やけがれを流すとする伝承もある。日没後は灯ろうの明かりが川面に映り、幻想的な雰囲気となる。いたって素朴な祭りだが、遠来からの見物人もいる。

### 川裾さんとは

川裾祭りは丹波だけではなく、北播磨や但馬でもおこなわれているが（廃絶したところも多い）、そもそも川裾さんとは何か、ということあまりは

で新郷の伊尼神社の宮司による祭事がおこなわれる。また子供会がつくった赤や青の竹製灯ろうにろうそくの火をつけ、板橋から流すことによつて、疫病や下



# 丹波のまつり

ろもある。ただいづれの地域でも、川の「ある地点」を普段とは違う神聖な場所ととらえ、祭壇を仮設し供物を並べ、祈りをするというのは共通している。そのことから農業に不可欠な水をもたらしてくれ、この川の恵みに感謝する「水神祭のひとつ」と考えるのが妥当なようだ。また本郷の場合は特に加古川舟運との関係に関心がもたれている。

加古川舟運と川裾祭り



川裾祭りの霧田気

きりしない。本郷のように「川裾大明神」そのものを祭るところもあれば、ある地域では弁財天、大国主、船神さんであったり、果てはカッパと想っているところ

丹波市を南北に流れる加古川は、幾多の支流を合わせながら、瀬戸内の高砂市に流れ込む県内最長河川である。氷上町石生での分水界は標高百メートルにもみたない日本一低い分水界である。そのため川はこう配があまりなく、流れはゆるやかである。この利点は、山々に囲まれた丹波から物資を、舟で運び出すのに最適だった。記録によれば、江戸時代・慶長九年（一六〇四）から舟運が公認され、本郷に船座がおかれたという。やがて郡内の各領主の年貢米が集められ、舟に積まれて大坂の堂島米市場に送られるようになった。田高（西脇市黒田庄）まで下った舟は荷を降ろし、戻りの上り舟には塩・砂糖・こんぶ・工具・農具等々を積んで帰った。本郷は川の恵みを受け、物資の集散地としてたいそう賑わった。この船着き場跡に、往時を追懐するごとく建っている大 lantern には「川裾大明神」とひとときわ大きく彫られている。

（昭和27年生まれ、氷上町出身／中学・高校・特支勤務を経て兵庫県文化財保護指導委員、現丹波市文化財審議委員）

## 成松川裾祭り

本 城 英 明（春日部市）



私たちが小学校の頃は、夏休みが始まるのは、七月二十五日が一つの目安となっていました。

夏休みが始まって直ぐのお祭りが成松川裾祭り、次の日が石生川裾祭り、八月に入って成松橋から眺めていた明かりが、本郷川裾祭りであったと記憶しています。

成松川裾祭りの対象になる川は、葛野川です。私たちが子供の頃には、葛野川と呼ぶ人は、ほとんどなく、どのような理由なのかは、はっきりしません。みんな「かの川」と呼んでいました。子供心には、文部省唱歌の「ふるさと」に出てくる川の名前と同じだと思っていました。私たちは、昭和三十年代に保育園に入園して小学校を卒業した世代です。

私たち子供の頃は、「かの川」では、洗濯場というところがあり、昔話のように、おばあさんやお母さんが洗濯をしていました。田植えの季節になると俵に石を詰めた土囊のような物を川幅いっぱい並べて用水路に多く水が流れるように工夫されていました。ホタルが飛び交うようになると虫かごを持ってホタルを捕まえに、七夕には短冊をいっぱいにつけた笹を流し、夏休みには父兄監視の下で水泳、水量が少なくなると子供は網を持って魚取りに熱中していました。網の中には魚ではなく、イモリやアメリカザリガニが入ることも多くありました。「かの川」は加古川の上流に当たると聞かされましたが、「かの川」には中流魚に分類されるものが多いました。お盆は野菜を添えてご先祖送りをしました。ともかくにも生活の中で川との付き合いは、多くありました。昭和三十四年には伊勢湾台風が来襲して、川上からの激流とともに灌木が成松橋の橋脚に当たり、橋は中央部から水没してしまいました。「成松橋が落ちた。」私たちには信じられない現実を見て、川は美しく、楽しいところもあるけれども、恐

## 丹波のまつり

ろしい面もあることを知りました。

成松川裾祭りは七月二十八日の夜に本番を迎えます。川裾大明神の碑は、成松区商店街南終点地、成松区下町にありました。役員さんたちは、成松橋下の河原にパイプテントを設置して本部にしています。本部のテーブルには奉納されたお神酒がたくさん並べられていました。また、河原には簡易な舞台が成松橋から正面に見える場所に設置され、播州方面からやって来た芸能一座による演芸が行われ、河原からと成松橋の上からそれぞれ多くの人が見入っていました。川裾大明神の碑が成松区商店街南終点地にある関係から、成松区下町の道路が参道のような役割となり、道路の両側には各家の軒場を借りて、金魚すくい、べつ甲飴、綿菓子、アイスキャンディ、かき氷、お面、などなどの店が並び多くの人で賑わいました。私たちの小遣いは一日十円が一般的でしたが、この日は親が板垣退助図柄の百円札をくれました。テレビ番組の「開運なんでも鑑定団」に出でくるブリキのおもちゃ全盛時代で、小遣いをもらうとブリキのおもちゃを夜店に求めました。上隈

が百円の小遣いをどのように割り振って使い切るかに頭を悩ませていました。

当時は電気事情もよくなく、夜店を出している人は、軒端の柱から電気を借りて使用していました。祭りが終わると、店の人は電気代をお金ではなく、販売している商品を主にお礼として渡していました。金魚屋さん、金魚すくいではすくえない大きな金魚一匹と小さな金魚数匹というように。

現在は、多分道路拡張のためだと思われませんが、川裾大明神の碑は、成松橋そばへと移されました。「山ざる」編集委員の徳田氏が「丹波を撮る」のコーナーで移転後の碑を紹介して下さった事があります。成松川裾祭り「かわっそさん」について書かせていただきました。

員  
(昭和26年生まれ、氷上町成松出身／介護保険施設職)

## 成松「川裾祭」今昔

保尾 治 三（丹波市）



梅雨もあけ、二十四節気の大暑も過ぎて、全国的に猛暑日が連日伝えられ、夏本番となってきました。

旧暦でいえば、今は旧六月、水無月。古来旧暦時代には旧六月に夏の祭りが行われる事が多かったようです。

成松の川裾祭は、例年七月二十八日（今年は旧暦六月十三日）に行われます。この川裾祭は、ここ成松だけでなく、丹波市内では、加古川、竹田川流域の各地（氷上町朝阪、絹山、山南町井原、梶、市島町市島、そして氷上町本郷等）で、七月二十日から八月三日にかけて行われて、特に氷上町本郷の川裾祭は歴史があり、盛大です。

この川裾祭は、丹波、但馬、播磨北部を中心にし



川裾大明神石碑

た地域でおこなわれる禊を中心とした祭で、水によって清祓をする祭です。その斎場は北から南に流れる河に西から東に流入する川口に祀るものだとい、（時には川の合流点、川の袂）につくられるのです。成松では北西から流れる葛野川にかかる成松橋の袂に建つ「川裾大明神」の石碑を祀るお社を立てて、その祭が行われるのです。

当日は天候不安定で、大雨雷雨注意報がでていて、祭の中止も危ぶまれたが、丁度夕方に雨が上がり、

## 丹波のまつり



祭りお祓い

「川裾大明神」の清祓いの神事も無事行われ、その祭が始まったのでした。地域の子ども達にとつて、夏休みはじまつての楽しみにしている夏祭。会場周辺は歩行者天国。子どもたちは夜店のならぶ間を歩きまわつて、おもちゃを買つたり、会場でのジャンケン大会、輪投げ大会、盆踊りの大きな声ではしゃぎ回つて楽しそうに遊んでいるのでした。多分、昔の自分も同じようにしていたのだなと思つたものでした。又、地域の人はお社にむかつて、手を合わして心から無病息災を願つていたのでした。

今、石碑の建つ成松橋周辺は、昭和三十五年頃に、河川改修・橋のつけかえ・道路拡張の工事により、私達が子どもの頃とは様が変わりしてしまい、それ以前は川土手も低く、河原にすぐ下りられ、その当時は川の中にひのきの葉と神でお社をつくり、その中に川裾大明神を祀り、人々は川の中に入つておまいりし、川の水で身を清めていた姿がわずかにではあるが、目に浮かびます。

本来、「川スソ」とは、川で身を清める意味とのことで、体を清潔にすることで、下半身の病の予防

をしようとしたのでした。今のように、病院もなく、  
医者も少ない時代の人々には、ただ神に祈ること  
しか、病を予防できなかつたのでしよう。今の世で  
は考えられないことですが、その思いは今も少しは  
信じられているのでしよう。

歴史文献によりますと、江戸時代の今から二百三  
五年前の安永二年全国的に疫病が流行し、これに続

いて天明の頃には洪水や旱魃で大飢饉がおこり、  
人々は大変困りました。そこで徳川幕府は天明八年  
(一七八八年)に全国の寺や神社に、人々の安らか  
なくらしを願い、祈祷を命じた記録が残っています。

加古川と葛野川の合流点の水上町本郷にある「川  
裾大明神」の灯ろうは古く、およそ二百五十年前の  
江戸時代に、本郷・成松・稲継・北山の集落の人々



祭り当日の市内風景

# 丹波のまつり

が力をあわせて建てたようで、以来、ずっと古来の神儀の姿をとどめ、その「川裾祭」がとり行われているのです。

今宵の「成松川裾祭」も十時過ぎには盆踊りのおはやし、太鼓の音も聞こえなくなるとともに、踊っていた人達は三々五々、自宅へと足を運んで行くのでした。そのあとはもとの静かな夜更けへとまどつていきましました。

（昭和19年、氷上町生まれ／柏高十五回生、保尾齒科医院）



撮影・岡吉明

※ ※ ※

四十六号「丹波のまつり」欄ではJR福知山線で山南町、柏原町を経て、市庁舎所在地の氷上町が取

り上げられた。氷上町は、小生には馴染みの薄い地域だったにも関わらず、多くの方々のご協力により、皆様をご紹介頂き感謝を申し上げます。今回も素晴らしい「丹波のまつり」欄となったと思っております。「山ざる」を手にされる方々も自身の思い出に照らし合わせ、幼年・青春時代の熱い想い、或いは望郷の念に駆られるのではないかと勝手に想像しております。

四月、丹波訪問の際、姉と、姉の義娘の案内で、八幡宮に参拝し、昨年ご寄稿頂いた柏原八幡宮の千種宮司さんに、運良くご挨拶が出来ました。其の後、石生に向かい、「水わかれ公園」の桜まつりを見学し、蛭子神社、愛宕神社等も訪問、更に、山里に国宝級の達身寺や片栗の花が、控えめに咲き誇る山肌を訪ねて回り、春の丹波を満喫しました。丹波には、まだまだ素晴らしい見所があると改めて認識すると同時に、ご寄稿依頼を通じて、初めての方々や旧知の方々との電子上の交流も又楽しい出来事でした。

当欄編集担当 大野義昭（山南町出身、埼玉県在住）

俳壇……………

湯の町熱海は、新旧入り混りつつ、土・日は若者、中年、家族の町。平日は初老男女皆さんの健やかな町。この平和の続くことを願います。四月の祝日昭和の日で九十二歳にならせて戴き、父母はじめすべてに感謝でひと日を過ごします。

久呉 道子（熱海市）

元朝や富士伏流のいや白く  
山茶花の散りつつなほも盛んなり  
鳶高しけふ終ひ日の梅まつり  
バンジーの手入れに今日の始まりぬ  
若楓思わぬ色のそよぎけり  
杉木立秀けて保養所初つばめ  
右書きのメダル尊し聖五月  
新緑をまとひ至福と思ひをり  
大川の堤は長し竹の春  
出雲まで出向く口実神の留守

※

父母も既に亡く、兄弟も丹波の地から離れて久しい。俳句に「忘郷」とあるのは、望郷の間違ひではない。丹波の地を忘れてるのが現状である。私の脳裏に少年期の丹波が蘇るのは俳句をやつているからである。そして、会誌『山ざる』からの寄稿のお願いが辛うじて丹波の縁の糸を繋ぎとめていてくれる。

金子 徹（富士市）

— 遠くに在りて —  
忘郷となりて久しき青山河  
藤椅子も父も戦後も遠き揺れ  
虎杖折るポンと戦後を生きた音  
つかまえた蟹少年の日を挟んでた  
郷愁のふと薄氷を踏みしとき

※

俳句と称し得るものか疑問を抱きつつの句作です。気の利いたコメントも出来ませんが、神よ、どうか丹波の方々に幸せを。

藤原 保（府中市）

名月に 汚き心 看られたり



為さざりて 瘧となりたる 老いの芯

死ぬるなど 一つのことかよ 日向ぼこ

着ぶくれて 金欠と貧軀 隠しけり

※

巨星上野重喜様の永遠の眠りに、社会・郷土・郷友・同窓・同級の縁ありし人々は哀悼の意を捧げます。坂上会長様は、四十四号で「歳々々々人同じからず」と述べられる。

小松 京華（相模原市）

—哀悼上野重喜様五句—

上野重喜様宇宙の星と成りたまふ

山眠る高見秀史様の弔辞かな

参列や光雄明子久子十和子様涙雪

自転車で柏高へ東海道線にて赤門へ

三年三組机並べて学びしや

※

拾った仔猫はだれももらい手がなく、結局、いまでは三匹も飼うはめになってしまいました。

坂上 勝朗（板橋区）

仔猫仔猫どなたか貰うてくれまいか

滴りや地藏へ一献参らせる

夜つびいて鳥鳴からずくなる暑さかな

※

時事川柳にはまっています。TBSラジオのデイ・キャッチに十五年前から投稿して何百回もチャンピオンになりましたが、時事川柳には賞味期限がありますので披露出来ません。

荻野 哲男（狭山市）

新茶摘むここにも過疎化老夫婦

泥付きの長ねぎ届く勝手口

一病を持ち巡り会うつつじかな

秋の暮れ手紙に入れる花の種

歩かねば歩けなくなる寒い朝

お互いに手を貸しつつも衣更え

子すずめもわれも生きてる春の朝

※

六月は父の命日。また友人も。今年はゴッホ没後百二十五年です。最近、細見綾子さんのことを思っています。

藤田 玲子（人間市）

父の忌は丹波ひろく、青田かな

友の忌のまためぐり来て夏椿

山墓地のところどころに桔梗咲く

オランダはゴッホ麦秋チューリップ

(六月、オランダ・ベルギーの旅)

梅雨のない異国に飛んで旅始む

※

日に日に「感動すること」が薄れていくように感じます。先日、若尾文子青春映画祭にて「青空娘」を鑑賞。中学の頃、親に内緒で成松の映画館で見え感動した作品でした。見終わって我知らず滂沱の涙が……。どうして泣いているのか自分にもわからないけれど、懐かしさ？ 若い日の自分をいとおしむ気持ち？ 素直に言えば「感動」だったのかしら。

上田 道代 (目黒区)

ひと一人救えぬ国や 節分会

春浅く よわい七〇また友の逝く

蝉しぐれ 今日を限りの命なのかも

花の名を 都忘れと覚えた日

※

先輩の「継続は力なり」の言葉にはげまされての句作りです。用事を作って出歩きますと日々があつというまに、あつというまに……

島津 和子 (人間郡)

吊し難路地のかなたに満ちる潮

そそり立つ白蓮が好き飛行雲

ニヨキニヨキと竹の子育つ過疎の村

帰り待つ母が作りし鯖の鮫

信玄の頬も撫でしや青田風



歌壇……………

同居生活もようやく落ち着いて来ました。三人で互いにぐちをこぼしながらも助け合つてそれぞれ（自分は役に立つてるんだ）と思ひ過ごしております。三人とも健康で暮らせるのが何よりです。

足立 美都子（春日部市）

朝早く同居の二人出でし後は一人の時間楽しみており

この辺と見定めて立つ駅ホームびたりと停まる目当ての車輛

今はもう幻となりし故里のいちよう大樹わが夢にのみ

休みごと「どこへ行きたい」と誘う息子を少しうるさいと思うしあわせ

夕ぐれのバスの窓ごし覗く月はととするほど大きく見えた

外出時まず腕時計するくせの変らぬままに年重ねおり

年令を重ねると詠む歌も老いて行くのをおぼえ、複雑な気持ちになる日も多くなります。

※

荻野 哲男（狭山市）

何事もあるがままにて生きたいが時代の流れ待つてはくれず

限りなく上をみていたあの頃の昭和は遠くなるばかりなり

あったかも知れぬと言えはそれまでよ今日生かされる幸せを知る

「ありがとございました」とバスを降り「お気を付けて」と背中が聞けり

踏まれても踏まれても咲くタンポポがうらやましくて冷水を飲む

さきざきの事考えて書きつづる八十路の過去を振り返り見る

孫帰り膝のぬくもり残るまま「無事に着いた」とかん高き声

昨年は確かに有った町角のファミレス消えて道を迷いぬ

毎年、成松に住む友人が山椒の実を炊いたのを送ってくれます。それはさながら母親からの荷物のように、懐かしく頂いています。

坂上 勝朗（板橋区）

山椒の実炊いたと友の送り来し宅急便の荷解  
くときめき

いまは無き前進座前こぢんまり丹波野菜のレ  
ストランあり

パブリックキッチンとふその店は床しき古民  
家郷の俵ばる

※

庭の梅、はじめステッキの様な一本が五十年た  
ち大木になりました。アンズの様な大粒の実が沢  
山なり梅干し梅ジャム作りきれず、ずいぶん落ち  
たままになってしまいました。

木呂子 恵美子（清瀬市）

亡き夫の愛でし豊後梅豊作なり猿のこしかけ  
苔をまといて

吐く息が白く凍てつくハルピンでシエーバ着  
て通う小学一年生（シエーバ…毛皮のオーバー）

朝まだき駅まで通う雪野原うす青きヴェール  
に包まれて見ゆ

覚めやらず雪野原の果ての山すそに灯光る二  
つ三つと

※

小さな旅しか出来ませんが、旅先で詠んだ歌を  
後日目にし、何度も声にだしているうち、大きな  
旅をしたような気分になったりします。

山下 述子（三浦市）

満開の塚山公園賑はひて「三浦按針」安らぎ  
をらむ

雨上がりの切通しには小房垂れ張付き生ふる  
岩たばこの花

白熊の往き来せる様顔の横のカプセルの小窓  
に迫り来るなり

蝦夷熊の巨体歩みて巡るのを眼下に見れば何  
か愛らし

韓国岳のミヤマキリシマ咲き初めて鹿の親子  
の草食む五月

音立つる激しき流れを垣間見つつ夢想国師の

庵跡を訪ふ

※

水上郡前山村前山小学校を卒業して六十年。  
平成二十七年七月吉日、丹波にて同級会を。

井出 恭子（川崎市）

古稀過ぎて思い出語る友の瞳は少年の頃の優  
しさのまま

亡き夫を恋うる歌詠む友の頬に幸福なりし  
日々が偲ばる

息ひそめおさん茂兵衛の忍びたる丹波の森は  
霧の深かり

亡き夫を夢見て夜半に目覚めしと友は語りて  
ほのか恥らう

凌霄花母亡き里に巡り咲き微笑む姿褪せるこ  
となく

※

蒸し暑い梅雨時は、お日さま出ないのも逆にホ  
ツとするのですが「五月晴れ」という言葉がある  
五月に一度もお日さまが出ないと、苦虫をかみつ  
ぶしたようなムツツリした人を連想します。

福田 治子（横浜市）

一日に一度もお日さま出でぬ日は一度も笑わ  
ぬ人のごときか

「鞭撻」という字すっかり覚えたり七枚同じ  
ハガキを書きて

昼寝する時も靴下脱ぐ夫は幼きよりの習慣な  
るか

※

マイ・ツリーは池の辺の一本ユリノ木。

原谷 洋美（杉並区）

いちはやく百合の木黄ばみ池の辺の林に一本  
つつしみて立つ

午後四時のかたぶきかけた秋の陽に照れるユ  
リノ木天辺のどか

青鷺を眠らすユリノ木ねんころり子守歌なり  
葉を揺らすなり

そびえたる一本ユリノ木峙とするひよどりの  
尾も葉っぱも揺るる

青鷺を眠らせ鶴を懐きたる百合の木の葉に我  
もなりたし

詩 座……………

ソフトランディング

上 高子（世田谷区）

下降線を自覚したのはいつだったか。  
ピンポイントだったか、  
徐々にか。

歩き出してふらつくのを感じたとき？

最初の一言が聞き取れず、みんなの話についていけなかったとき？

コップ一杯の水をグイグイ飲み干せないと感じていたとき？

高倉健の顔は浮ぶが名前がなかなか思い出せなかったとき？

「これはたまたま」と思ったことが、常態になって今も続いている。

もう以前には戻れない、と受け入れ始めた自分が

いる。

湘南の浜辺で、水平線を眺めながら、波打ち際を独り歩く。

何億年も、絶えず繰り返している波の音を聞く。自然に抗うことはしないでおこう。

自然に身をゆだね、歳を重ねてランディングしよう。

そんな思いを抱いて家に帰ると、四角い函から

「アンチエイジング」のメッセージがどっさり、届く。

ちよつと心が動く。



## 語り座……………

チエンジ

藤田 純（稲城市）

A子は何をしても続かない子でした。

田舎から東京の大学に来て部活やサークルに入るのはいいのですが、すぐにイヤになって次々と所属を変えていくような子だったのです。

そんなA子にもやがて就職の時期がきました。最初A子はメーカー系の企業に就職します。ところが仕事が続きません。

勤め始めて三ヶ月もしないうちに上司と衝突し、あつという間に辞めてしまいました。

次に選んだ就職先は物流の会社です。

しかし入ってみて自分が予想してた仕事とは違うという理由で、やはり半年ほどで辞めてしまいました。

次に入った会社は医療事務の仕事でした。しかしそれも、「やはりこの仕事じゃない」と言っ

辞めてしまいました。

そうしたことを繰り返しているうちいつしかA子の履歴書には、入社と退社の経歴がズラツと並ぶようになっていました。するとそういう内容の履歴書では正社員に雇ってくれる会社が無くなってきました。

ついにA子はどこへ行っても正社員として採用してもらえなくなりました。

だからといって生活の為には働かない訳にはいきません。

田舎の両親は、「もう帰ってくれば！」と言います。しかし負け犬の様で帰りたくありません。

結局A子は派遣会社に登録しました。

ところが派遣も勤まりません。

すぐに派遣先の社員とトラブルを起こし、イヤなことがあればその仕事をやめてしまうのです。

A子の履歴書には辞めた派遣先のリストが長々と追加されていきました。

ある日のことです。

例によって「自分に合わない」などと言って派

遣先を辞めてしまったA子に、新しい仕事先の紹介が届きました。

スーパーでレジを打つ仕事でした。

当時のレジスターは今の様に読み取りセンサーに商品をかざせば値段が入力できるレジスターではありませんでした。

値段をいちいちキーボードに打ち込まなくてはならず多少はタイピングの訓練を必要とする仕事でした。

ところが勤めて一週間もするうちA子はレジ打ちに飽きてきました。

ある程度仕事に慣れてきて「私はこんな単純作業のためにいるのではない」と考えるんです。とはいえ今まで散々転職を繰り返し我慢の続かない自分がA子自身もキライになっていました。

もつとがんばらなければ、もつと耐えなければダメ、ということとは本人にもわかってはいたのです。しかしどうがんばってもなぜか続かないのです。この時A子は、とりあえず辞表だけ作って見たものの決心をつけかねていました。するとそこ

へお母さんから電話がかかってきました。

「帰っておいでよ！」

受話器の向こうからお母さんのやさしい声が聞こえてきました。これで迷いが吹っ切れました。

A子はアパートを引き払ったらその足で辞表を出し、田舎に帰るつもりで部屋を片付け始めたのです。

長い東京生活で荷物の量はかなりあります。あれこれ段ボールに詰めていると机の引き出しの奥から一冊のノートが出てきました。

小さい頃書きつづった大切な日記でした。なくなつて探していたものでした。パラパラとめくっているうち、「私はピアニストになりたい」と書かれているページを発見したのです。

そう、A子の高校時代の夢です。

「そうだ！あの頃はピアニストになりたくて練習をがんばっていたんだ……。」

A子は思い出しました。

なぜかピアノの稽古だけは長く続いていたのです。しかし、いつの間にかピアニストになる夢は



あきらめていました。

A子は心から夢を追いかけていた自分を思い出し、日記を見つめたまま本当に情けなくなりまして。

「あんなに希望に燃えていた自分が今はどうだろうか、履歴書には辞めてきた会社がいくつもならばだけ。

自分が悪いのはわかっているけど、なんて情けないんだろう、そして私はまた今の仕事から逃げようとしている。」

そしてA子は日記を閉じ泣きながらお母さんにかう電話したのです。

「お母さん、私もう少しここでがんばる」

A子是用意していた辞表を破り、翌日もあの単調なレジ打ちの仕事をするためにスーパーへ出勤していきました。

ところが「2、3日でいいから」とがんばっていたA子にふとある考えが浮かびます。私は昔ピアノの練習中に何度も何度も弾きまちがえてたけど、繰り返し弾いてるうちにどのキーがどこにあ

るか指が覚えていた。そうになったら鍵盤を見ずに譜面だけを見るだけで弾ける様になった。

A子は昔を思い出し心に決めたのです。

「そうだ私は私流にレジ打ちを極めてみよう」と。レジは商品毎に打つボタンがたくさんあります。A子はまずそれらの配置を全て頭に叩き込むことにしました。

覚え込んだらあとは打つ練習です。

A子はピアノを弾く様な気持ちでレジ打ちを始めました。

そして数日のうちにものすごいスピードでレジが打てる様になったのです。

すると不思議な事に、これまでレジのボタンだけ見ていたA子が今まで見もしなかったところへ目がいく様になったのです。最初に目に映ったのは、お客さんの様子でした。

「ああ、あのお客さん昨日も来ていたな」「ちょうどこの時間になったらこども連れで来るんだ」とかいろいろながが見える様になったのです。それはA子の秘かな楽しみにもなりました。相変

わらず指はピアノストの様にボタンの上を飛び交います。

そうしていろいろなお客さんを見ている内に、今度はお客さんの行動パターンやクセに気づいていくのです。

「この人は安売りの物を中心に買う」とか、「この人は高い物しか買わない」とかがわかるのです。

そんなある日、いつも期限切れ間近の安い物ばかり買うおばあちゃんが五〇〇〇円もするお頭付きの立派なタイをかごに入れてレジに来たのです。A子はびつくりして思わずおばあちゃんに話しかけました。

「今日は何かいことがあったんですか？」

おばあちゃんはA子にニッコリと顔を向けて言いました。

「孫がね野球の試合で賞をもらったんだよ、今日はそのお祝いなんだよ、いいだろうこのタイ」と話すのです。

「いいですね、おめでと〜ございませ〜嬉しくなっ

たA子の口から自然に祝福の言葉が飛び出しました。

お客さんとコミュニケーションとることが楽しくなったのは、これがきっかけでした。いつしかA子はレジに来るお客さんの顔をすっかり覚えてしまい名前まで一致する様になりました。

「〇〇さん今日はこのチョコレートですか？でも今日はあちらにももつと安いチョコが出てますよ」

「今日はマグロよりカツオの方がお得ですよ」  
 などと言ってあげる様になったのです。レジに並んでいたお客さんも応えます、「いいこと言ってくれたワ今から換えてくるワ」そういつてコミュニケーションを取り始めたのです。

A子は段々この仕事が楽しくなってきました。  
 そんなある日のことでした。

「今日は何だかいつもより忙しいなあ?」  
 思いながらA子はいつもの様にお客さんとの会話を楽しみつつレジを打っていました。

すると店内放送が響きました。

「本日は大変混み合いましたて申し訳ございませ  
ん、どうぞ空いているレジにお回りください」、  
ところが、わずかな間をおいてまた放送が入りま  
す。

「本日は混み合いましたて大変申し訳ございませ  
ん、重ねて申し上げます、どうぞ空いているレジ  
の方へお回り下さい」そして3回目、同じ放送が  
聞こえてきた時に初めてA子はおかしいな？ と  
気付き周りを見渡して驚きました。

どうしたことか他の5つのレジが全部空いてい  
るのにお客さんは自分のレジにしか並んでいな  
かったのです。

店長があわてて駆け寄ってきます。

そしてお客さんに

「どうぞ空いているあちらのレジへお回り下さ  
い」と言ったその時です。

お客さんは店長に言いました。

「放っておいてちょうだい、私はここへ買物に来  
てるんじゃない、あの人としゃべりたくて来て  
るんだ。だからこのレジじゃないとイヤなんだ」。

その瞬間A子は込み上げるものがありました。

お客さんが店長に言いました。

「そうそう私たちはこの人と話をするのが楽し  
みで来てるんだ、今日の特売は他の店でもやって  
るよ、だけどね私はこのおねえさんと話をするた  
めにここへ来てるんだ、だからこのレジに並ばせ  
ておくれよ」……

A子はポロポロと泣き崩れたままレジを打つ  
ことが出来ませんでした。

仕事というのはこれほど素晴らしいものなんだ  
と初めて気付きました。

すでにA子は昔の自分ではなくなっていたので  
す。

それからA子はレジの主任になって新人教育に  
携わる様になりました。彼女から教えられたス  
タッフ達は仕事の素晴らしさを感じながらお客さ  
んと楽しく会話がはずんでることでしょう。

## ■郷土について書かれた本

丹波新聞創設者小田嘉市郎自伝

## 『権太くされ新版』

丹波新聞社・1200円(税込)

丹波新聞社の創設者、小田嘉市郎(1889~1971)が丹波新聞に2年半連載し、65年に前後編2巻の単行本として出版した自伝が、孫の小田晋作会長の手で短縮され、前後編を合体して再出版された。糖尿病が遠因で終戦直後にガス壊疽の右足を切断した著者は、続いて白内障に襲われる。石生の赤池先生も含む郡内の眼科医誰もが「手術はするな」というのに、薬をもつかむ思いで大阪の眼科医の手術を受け、却って悪化させ完全失明する。「新聞王」としては絶望の日々となるはずだが、楽天的な著者は「ケセラセラだ」と逆に周囲を慰め、30年書き続けたコラム「紫外線」は口述で続行し、さらに口述で自伝を記すのだ。その記憶力は、行動力同様に超人的である。幼少の頃からあまりにも「ごんた」

の著者に部落区長の父も困りはて、二年早い「半年生」として大路小学に預かって貰う奇策を編み出す。ところが利発なので正式に1年生に編入され、4年間の尋常科を経て、ごく少数の同級生(2歳年長)と一緒に高等科へ進む。そこで京都から転校してきた上品な荻野しげの嬢に魅せられ恋文?を届ける。今でいえば小5、実際の年齢は小3であるが、無情にも恋文?は校長に届けられ、父親も呼び出されて油を搾られ、9歳の著者は「停学一週間」処分を食らう。郷土史に通じた読者はお気付きであろうが、この少女は後の詩人、深尾須磨子である。

高等科を終えて家業を手伝う著者は、質屋を営む父親の「最も大切な質草」を売り飛ばして旅費を工面し、朝鮮へ渡るが朝鮮人に身ぐるみ剥ぎ取られ、別の朝鮮人に救われるなど苦労した挙句、まだ医師法のないのを見事に処理して名声を高め、さらに日本語学校の教頭となる。まだ10代なのに。

やがて郷里の役場から篠山歩兵70連隊への入営通知が来る。学力もあり、立派な社会経験も積んだ著者のこと、「一選抜」で晴れの上等兵になると誰もが思うのだが……

これを「捧腹絶倒の書」と評する人もいるだろうが、立派な地域史である。幼時に下三井庄から京都へ移った荻野しげのが1年余も実家へ戻っていたとは、どの深尾須磨子伝も記していない。また大路小学校高等科が4年制でなく3年制だったなど、水上郡教育史には描かれていない。柏原中学校新聞の編集長だった筆者は、著者にレイアウトの基本を教わったが、これらの重要な故事を聞いておかなかったのが残念でならない。

(徳田八郎衛)

丹波新聞創設者  
小田嘉市郎自伝

権太くされ

新版

■郷土について書かれた本

今井修平ほか著

兵庫県の歴史（県史⑳）

山川出版社・2400円（本体）

県下の他地域と比較すると、われらの郷土の歴史はマイナーである。「光秀の丹波侵攻を永年阻止した赤井一族」をPRしても、波多野秀忠、武田勝頼、柴田勝家のような悲壮な最期は遂げずに生き永らえているから義経・畠山の日本人には気に入らない。それに赤井は、山名一族や赤松一族ほどの影響・脅威を畿内に与えていない。

城崎や有馬のような温泉はないし、峠の向こうに生野銀山があるからと地面を掘っても、せいぜいミネラル豊富な地下水しか出てこない。商品経済が発達しても、赤穂の塩田や龍野の醤油、伊丹や灘の酒、豊岡の柳行李に匹敵する産物は生まれなかった。酒造労働力・杜氏集団による技術移転はあったが、残念ながら地酒に留まった。

このような「劣等感の郷土史観」をさらに深めてくれたのが本書である。「氷上郡を中心に日本が動く」という史観の方は、是非一読されたい。もちろん本書は郷土を無視はせず、各編で紹介している。特に遺跡。1964年発掘の春日町・七日市遺跡は、後期石器時代から平安時代に至る複合遺跡なのでナイフ形石器から方形周溝墓まで出土し、古代史研究に貢献した。早くから大和王権の影響下にある当地では古墳も発達し、氷上町石生の親王塚古墳、春日町の二間塚古墳、市島町の円墳久良部一号墳、山南町の丸山古墳群などは有名である。

丹波の国守はたいてい亀岡にいます。のに、南北朝・室町初期には守護の仁木頼章が当地の高見城を居城とし



ている。何か活躍は？ 残念ながら、南朝に通じる荻野朝忠が高山寺城に籠り反乱を起した責を取って辞任するという冴えない史実しか残していない。高山寺城といえば高見城の目の前である。丹波守護も地元豪族に舐められたのだ。

動乱の時代には当地の武士も活躍するが、残念ながら主役ではなくお手伝いである。鎌倉時代末期、隠岐を脱出した後醍醐天皇は、但馬に流されていた皇子静尊法親王を総大将とする反乱軍に京都を攻撃させるが豪族の連携が悪くて南へ敗退する。その中で氷上郡の豪族、荻野彦六は大奮闘し、味方の退却を知らずに奮戦した神池寺衆徒80名は全員討ち取られたと太平記は記す。これで勢いを得た幕府は、足利高氏（のちに尊氏）を上洛させ京都南部の反乱軍退治を命じるが、これに背いて高氏は、丹波の篠村で倒幕の兵を挙げる。ここへ一番に駆けつけたのは氷上郡東作郷の新補地頭、久下時重一族250騎であったという。大した動員力である。

（徳田八郎衛）

◆芦田和代さん

いつもお世話になります。1月に巴厘の発表会を越谷にて行うため、リハーサル日と重なり出席できなくなりました。勝手申し上げますがどうぞよろしくお願いいたします。

◆芦田重秋さん

都合により欠席いたします。ご盛会をお祈りいたします。「やまざる」45号は内容も手ごたえあつて久しぶりに興味深く通読いたしました。編集の皆様にご心より共感しました。ご苦労様でした。

◆足立かをるさん

あつという間に1年が過ぎました。いつもお世話様です。私は年は重ねましたが何時も元気で明るく楽しく充実した日々を送っております。このごろは会う方々ごとに「若くなつた」と言つて頂きます。有り難く嬉しく、ハートは若いし、感謝とありがとうの日々。

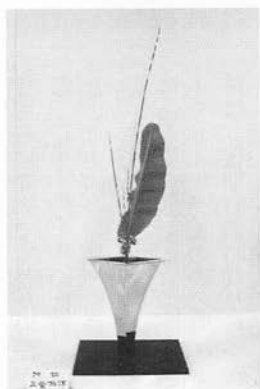
又修行と勉強のとき、ときです。とにかくありがとうございます。最高に幸せです。皆様によりしくお伝え下さい。

◆足立さつきさん

お世話になっております。東京と丹波を往復しつつ音楽を通して自らの経験をお伝えしつつ、また自らも表現者としての研鑽を積み重ねたいと存じます。

◆足立美都子さん

早いもので引き上げてきて丸2年になります。引越し荷物は一向に片付かず持て余しています。「ふるさとの



いけばな・三鶯拍洋

会」楽しみにしていましたが別用のため欠席いたします、ごめんなさい。

◆飯田光雄さん

今回は所属する合唱団の演奏会が2回あり、どうしても時間が取れず残念ながら欠席させていただきます。

◆伊藤富士子さん

このたびは「ふるさとの会」のご招待をいただきありがとうございます。『傘寿』人ごとのように思っております。したがその年になり驚いております。時の流れの早さを感じております。様々な事がありました。今健康で過ごしてこられたことを幸せに思っております。お送りいただき「やまざる」は丹波に思いを馳せながら楽しく読ませていただいております。仙台在住も長く元気でおります。丹波の故郷を誇りに思い、これから先も元気で過ごしたいと願っております。総会には出席できませんが皆様のご健康とご盛会を

お祈り申しあげております。まずは御礼まで。

◆上村愛子さん

足立美津子さんとご一緒しましょうと楽しみにしておりましたが、当日、市川市の合唱祭で歌うことになりました。掛け持ちは無理なようので……。ご盛会をお祈りしながら！

◆大江範子さん

いつもお便りをいただきながら欠席で申し訳ございません、20数年来の心臓病で加療中です。そして只今は夫が末期癌で入院中です。それで申しわけございませんが、今回をもって退会とさせていただきます。丹波の写真レポート、楽しみでしたがどうぞ悪しからずお許しください。

◆大城戸しず代さん

子育てアドバイザーとして久しぶりに勤務しています。ドキドキワクワク

ぐったりの日々を送っております。

◆荻野哲男さん

今年丹波市にも豪雨で被害が出ましたが被害に遭われた方々には一日も早い復興を心より祈り、また犠牲者のご冥福をお祈りいたします。ふるさとへの会は所用のため残念ながら欠席させていただきます。

◆小田富士夫さん

入院中の妻の付き添いが日課です。一日も早く妻と2人で健康を取り戻し出席したいと思えます。皆様のご健勝をお祈りしています。



撮影・岡吉明

◆小山とし子さん

80歳のお祝いの席をご用意させていただきます。このことですが欠席をさせていただきます。歳を重ねる毎に1人での外出は厳しくなりました。あしからずお許しください。皆様にお目にかかれないうことを本当に心苦しく思います。

◆梶原やす子さん

いつもご案内いただきありがとうございます。最近体も弱って参りまして欠席させていただきます、ますますのご発展をお祈りいたしております。

◆形田恒夫さん

元の会社のOB会と今年も重なり出席できなくなりました。定年後のアルバイトも6年を超えそうです。3月で仕事を辞める予定です。次回は出席させていただきます。

◆菊池洋子さん

「やまざる」いつも楽しみにしています。

す。最近は昔の生徒たちの演奏会を聴きに行くこととプールで水中ウォークをすることを楽しみに毎日を送っております。いつも欠席で申し訳ありません。

◆岸本里子さん

11月はいろいろな予定が入っていて残念ながら今年は欠席させて頂いていただきます。「やまざる」楽しく読ませていただいています。ご盛会をお祈りします。

◆木呂子恵美子さん

朝夕寒い位になりました、故障が多い体に染み入ります。お心入れの「やまざる」ありがとうございます。昨年もそうでしたが、カットの写真が素敵です。小鳥や蝶々は私が庭で撮りたかったそのものでした。

◆久呉道子さん

郷友会誌「やまざる」45号拝受させ

ていただき、44号もつい先日の心地がいたしますのに……。関係下さる皆様様に感謝申し上げます。落ち着いて拝読させていただきます。故郷を離れて年浅い故、すべては唯々懐かしく、しばし波瀾万丈の来し方を……。

◆小松京子さん

第45号 表紙あまねく頁を深く味わわせていただいております。西山裕三様が『西山泊雲と小川芋銭』をご執筆なされている。私は俳壇に【泊雲や祖父齊歳月「春なかば」京華】と寄稿。実は裕三様に拙句集「筆立」を謹呈いたしましたところ、【冴え返り冴え返りつつ春なかば 祖父泊雲】とお手紙たまわる。

私の祖父 能勢齊は医と行政の生涯だが、泊雲氏にご交誼厚く成された。さらに、三十年程昔、金子兜太（私の俳句の師）が西山酒造場を訪問した際のルポタージュ、一蔵元訪問―兵庫小鼓の株式会社西山酒造場「霧と虚子と

芋銭と」も手紙に添えられる。石像寺のことも綴られている。

小田晋作様の特別レポート「丹波を襲った豪雨被害」拝読、その無慚さは痛恨の極みであり、8月16日17日の丹波市の被害者の方々にお見舞い申し上げます。石像寺の土砂流入の写真も実感……。

平成26年7月21日相模原市で鴻谷雅弘様のご講演「二宮尊徳の遺訓と混迷の今を生き抜く知勇」拝聴。「やまざる」会員、丹波人として氏とお顔をあわせ写真にまでおさまった。第43号に「報徳の巨擘―佐々井さんの思い出」を執筆なされ、第45号BOKSで原谷洋美様が著作を紹介されている。

金次郎の父は水害で田畑を流され、金次郎はここから人生を培う。災害に遭遇された方の復興をお祈りします。阪神大震災を宝塚で遭遇し、丹波に疎開した私の心身からのお願いです。合掌



◆近藤龍夫さん

このたびはご丁寧なご招待をいただきありがとうございます。残念ながら都合が悪く欠席いたします。「やまざる」に投稿させて頂き、この80年を振り返ることができ感謝いたしております。皆様のご健勝をお祈りいたします。

◆坂上 豊さん

いつも「やまざる」に接するたび、自分の若かりし頃の故郷の面影が偲ばれ、懐かしくなります。このたびの豪雨災害に被災された故郷の大勢の方々へ心からお見舞い申し上げます。編集委員諸氏のご健勝をご祈念申し上げます。

◆澤田みさをさん

「やまざる」第45号ありがとうございます。カラーのページも加えられ楽しく拝読いたしました。イベントの音楽会のプログラムは好きな曲ばかり、

伺えないのが残念です。ご盛会と皆様方のご健康をお祈りしています。

◆正呂地悟さん

盛会をお祈りしております。伊東に住居を構えてまもなく18年を迎えます。天城山の散策や相模湾での釣りでのんびり過ごしています。会員の皆様のご健勝をお祈りしています

◆杉岡明美さん

いつもながら立派な「やまざる」をありがとうございます。楽しみに読ませていただきます。毎年は忙しく残念ながら欠席いたしますが、ご盛会をお祈りしております。

◆鈴木和栄さん

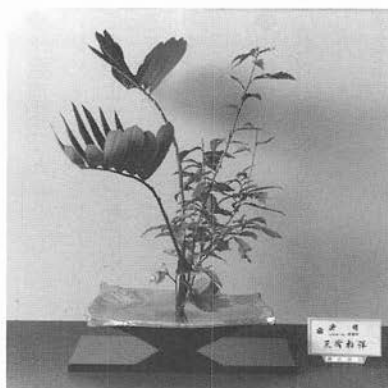
「やまざる」誌ありがとうございます。長い間ご無沙汰して失礼いたしました。老々介護の状態です。外出はできません。郷友会よりのお便りはとても嬉しくありがとうございます。

◆瀬川儀一さん

毎回「やまざる」を送っていただきありがとうございます。19年間愛知県に単身赴任しておりましたが、今年7月末に横浜に帰ってきました。機会があれば一度参加したいと思っております。同郷の皆さんとの交流ができればと思っています。

◆勢川武彦さん

ご招待をお受けし、喜んで出席させ



いけばな・三齊拍洋

ていただきます。当日の多川響子さんのピアノ演奏を楽しみにしています。ご本人のお話もうかがえればと期待しています。

◆勢川雅弘さん

本年9月に83歳となりました。5月までは特許事務所に顔を出していましたが、現在は毎日が日曜日であり、テレビを見るよりはCDのクラシックを聴いている時間の方が長いです。

◆高槻正行さん

平成26年8月の豪雨災害により国道176号八日市橋が落橋し、交通に支障を来していました。8月23日、田舎(市島)に行き現場を見てきました。八日市橋災害復旧(架け替え案)スケジュールでは平成27年度中の見込みだそうです。

◆高松常太郎さん

さいたま市シニア連合会校友会会長

になって、演芸会、旅行、学習会3000人の会員を束ねて活動中です。

◆谷垣 尚さん

幹事諸兄お元気ですか！ 何時も色々とご苦労様です。私は一人ですが元気です。当日は他のOB会があり欠席します。皆様によろしく。

◆谷口 捷さん

世の中には平気で嘘をつく人がいる。各地を歩いていると、真実が見えてくることが多い。今年は黒田官兵衛ゆかりの地とか能登を回りそれを感じる。それにしても最近いろいろな分野での「嘘捏造」は非常に罪深く悪質であると思う。11月は京都の山城跡を歩くのを楽しみにしています。

◆千葉淳子さん

「やまざる」いつもありがとうございます。丹波を思い出しながら楽しく読ませていただいています。いつまでも

続けて下さいますようお願い申し上げます。皆々様によろしく。ますますのご発展とご活躍をお祈り申し上げます。

◆出町京子さん

おかげさまで喜寿の年を元気で迎えられることを感謝しております。日本舞踏もやつと力を入れずに踊れるようになり心から楽しんで学んでおります。まだまだこれからです。15日も青年講座がありますので欠席です

◆十倉直樹さん

いつもご案内をいただきありがとうございます。身身赴任中にて参加ができませんが当会のご盛会を祈念しております。

◆中松美年子(上田)さん

45号「やまざる」有り難うございました。小学5年生から柏女(23年卒)卒業まで柏原町に十年近く住んだ者と

して、今回の八幡様と厄神大祭の事、非常に懐かしく嬉しく拝読いたしました。

◆西川宣孝さん

所用で欠席させていただきます。いついつまでも氷上郷友会のご盛会と「やまごころ」発刊を祈念しております。役員の皆様ありがとうございます。

◆野村節三さん

「やまごころ」編集委員の方々には日頃お世話になっておりますこと感謝申し上げます。今年度の「ふるさと」の会には数年ぶりに出席いたします。幹事の方々にはよろしくお願いいたします。

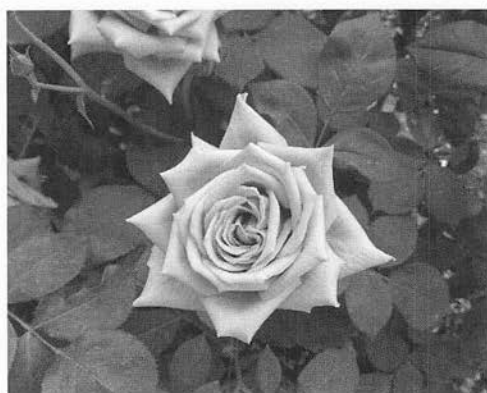
◆広瀬安伸さん

久しぶりに出席させていただきました。昨年度は元の会社のOB会行事と重なり欠席となりました。「やまごころ」第45号で昨年度来賓ご出席者に小生が

小川小学校低学年時ご担任いただいた藤原敦実先生のお名前を拝見し本当に懐かしく感じました。

◆福田治子さん

年齢とともに遠出(県外)に出る事が億劫になり欠席させていただきますが、すみません。御盛会を祈っております。



撮影・岡吉明

◆藤田正雄さん

90歳を過ぎて病院に行くことが多くなりましたがマア元気です。昔の囲碁の仲間だった坂上さん谷口さんも元気そうで何よりです。

◆堀井隆川さん

新寺建立の寺も43年目を迎え、小さい庵の寺より本格的な本堂・客殿・庫裏の純木造古建築も別天地に新築し9年目を迎えました。墓所の整備も落ち着き、昨年は鐘楼も兼ねた山門もお陰様で完成、落慶式典も終えることが出来ました。丹波より上京し今年で50年を迎えた節目の年となりました。天、地、人とよく言われますが、小生は特に良き人に恵まれた結果と思えます。誠に有り難く感謝感激の好日を過ごしております。

◆前田和秀さん

80歳を過ぎたころより妻が年々6回入退院を繰り返しているので、炊

事洗濯など家事をやっています。まだ自動車の運転が出来ますので入退院の送迎、入院中の面会などが楽にできますので助かります（片道2時間）。

◆三木 亮さん

体調不良につき今回は欠席します。貴会のみますますのご発展を祈っております。16回生（39年卒）のみなさまによろしく。

◆森田栄子さん

お世話様です。義母が入院していまして月に1度くらいは帰ってくるのですが、殆ど田舎に行っています。皆様によりしくお伝えください。ご盛会をお祈りいたします。

◆山口敏之さん

オランダ生活もそろそろ3年目に入ります。丹波に年数回帰ることが自分の根っこを確認して、また頑張ろうというエネルギーの源になっている気が

します。

◆横幕尚子さん

尚子の夫でございます。妻 尚子が入院加療中でございますので、代筆させていただきます。毎年郷友会のご案内また「やまざる」を送付賜りありがとうございます。私は大阪出身ですが楽しく拝読させていただいております。

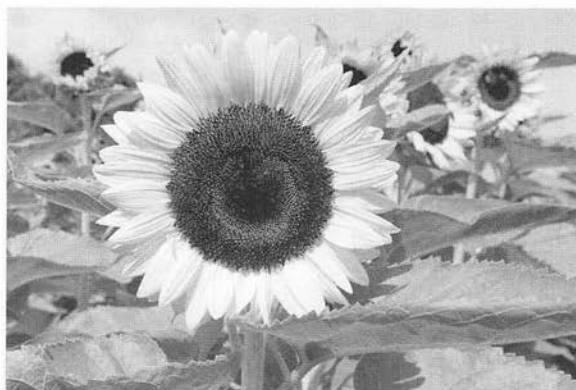
◆吉見弘文さん

今春定年退職しました。7月には母を送りましたが、週に1度は市島に帰り地元の付き合いを大切にしております。来年からはまた新たな仕事に挑戦する予定です。

◆若森敏郎さん

家内の他界から一人暮らしが始まり、毎日を忙しく過ごしております。88歳の米寿を迎えた機会に「やまざる」に投稿したいと思いつながらこれも果た

せず残念でした。来年は頑張つて出稿したく思っております。ふるさとの会で皆様にお会いできることを楽しみにしています。



撮影・岡吉明

## 平成27年度柏陵同窓会 東京支部総会・懇親会開く



今年の総会・懇親会は平成27年7月11日（土）11時から、昨年と同じ学士会館にて開催されました。

梅雨の合間の好天に恵まれ、今年同窓会長に就任された竹内新会長（19回

生）始め本部から村上・石川・松井の3名の副会長・谷水前会長、大西校長、山下阪神・高見京滋・畑東海各支部長、辻丹波市長、古川兵庫県東京事務所長、大西東京兵庫県人会常任幹事、荻野丹波新聞社社長、今年も日本酒の差し入れを頂いた西山（株）西山酒造場会長の計14名のご来賓、他支部からの参加者を含め過去最多の149名、年齢も80代から20代までと近年にない幅広い参加で大盛会でした。

総会では会務報告、会計報告が承認されたほか、支部長より昨年8月16日丹波地方を襲った集中豪雨で被災された皆様へのお見舞いと一日も早い復旧、豪雨災害義援金を寄付頂いた皆様へのお礼の言葉がありました。

ご来賓のうち竹内同窓会長、大西校長、辻丹波市長、古川県東京事務所長

からご挨拶を頂いたほか、この度兵庫県議会議長に就任された石川副会長にもご挨拶頂きました。

竹内会長からは再来年の母校創立120周年記念事業に全力を挙げたい、ついでには本日の総会で寄付金を募りたいとの依頼があり、募金の結果75049円集まりました。

今年の担当幹事は昭和44年卒・21回の皆様。人数の少ない学年ですが少数精鋭で見事に対応頂きました。今年も「平成27年度柏陵同窓会東京支部総会・懇親会」の横断幕を書道師範の21回生藤原ひさ子さんに力強い見事な字で作成いただきました。



講師の酒井國安氏

恒例の柏陵セミナーは幹事学年21回生酒井國安さんの「県立柏原病院存続の危機と住民運動」と題する講演。県立柏原病院小児科

存続の危機に立上った住民運動はマスコミに大きく取り上げられました。当時病院長だった講師の詳細体験談でした。

畑東海支部長の乾杯の音頭が始まった懇親会は途中に荻野丹波新聞社長のスピーチ、参加者中の最若手57回・平成17年卒3人の紹介を挟んで、時を忘れた4時間の最後は校歌・応援歌・山下阪神支部長の音頭による万歳三唱。思いでの1ページとなるテーブル毎記念写真を手に、来年の再会を約しての解散となりました。

来年度の総会・懇親会は7月16日(土)の開催です。より多くの皆様のご参加をお待ちしています。会場は今年と同じ学生年と同じ学生会館です。

近年関東に  
来られたご友人・お知り合いが  
おられますら事務局



幹事学年の指揮で校歌斉唱

までお知らせください。

柏陵同窓会東京支部のホームページに総会風景等アップされておりますので、是非ご覧ください。

(支部長・谷口浩章記 15回生  
水上町出身)

## 東京支部総会の 幹事学年を務めて

総会に続く柏陵セミナーと懇親会は、昭和44年卒業の21回生が幹事学年を務めました。

講演会は講演者と演題の選定が成否を決めると言われますが、21回の同期から柏原病院元病院長で現在も医療監として小児科診療の酒井國安先生に講演をお願いしました。少し硬いテーマでしたが、同君が病院長時代に経験した小児科医を始めとした柏原病院の医師不足の課題が紹介されました。

遠く離れ丹波を想う東京支部会員の共感を呼び、同君の真剣な取り組みと

真摯な語り口に、興味深く聞き入りました。

小児科医の一人が退職され、7月から診療体制が厳しくなる中を東京に来て頂きました。感謝しています。

懇親会で頂きました幾多のご挨拶の中で、最も盛り上がりを見せたのが57回生石塚さん、婦木さん、吉見さんの3名。20代の若さに、やんやと喝采を受けましたが、彼らが幹事を務める年に私は100歳とはため息。

総会の締めくくりは、やはり母校3校の校歌と応援歌の斉唱。コーラス班OB3名から、21回の荻野氏と阪神支部吉見監事に指揮を、石川副会長にはエールを依頼しました。

こうして、幹事学年の次第全てを無事に終えることができ、例年のことと思いますが、慰労会に移動しお互いに労をねぎらいます。カラオケで盛り上がった曲は、赤胴鈴之助・月光仮面・怪傑ハリマオの3曲でした。

(谷 敬三記 21回生 柏原町出身)

## ◆インフォメーション

### 同好会

●氷上ゴルフ同好会、次回は139回目を迎えます！

年4回開催で歴史を誇る「氷上ゴルフ同好会」。

現在会員数40名弱と最近健康に不安が出てリタイアされる会員もあり会員数の減少に心配もありますが、若返りも図るべく新しい会員の増強に努めています。(ゲロスは70点代〜130点代といういろです)

各例会は会員の紹介もあり良いゴルフ場で安いプレー代を心がけ、茨城、千葉、埼玉、神奈川等と会場を回りながらの開催で各回の参加者20名前後で推移しています。

丹波他の地域にお住まいの同好者にも声を掛けながら、他地域との交歓も更に進めていきたいと思っています。

138回大会では丹波市へUターンされた藤田さんが久々に駆けつけて優勝されました。パーティでは丹波の話

も披露頂き楽しい例会になりました。ゴルフを楽しまれている皆様、都合の良い会場の時だけでも参加されませんか、気楽にお声を掛けて下さい。新会員大歓迎です。

ご連絡を頂ければご案内を差し上げます。ホームページにもその都度結果と予定を掲載していますのでご覧下さい。

この1年の成績は次の通りです。  
○第135回 26年9月19日 桜ヶ丘カントリークラブ



第138回大会の参加者

優勝 大野 邦江

2位 大賀 勝恵

3位 岡 吉明

○第136回 26年12月4日 森林公園ゴルフクラブ

優勝 大野 邦江

2位 京谷 建司

3位 岡 吉明

○第137回 27年3月6日 筑波カントリークラブ

優勝 上野 忠明

2位 堀 博之

3位 近藤 仁司

○第138回 27年6月5日 取手国際ゴルフ倶楽部

優勝 藤田 徹

2位 川畑 明光

3位 大野 富士夫

※

http://pec-taiyo.co.jp/hikami 又は「氷上ゴルフ同好会」で検索して下さい。

氷上ゴルフ同好会事務係 岡 吉明

☎ 048-460-1601

## ◎同好会「どんぐり会」より♪♪♪

「どんぐり会」が発足してからもう3年目に入りました。秋の「ふるさと会」において発表するべく、音楽家の笹倉 強先輩に指導していただいています。丹波への郷愁に浸りつつ、思いっきりお腹の底から声を出し、誰もが知っている歌を練習しています。

歌がお好きな方、声が出ないと心配される方も、健康のために、ご一緒に歌いませんか？ 月1回の金曜日を定例会としていますが、日程は郷友会のHPにてお確かめいただくか、世話人にお問い合わせ下さい。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

日時 毎月1回（金）午後2時～4時まで

場所 板橋区仲町区民センター B

1音楽室 東上線中板橋駅南口より徒歩8分

バス利用 赤羽駅～日大病院行 仲町

区民事務所前下車0分

池袋駅～赤羽行 仲町区民事務所前

下車1分

指導者 笹倉 強先生

楽譜 どんぐり会特製楽譜（入会時にお渡しします）

参加費 1500円（施設費&謝礼&おやつ、飲み物など）

お問い合わせ先 三贅洋子〇九〇—

四三七六一二五六八・岡田昌子

nk46297@nifty.com

\*世話人 坂上勝朗・三贅洋子・岡田

昌子

昌子

昌子

## 公演会

## ◎西崎祥さん、国立劇場で舞う

西崎祥（本名・出町京子）さんは、

この3月31日に東京・国立劇場大劇場で開かれた西崎流創舞85周年記念の「若葉会舞踊公演」に出演しました。

西崎さんは、若葉会会員らと「皿踊り」「鹿兒島はんや節」を共演すると

共演、長唄「箴の梅」を独演しました。源平時代の武将梶原景季の合戦の苦悩を表現しながら、箴に差した梅の枝を背にして雅に舞う姿を、西崎さんは凛々しい品格をにじませて踊り観客を魅了しました。

また、西崎さんはこの9月27日、柏原町の丹波の森公苑ホールで「丹波市豪雨災害復興支援」と謳うチャリティ公演を「歌と踊りの競演」として開きました。

（池田）





## ◆インフォメーション

### 展覧会

#### ◎笹倉鉄平展



こもれび〜大切な景色は消えない〜

8月13日〜19日に、画業25周年を記念して「涼しげな水辺の風景」のテーマに沿った新作30点と、最新作「モーゼルのぶどう畑と笑顔になる水辺」他、版画100点の展示即売会が、恒例の東急百貨店たまプラーザ店にて開催されました。16日には笹倉鉄平画伯のアートトークとサイン会があり、北海道から駆けつけた方や地元の方の多くの方で大盛況でした。

(井出)



モーゼルのぶどう畑と、笑顔になる水辺

#### ◎有難うございました

「山ざる」創刊以来多大なご支援をいただいたネクスタ株式会社様の本誌協

\* \* \* \* \*

賛広告が、本号をもって掲載終了となりました。

ネクスタ株式会社は、明治12年に旧水上郡沼貫（ぬぬぎ）村朝坂出身の渡辺泰造氏が創業された紙袋の製販業会社を前身とする包装関連商品の製販一体型総合商社ともいうべき会社です。グループには、ネクスタラッピイ（株）、ネクスタパッケイ（株）、ミツワ紙工業（株）があり、業界トップクラスの商品バラエティと品質・業績を誇っています。

2代目社長の渡辺金三氏が、本会とご縁の深かった方で、長く副会長を務めていただきました。その縁で、今日に至るまで本誌に多大のご支援を賜ることになったのでした。

わが郷里の誇りとする企業社名を誌上から失うことはまことに残念というほかありませんが、これも時代の流れとあればいたしかたにないこと。ますますのご繁栄を、ここからお祈りするばかりです。

(坂上)

## 演奏会

◎笹倉先生主宰のブルク・バツハ室内  
合唱団第5回演奏会開催



笹倉強先生  
が主宰し合唱  
指導と指揮を  
務められる  
「ブルク・バ  
ツハ室内合唱団第5回演奏会」が、平成27年4月18日（土）浜離宮朝日ホールで開催されました。

ブルク・バツハ室内合唱団は、埼玉県新座市や志木市を活動拠点とし、バツハを中心とした古典音楽に取り組んでいる男女混成4部合唱団です。現在の団員は50名程度。

当日のプログラムは4部から構成され、カンタータ第17番（J・S・バツハ）、モテット第3番（J・S・バツハ）、ア・カペラ5曲（バビロンの流れのほとりにて・うぐいす・5月のう

た等、カンタータ第43番（J・S・バツハ）と続きました。

演奏会は、東京セントラルフィルハーモニー管弦楽団の演奏により、笹倉先生と客員指揮者として大勝秀也先生が指揮を務められ、ソリストとして山崎千恵（ソプラノ）・星野恵理（アルト）・栗飯原俊文（テノール）・笹倉直也（バス）の各氏が出演されました。



満員の会場では、1曲ごとにブラボの声飛び交う素晴らしい室内楽の演奏会でした。

「ブルク・バツハ演奏会に参加して」  
50の手習いで合唱を始め、毎年のように東京フロイデ合唱団と豊島区合唱団で第九やレクイエム・オペラ曲等の演奏会に参加し10年になります。

今回、笹倉先生のお誘いを受け1年間ブルク・バツハの練習に参加させて頂きました。バツハの古典音楽は、ロマン派と比べると楽譜を正確に追うことが求められ、基礎の無い私は楽譜を読む力がありませんので、先生や同僚のテノールの皆さんが歌われる音を耳で追いつながら曲を覚えていきました。団員の皆さんのレベルが高いのは、笹倉先生の指導の賜物と敬服しながら貴重な1年を過ごさせて頂きました。こうして何とか演奏会に間に合わすことが出来、楽しい経験としてホツとしています。有難うございました。

（谷 敬三）

◎寄附者芳名（平成26年度）

廣瀬 一雄殿 （兵庫県東京事務所）	二〇、〇〇〇円	塚口 智殿	五、〇〇〇円	渡辺 昌彦殿	三、〇〇〇円
大西 伸弘殿 （県立柏原高校校長）	一〇、〇〇〇円	堀井 隆川殿	五、〇〇〇円	足立 美都子殿	二、〇〇〇円
谷水 克己殿 （柏陵同窓会前会長）	一〇、〇〇〇円	山口 敏之殿	五、〇〇〇円	池上 忠志殿	二、〇〇〇円
荻野 祐一殿 （丹波新聞社社長）	一〇、〇〇〇円	横幕 尚子殿	五、〇〇〇円	久下 善生殿	二、〇〇〇円
似顔絵画家・住田道人殿	八、五〇〇円	吉見 弘文殿	五、〇〇〇円	小中 克巳殿	二、〇〇〇円
若森 敏郎殿	四三、〇〇〇円	足立 和孝殿	三、〇〇〇円	谷垣 尚殿	二、〇〇〇円
菊池 洋子殿	一〇、〇〇〇円	足立 義雄殿	三、〇〇〇円	山口 泰男殿	二、〇〇〇円
岸本 勲殿	一〇、〇〇〇円	池田 和子殿	三、〇〇〇円	本城 英明殿	一、五〇〇円
中井 良平殿	一〇、〇〇〇円	上野 重喜殿	三、〇〇〇円	足立 啓介殿	一、〇〇〇円
形田 恒夫殿	八、〇〇〇円	大坪 則夫殿	三、〇〇〇円	足立 東一郎殿	一、〇〇〇円
笹倉 鉄平殿	八、〇〇〇円	絹川 正殿	三、〇〇〇円	植田 俊一殿	一、〇〇〇円
中居 篤子殿	八、〇〇〇円	古倉 良雄殿	三、〇〇〇円	大橋 美穂殿	一、〇〇〇円
野村 節三殿	八、〇〇〇円	久保 徹夫・規子殿	三、〇〇〇円	岡田 充利殿	一、〇〇〇円
米澤 紀成殿	八、〇〇〇円	近藤 龍夫殿	三、〇〇〇円	柿木 妙子殿	一、〇〇〇円
藤田 千治殿	六、〇〇〇円	勢川 武彦殿	三、〇〇〇円	久下 誠殿	一、〇〇〇円
大野 義昭殿	五、〇〇〇円	瀬々 妙子殿	三、〇〇〇円	小松 京子殿	一、〇〇〇円
荻野 武殿	五、〇〇〇円	高見 嘉都司殿	三、〇〇〇円	坂上 豊殿	一、〇〇〇円
谷口 捷殿	五、〇〇〇円	高見 秀史殿	三、〇〇〇円	鈴木 和榮殿	一、〇〇〇円
谷口 浩章殿	五、〇〇〇円	千葉 淳子殿	三、〇〇〇円	谷垣 浩樹殿	一、〇〇〇円
		鶴田 宏・ゆき子殿	三、〇〇〇円	中谷 美鶴殿	一、〇〇〇円
		南部 光殿	三、〇〇〇円	中松 美年子殿	一、〇〇〇円
		林 孝男殿	三、〇〇〇円	仁藤 欽嗣殿	一、〇〇〇円
		原 利充殿	三、〇〇〇円	久呉 道子殿	一、〇〇〇円
		藤井 住夫殿	三、〇〇〇円	福田 治子殿	一、〇〇〇円
		藤田 純殿	三、〇〇〇円	渡邊 和代殿	一、〇〇〇円
		藤田 玲子殿	三、〇〇〇円		

本誌にご協力有難うございました

創業享保元年



山名酒造株式会社

# 奥丹波

兵庫県丹波市市島町上田211  
TEL (0795) 85-0015  
<http://www.okutamba.co.jp/>

## 今、求められている

### 新しいスタイルの物流トータルサービスをあなたに

情報誌・SP販促物などの梱包・発送管理、DM発送  
データ入力等の情報処理、コールセンター、  
事務局代行、在庫管理など一連業務を代行いたします

いつでもよりよいサービスを

# BSS

## 株式会社ベターサービス

代表取締役 絹川 正 (山南町池谷)

本社：〒262-0003 千葉県花見川区宇那谷町 1501-2  
TEL：043-257-0414 FAX：043-257-2865  
<http://www.beterservice.co.jp>  
e-mail：kinugawat@beterservice.co.jp

認定NPO法人アジアの新しい風 理事長代行  
<http://www.npo-asia.org>

## 上 高 子 (氷上町出身)

〒154-0016 東京都世田谷区弦巻2-18-22-414  
TEL / FAX 03-5426-6714  
e-mail takako-ue@t05.itscom.net

アジアの有名大学で日本語を学ぶ学生を支援するNPOです。  
国税庁によって認定NPOに認定されました。当NPOへの寄附金は、  
確定申告をすることで、税額控除の対象になります。  
すなわち、寄付総額から2000円を差し引いた金額の40%が税額より  
差し引かれます。ご支援をよろしく願いたします。



エクステリア専門商社



## 株式会社 トコナメエピコス

代表取締役 広瀬 寿和 (山南町和田)

〒160-0003 東京都新宿区本塩町23 第2田中ビル  
TEL 03-3354-0211 FAX 03-3354-7767

あなたの町の「石屋さん」  
そんな石屋をめざしています！！

墓石・霊園・建築石材・造園石材

## (株) 丹波総合石材

代表取締役 堀 公二 柏高 昭和36年卒

いしやは ここよ

☎ 0120-1480-54

工場・事務所 TEL 0795-72-3032

FAX 0795-72-4343

<http://www.tanba-sekizai.com>



# くすの木 14

14 回生関東支部会

足立 悦雄	岸本 敏子
足立 義雄	仁藤 欽嗣
井出 恭子	松田けい子
井上 巖	三觜 洋子
上田 道代	村岡 勝美
岡 洋子	森田 栄子
岡田 昌子	山本 喜則
岸本 勲	

株式会社 アイ・ケイ・アイ I.K.I co.,LTD

株式会社 ホームワールド

Urban Cocoon 「風を感じる時」

暮らしに潤いと幸福感を提案・都市生活者のオアシスの店

インテリアブリックス・アパレル・雑貨全般

輸入卸&生産管理 & 小売り

代表取締役社長 岸田 勇 柏高 昭和 36 年卒

東京都中央区日本橋人形町 3-7-10 Doll3

TEL 03-3249-5261 / FAX 03-3249-5262

大和

丹波市氷上町石生水分れ

電話 (0795)82-6010

FAX (0795)82-6630

<http://tanbayamato.jp/>

# 丹波新聞

## 伝えたい 届けたい

甲冑姿で黒井城山登山  
黒井城址のPRに、甲冑姿で城山を登山。山頂にて雲海をバックに武者姿のポーズをとる地元住民ら（本紙・昨年11月9日号より）



丹波新聞社

〒669-3309

丹波市柏原町柏原201

丹波新聞

検索

tel.0795-72-0530

fax.0795-72-1956

週2回（日・木）発行 1ヶ月1,255円（郵送料205円）

### 郷友の皆様へお願い

▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て快よく、その気がねのない交りは、互いに清新なはげみを呼びおこします。そんな仲間のひろがりやを、この小誌は求めつづけます。

▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更等がありましたらぜひお知らせください。

▼関東氷上郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。

▼広告料は名刺広告五千円、半頁広告一万五千円、全頁広告三万円です。何卒ご協力お願い致します。

▼年会費の二〇〇〇円は会の運営を支える重要な資源です。同封振込用紙にてお振込みくださいますようお願い致します。

▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないとうらやましがられるたびに、「丹波のきずな」の強さを思います。

（山ざる編集部）



医療法人社団 順孝会 理事長／医学博士  
順天堂大学眼科 非常勤講師

足 立 和 孝

〒 347-0015

埼玉県加須市南大桑一六二〇一

TEL 〇四八〇六五九五九八八

FAX 〇四八〇六五二六〇九七

E-mail: kazu358@paste.ocn.ne.jp

株式会社ナレッジリンク  
足立国際会計事務所

代表取締役  
税理士・米国公認会計士 (Certificate)

足 立 知佳子

〒 152-0035

東京都目黒区自由が丘一三三四U11自由が丘ビル六〇二

TEL 〇三三七七八〇四七 FAX 〇三三七七八一四七

E-mail: cadachi@ata.gr.jp

足 立 静 雄

飯 田 光 雄

〒 285-0025

佐倉市鎗木町九八一一一一〇四

電話 〇四三一四八五〇五〇三

モンテッソーリ・スクール ひまわりこどもの家  
NPO法人小学生モンテッソーリ・スクール  
理事長・園長

池 田 和 子

行徳校

〒 272-0137 市川市福栄二一六一

本八幡校

〒 272-0823 市川市東菅野一三三三

池 田 忍

〒 247-0005

横浜市栄区桂町一一一一〇一

TEL 〇四五七八九五一二七二

金  
出  
一  
郎

岡  
田  
昌  
子

有限会社 PCC大洋

岡  
吉  
明

〒351-0014

朝霞市膝折町四-四-三〇  
TEL 〇四八-四六〇-一六〇一  
FAX 〇四八-四六〇-二三九七  
<http://www.pcc-taiyo.co.jp>

栗  
田  
功

上  
武  
正  
次

木  
呂  
子  
惠  
美  
子

坂  
上  
勝  
朗

坂  
上  
明

近  
藤  
仁  
司

合唱指揮者

笹  
倉  
強

〒 352 | 0014 新座市栄四 | 五 | 二五  
TEL・FAX ○四八 | 四七七 | 五六四○

仲 山 坂  
口 上  
一 泰  
聰 男 登

仙台市在住

坂  
上  
豊

高見嘉都司

〒173-0025  
東京都板橋区熊野町四〇番十一号  
電話 〇三―三九五六―〇六〇〇  
電話 〇三―三九七三―六〇五六

高見秀史

いい眠りと健康のためのNPO法人  
<http://www.sas-j.org/>

ファイナンシャルプランナー（CFP）  
社会保険労務士

谷敬三

東京都 豊島区  
TEL 〇三―三九七一―七八二六

谷口浩章

「柏陵同窓会東京支部」で検索いただくと  
東京支部ホームページをご覧いただけます。

株式会社 シードコーポレーション

代表取締役 千種倫幸

〒104-0061 東京都中央区銀座二丁目二―九  
電話 〇三―三五六七―九七〇〇

鶴田宏

原  
谷  
洋  
美

西  
山  
裕  
三

〒669-4302 兵庫県丹波市市島町  
中竹田 一一七一

日本舞踊  
西崎 祥  
端唄 根岸 妙

〒224-0027 横浜市都筑区大圃町五〇〇-一八  
電話 〇四五-五九一-六六五五

渡  
邊  
隆  
男

若  
森  
敏  
郎

〒302-0023 茨城県取手市白山五-四-一三

青葉山 眞照寺 都立八王子霊園隣り  
八王子 青葉霊苑 第二期墓地分譲案内中  
和合廟(永代供養墓) 受付中  
住職 堀井 隆川

〒193-0821 東京都八王子市川町四九三-一二  
電話 〇四二-六五二-〇一〇一  
FAX 〇四二-六五二-〇三三三

集	編
記	後

★業界元米国NY駐在員の新年会に、NY駐在経験の無い小生も、誘われ参加した。商社・メーカー

IOBで、同時期に活躍され、お世話になった方々である。御母堂が丹波の出で、仕事で四十年来の知己が、台湾駐在から帰国され、春に2年振りに会った。ここ4年間日本語学習サポートをし、日本語検定一級に合格、年初大学院修士課程合格の中国人の知人に、夏季休暇中に会った。現在アフリカ人留学生の奥さん等の日本語学習サポート中である。旧交を温め、新しい出会いで、互いに刺激し合える交流は愉快な事である。(大野)

★「マイギャラリー」欄も今年で3年目。趣味の絵画や写真を投稿頂き、皆さんの技術の高さに感心しながら編集作業が出来ました。来年も自薦、他薦大いに結構、又、工作、編物、パッチワーク、刺繍、人形作りなど何でも結構です。沢山のご投稿が頂ける事を期待しております。(岡)

★「昭和30年代までの佐治川は、この本郷・稲継あたりで大きく蛇行し、あのゴ

ミ焼却場よりも西を流れていました」と言うのと初老の人でも「ウソでしょう」。当時の地図は実に貴重な証人です。(徳田)

★文芸欄が創設されて五年目です。号を重ねるにつれて寄稿者も増え充実してゆきます。四十六号では短編の「語り座」も登場し、ジャンルも分厚くなりました。ふるさと丹波を通奏底音とし、丹波の香りや底力の漲るページを、ぜひ一緒に創りましょう！ たくさんの投稿をお待ちしております。(原谷)

★本稿で成松川裾祭りを書かせていただき、伝統の大切さを改めて感じました。その大切さを「山ざる」にも活かしていきたいと思っております。(本城)

★御尊父文亀画伯に続き山ざるの表紙を飾って下さった常岡幹彦画伯(18〜36号)、NHKでご活躍され、山ざる「私の職場」や「エッセイ」に登場していただいた上野重喜様、毎年早々にユニークな日記風エッセイ「折々の記」の長文を投稿して下さいました井本義一様、がご逝去されました。「山ざる」にてお世話になりましたこと、感謝致しますとともにご

冥福をお祈り申し上げます。

長期に亘り「山ざる」発行に編集協力として多大なご尽力をいただいた池田忍様が退任され、今号からダイワコムズ様に替わりました。池田様のお優しい視点と寛大なる受容性を忘れることなく今後活かしていきたいと思えます。教わることばかりでした。有難う御座いました。ダイワコムズ様よろしく。(岡田)

## 山ざる 第46号 定価500円

平成二十七年十一月一日発行

〈編集委員〉

井出恭子	井徳省吾	石橋順子
上 高子	大野義昭	岡 吉昭
岡田昌子	木呂子恵美子	坂上勝朗
鶴田ゆき子	徳田八郎衛	原谷洋美
藤原ひさ子	本城英明	安井孝之

発行者 関東水上郷友会会長 坂上勝朗

〒351-0014 埼玉県朝霞市膝折町4-4-30

関東水上郷友会事務局(岡吉明)

☎〇四八(四六〇)一六〇一  
振替〇〇二一〇三一三三三三〇

製 作 株式会社ニ玄社  
編集協力 ダイワコムズ

# 三協運輸 株式会社

本店住所 埼玉県桶川市坂田字向990-1

創立30周年を迎え、お陰様でつつがなく発展しております。

東海道を中心に大型トラック約200輛

最新鋭設備を備えた物流センター及び倉庫約12,000坪  
を軸に毎日フル稼働の体制で活動して参ります。

[安全・安心・朗らかに]を旗印にご期待に応じて参ります。



本店 新社屋(敷地面積4,000坪、建物面積2,000坪) 平成23年10月1日完成



関東発一関西行の風景

出発直前の大型トラック部隊

毎日200台の車輛群が東海道を  
中心に走っております。

〔主要取引先〕 順不同

三井化学(株) 味の素(株) ダイキン工業(株) アサヒビール(株) 三菱商事(株)  
キリンビール(株) 沖電気工業(株) 古河電気(株) ハウス食品(株) 帝人(株)  
新神戸電機(株) (株)東芝 キューピー(株) (株)ブリヂストン 江崎グリコ(株)

# 三協運輸 株式会社

代表取締役会長 岸本 勲(氷上町出身)

本 店 埼玉県桶川市坂田字向990-1 TEL. 048 (728) 9380  
E-mail : sankyounyu\_saitama@h6.dion.ne.jp

本店配車センター 埼玉県桶川市坂田字向990-1 TEL. 048 (729) 0466  
大阪支店 大阪府大東市新田中町3-3 TEL. 072 (806) 2821

物流倉庫所在地 東京・埼玉・神奈川・名古屋・大阪

書写指導の第一人者による書き込み式練習帳の決定版！

# きれいな文字の書きかた

## 〔書き込み式練習帳〕



宮澤正明 著

なぞり書きを交えながら実際に鉛筆やペンで反復練習。ひらがな・漢字の練習から、ハガキ・手紙の書き方まで、きれいな文字が身につく練習帳。 B5判・160頁●1500円+税



小学校で学んだ漢字を、きれいなくずし字で！

# 大人が学ぶ小学校の漢字

## 〔なぞり書き練習帳〕



宮澤正明 著

教育漢字1006字について楷・行・草書の三書体をマスター。小学校レベルの漢字を練習するだけで、キレイなくずし字が気軽に身につく練習帳。 B5判・160頁●1500円+税



線の戯れのなかに画家の素顔がのぞいている。

# 世界の素描 1000の偉業



ヴィクトリア・チャールズ 他著  
棚山昌夫 日本語版監修・翻訳

中世の写本から20世紀の絵画まで、世界の美術館に秘蔵されてきた素描の数々を一冊で紹介。 210×165mm判・544頁●7500円+税



美のエンサイクロペディア

世界の**名画** 1000の偉業 ●6000円+税

300を超える世界遺産を収録

世界の**建築** 1000の偉業 ●6500円+税

他に類を見ない初の西彫刻大全

世界の**彫刻** 1000の偉業 ●6500円+税

人間のあらゆる顔と姿がある

世界の**肖像** 1000の偉業 ●6500円+税



**ニ 玄 社**

会長 渡邊隆男